

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol.11 1999年度



The Board of Education in Oita City 2000

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol.11 1999年度

The Board of Education in Oita City 2000

序 文

本書は、平成11年度に実施いたしました埋蔵文化財発掘調査の概要及び文化財保護行政全般にわたる活動記録を収録したものです。

本市は、「心かよい 緑あふれる 躍動都市」を標榜し、県都として、さらに中核都市としての風格を備えた魅力あふれるまちづくりを推進しています。「2010大分市総合計画」では21世紀のまちづくりの方向を明確にし、大分駅高架と周辺総合整備事業などそれぞれの地域において特色あるまちづくり事業が着実に進展を見せています。

一方、近年における大規模な開発の増加に伴い文化財保護法に基づく届け出が急増し、文化財保護と開発事業との調整や発掘調査の適切な実施が強く望まれているところでございます。本市教育委員会では、こうした諸課題に向けてより一層の取り組みを図るとともに、文化財保護と開発との円滑・迅速化、さらに文化財を愛護・活用する郷土愛豊かな市民の育成に努めて参りたいと考えております。

さて、今回ご報告いたします追跡調査の成果は、本市の歴史を紐解く上でいずれも重要であります。なかでも、大友館跡の調査では、前年度に引き続いて庭園跡と土塁跡の追跡調査を行い、北へ続く土塁跡や庭園の規模など館の変遷や内部構造についての新知見をえることができましたことは、今後の国史跡指定にむけての着実な前進と考えております。

また、中安道跡や下郡道跡の調査では、「郡衙」跡と推定される整然と立ち並ぶ大型建物跡群や関連施設の一角が発見され、全国的に注目されました。さらに豊後地域で初例となる奈良時代の窯跡（松岡古窯跡群）の発見は、本地域の窯業史に一石を投じる成果となりました。

本書が今後の文化財保護並びに学術研究に対するご理解を深める一助となり、さらに、広く市民の皆様にご利用され、郷土の歴史研究に幅広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめとする本市文化財保護行政にご理解・ご協力いただきました皆様並びに関係各位に対しまして衷心より感謝申し上げます。

平成12年12月27日

大分市教育委員会
教育長 清瀬 和弘

例 言

1. 本書は大分市域において大分市教育委員会が平成11年4月1日から平成12年3月31日の間に行った埋蔵文化財に関する事業内容についてまとめた年報である。
2. 平成11年度における調査地点は表2および第3図に示している。
3. 本書の執筆は各担当者が分担して行い、文末に執筆者名を記している。
4. 第IV章受贈図書目録は、平成11年4月1日から平成12年3月31日の期間中に大分市教育委員会文化財課に受贈された書籍等を掲載した。
5. 第IV章受贈図書目録の作成は井口あけみ、瓜生恭子、衛藤友里子、（大分市教育委員会文化財課 臨時職員）による。
6. 遺構・遺物の整理、実測および図版の作成等において、穴井民子、池爪由紀子、伊東祥子、井口あけみ、今村信子、内田順子、沖本美和子、小田原由美、甲斐光代、黒田きくみ、後藤貴子、菅真奈美、高木麻奈美、堤美智代、藤内美佐、西田昌代、野崎香織、野崎豊子、羽田裕子、飛高裕子、平田美智子、藤田貴子、町田ユカリ、三重野京子、宮本早苗、宮成美恵、栗師寺流美加、結城由利恵（以上大分市教育委員会文化財課臨時職員）の協力を得た。
7. 本文中に掲載した現場写真は各担当者が撮影したものである。
8. 本文中に掲載した地図は、大分市都市計画図（縮尺は1万分の1）の該当部分を使用した。
9. 本書の編集・校正は永松および井口が行った。

目 次

第Ⅰ章	大分市教育委員会教育総務部文化財課概要	1
1	沿 革	1
2	組 織	1
3	大分市文化財保護審議会	2
第Ⅱ章	平成11年度事業概要	3
1	開発事前審査事業	3
(1)	平成11(1999)年度の概要	3
2	発掘調査事業	5
3	教育普及活動	10
(1)	第6回 海部のまつり 古墳説明会	10
(2)	道跡現地説明会	10
(3)	研修参加	10
(4)	出土遺物の貸し出し	11
第Ⅲ章	発掘調査内容の概要	12
I	下部道跡群第115次調査 F区j～r-6～8地点	12
II	下部道跡群第118次調査 I区s-7地点	20
III	下部道跡群第119次調査 D区o-16・17地点	22
IV	下部道跡群第120次調査 H区g・r-16・17地点	24
V	下部道跡群第121次調査 G区p-2地点	32
VI	下部道跡群第122次調査 E区m・n-16・17地点	34
VII	下部道跡群第123次調査 B区d-15地点	38
VIII	下部道跡群第124次調査 J区r・s-8地点	40
IX	横尾道跡群確認調査	42
X	横尾道跡群第75次調査 C-26・27地点(多武尾道跡)	44
XI	横尾道跡群第76次調査 C-25地点(多武尾道跡)	46
XII	横尾道跡群第77次調査 C-15・22地点	48
XIII	横尾道跡群第78次調査 C-22地点	50
XIV	大友氏館跡第3次調査	52
XV	大友氏館跡第4次調査	58
XVI	大友氏館跡第5次調査	60
XVII	上野大友館(上原館)跡第2次調査	62
XVIII	上野大友館(上原館)跡第3次調査	64
XIX	中世大友府内町跡第12次調査	66
XX	府内城・城下町跡第13次調査	70
XI	南金池道跡第1次調査	72
XII	大分駅周辺総合整備事業に伴う試掘調査	74
XIII	玉沢条里跡道跡	77
XIV	松岡古窯跡群	83
XV	中安道跡第2次調査	87
第Ⅳ章	受贈図書目録	94
1	調査報告書	94
2	定期刊行物・図録等	107

挿図目次

第1図	地域区分図	3
第2図	地区別事前審査割合	4
第3図	調査遺跡位置図	6
下部遺跡群第115次調査 F区j~r-6~8地点		
第4図	調査地点位置図	12
第5図	調査区全景1(東方向から)	12
第6図	調査区全景2(上部が北)	12
第7図	115SB1602完掘状況(南方向から)	13
第8図	115SE0813検出状況	13
第9図	主要遺構配置図(1/700)	14
第10図	115SX0427検出状況	15
第11図	115SX0322遺物出土状況	15
第12図	115SX0450遺物出土状況	15
第13図	115SX0450出土遺物実測図1(1/6)	16
第14図	115SX0450出土遺物実測図2(1/4)	17
第15図	115SX0450出土遺物実測図3(1/4)	18
第16図	115SX0069調査状況(東方向から)	19
第17図	道路状遺構(115SX0069)土層断面	19
下部遺跡群第118次調査		
第18図	調査地点位置図	20
第19図	遺構配置図(1/200)	20
第20図	118ST001人骨出土状況	21
第21図	118SH052完掘状況	21
下部遺跡群第119次調査 D区o-16・17地点		
第22図	調査地点位置図	22
第23図	遺構配置図(1/200)	22
第24図	119ST005人骨出土状況	23
下部遺跡群第120次調査 H区g~r-16・17地点		
第25図	調査地点位置図	24
第26図	調査区全景(東方向から)	24
第27図	遺構配置図(1/300)	25
第28図	120SE1090遺物出土状況	26
第29図	120SX1080遺物出土状況	26
第30図	120SE1090出土遺物実測図1(1/6)	27
第31図	120SE1090出土遺物実測図2(1/6)	28
第32図	120SE1350完掘状況	29
第33図	120SX1420土師器短頸壺出土状況	29
第34図	120SX1420土師器短頸壺出土状況	29
第35図	120SX2715検出状況	30
第36図	120SD1200遺物出土状況	31
下部遺跡群第121次調査 G区p-2地点		
第37図	調査地点位置図	32
第38図	出土遺物実測図(1/3)	32
第39図	調査区全景(南方向から)	33
第40図	遺構配置図(1/250)	33
下部遺跡群第122次調査 E区m~n-16・17地点		
第41図	調査地点位置図	34
第42図	調査区全景(南方向から)	34
第43図	遺構配置図(1/400)	34
第44図	中世前半期遺構出土遺物実測図(1/4)	35
第45図	122SE174完掘状況(北方向から)	35
第46図	122SE437青磁碗出土状況(西方向から)	35
第47図	中世後半期遺構出土遺物実測図(1/4)	36
第48図	近世墓出土土師器実測図(1/4)	36
第49図	122SP156遺物検出状況(南東方向から)	36
第50図	122SP204遺物出土状況(西方向から)	36
第51図	墨書板状木製品赤外線写真	37

下郡遺跡群第123次調査 B区d-15地点

第52図	調査地点位置図	38
第53図	調査区全景（北方向から）	38
第54図	土層断面模式図（1/30）	38
第55図	遺構配置図（1/400）	39
第56図	出土遺物実測図（1/4）	39

下郡遺跡群第124次調査 J区r・s-8地点

第57図	調査地点位置図	40
第58図	調査区全景（西方向から）	40
第59図	124SH053完掘状況	40
第60図	124SH081完掘状況（東方向から）	41
第61図	遺構配置図（1/300）	41

横尾遺跡群確認調査

第62図	調査地点位置図	42
第63図	横尾地区確認調査位置図（1/6,000）	43

横尾遺跡群第75次調査 C-26・27地点（多武尾遺跡）

第64図	調査地点位置図	44
第65図	SD015出土遺物（1/300）	44
第66図	遺構配置図（1/300）	45

横尾遺跡群第76次調査 C-25地点（多武尾遺跡）

第67図	調査地点位置図	46
第68図	SB050出土遺物実測図（1/3）	46
第69図	SX200平面実測図（1/100）	46
第70図	SX130平面断面実測図（1/60）	47
第71図	遺構配置図（1/400）	47

横尾遺跡群第77次調査 C-15・22地点

第72図	調査地点位置図	48
第73図	調査区全景（上部が南）	48
第74図	遺構配置図（1/300）	49
第75図	SK260遺物出土状況（北から）	49

横尾遺跡群第78次調査 C-22地点

第76図	調査地点位置図	50
第77図	調査区全景（上部が東）	50
第78図	遺構配置図（1/300）	51
第79図	SK051遺物出土状況	51

大友氏館跡第3次調査

第80図	調査地点位置図	52
第81図	調査区全景	52
第82図	石製礎建物跡全景（南方向から）	52
第83図	玉砂利検出状況	52
第84図	遺構配置図（1/500）	53
第85図	庭園状遺構平面図（1/200）	54
第86図	庭園遺構切り合い概念図	55
第87図	庭園遺構土層断面図（1/120）	55
第88図	I期庭園遺構出土遺物実測図（1/3）	56
第89図	京都系土師器大量廃棄A出土遺物実測図（1/3）	56
第90図	京都系土師器大量廃棄B出土遺物実測図（1/3）	56
第91図	Ⅲ期庭園状遺構出土遺物実測図（1/3）	57
第92図	糸切り土師器出土状況	57
第93図	京都系土師器集中廃棄A出土状況	57
第94図	I期庭園状遺構護岸石全景	57
第95図	Ⅲ期庭園状遺構景石全景	57

大友氏館跡第4次調査

第96図	調査地点位置図	58
第97図	遺構配置図（1/100）	58
第98図	SD001・SX002・SD003・SD006・SD007土層図（1/60）	59
第99図	SD004出土遺物（1/3）	59
第100図	SX002出土遺物（1/3）	59
第101図	SD006出土遺物（1/3）	59

第102図	SD003出土遺物 (1/3)	59
大友氏館跡第5次調査		
第103図	調査地点位置図	60
第104図	遺構配置図 (1/100)	60
第105図	土塁跡 (SX020) 土層図 (1/60)	61
第106図	掘立柱建物跡 (SB001) 平面・断面図 (1/80)	61
第107図	SB001出土遺物 (1/4)	61
第108図	SE011出土遺物 (1/4)	61
第109図	SK026出土遺物 (1/4)	61
上野大友館 (上原館) 跡第2次調査		
第110図	調査地点位置図	62
第111図	調査区位置図	62
第112図	南北土塁土層断面図 (1/100)	62
第113図	SX003・SK004出土遺物実測図 (1/4)	63
第114図	館内部地区柱穴・包含層出土遺物実測図 (1/2・1/4)	63
第115図	SX003・SK004・Pit 3 遺構実測図 (1/50)	63
上野大友館 (上原館) 跡第3次調査		
第116図	調査地点位置図	64
第117図	調査区位置図	64
第118図	土塁土層断面図 (1/120)	65
第119図	北側土層	65
第120図	南側土層	65
府内城・城下町跡第12次調査 (米屋町)		
第121図	調査地点位置図	66
第122図	遺構配置図 (1/300)	66
第123図	SD201・SD203出土遺物実測図 (1/3)	67
第124図	土塁遺構土層図 (1/100)	67
第125図	調査区全景空中写真	68
第126図	SK044土層	68
第127図	SK044出土クレイパイプ	68
第128図	SK017陶磁器出土状況	68
第129図	SK017出土土焼文字を有する磁器実測図 (1/4)	69
府内城・城下町跡第13次調査		
第130図	調査地点位置図	70
第131図	調査区全景	70
第132図	遺構配置図 (1/80)	71
南金池遺跡第1次調査		
第133図	調査地点位置図	72
第134図	遺構配置図 (1/500)	72
第135図	SK026土器出土状況	73
第136図	調査区全景 (東方向から)	73
第137図	SK026出土遺物実測図	73
大分駅周辺総合整備事業に伴う試掘調査		
第138図	調査地点位置図 (1/20,000)	74
第139図	No.26地点遺構検出状況	74
第140図	No.26地点遺物出土状況	74
第141図	駅南区画整理地区内・試掘確認調査地点位置図 (1/5,000)	76
玉沢条里跡遺跡		
第142図	調査地点位置図 (1/20,000)	77
第143図	第Ⅰ調査区全景	77
第144図	玉沢条里跡遺跡発掘区・試掘トレンチ及び保存地区 (1/3,200)	78
第145図	第Ⅰ調査区遺構配置図 (1/800)	79
第146図	第Ⅱ調査区遺構配置図 (1/1,000)	80
第147図	第Ⅱ調査区全景	81
第148図	SX-51	81
第149図	SX-25	81
第150図	第Ⅲ調査区遺構配置図 (1/500)	82
松岡古窯跡群		
第151図	調査地点位置図	83

第152図	松岡古窯跡群分布図 (1/7,500)	83
第153図	3号窯跡平面・断面図 (1/40)	84
第154図	出土遺物実測図 (1/3・1/4)	85
第155図	1号窯跡 (灰原の状況)	86
第156図	2号窯跡 (完備状況)	86
第157図	3号窯跡 (完備状況)	86
第158図	4号窯跡 (完備状況)	86
中安遺跡第2次調査		
第159図	調査地点位置図	87
第160図	円面硯実測図 (1/3)	87
第161図	出土遺物実測図 (1/3)	87
第162図	四面庇建物跡 (SB935・940) 柱痕確認時平面実測図 (1/80)	87
第163図	古代主要遺構配置図 (1/600)	88
第164図	第1期遺構配置図 (1/600)	89
第165図	第2期遺構配置図 (1/600)	89
第166図	第3期遺構配置図 (1/600)	90
第167図	古代主要遺構検出状況 (南方向から)	91
第168図	第1期SX700出土遺物実測図 (1/3)	92
第169図	第2期SX625出土遺物実測図 (1/3)	93

表 目 次

表 1	開発事前審査件数一覧	4
表 2	大分市平成11年度発掘調査地一覧	7
表 3	大分市平成11年度試掘調査地一覧	8
表 4	試掘・確認調査一覧	75

第Ⅰ章 大分市教育委員会文化財課概要

1. 沿革

昭和51年4月1日	大分市教育委員会社会教育課内に文化財係を設置
昭和59年6月28日	大分市教育委員会社会教育課文化財係を大分市教育委員会社会教育課文化財室に改組
平成5年4月1日	大分市教育委員会文化振興課文化財室に改組
平成10年4月1日	大分市教育委員会生涯学習課文化財室に改組
平成12年4月1日	大分市教育委員会文化財課に改組

2. 組織

生涯学習課	課長	園田裕彦	歴史資料館（文化財課に改組）	館長兼学芸調査係長	木村幾多郎（参事兼館長）
	課長補佐	秦 刀 修 一（平成12年度～）	管理係	係長	竹友 邦彦
文化財室	主幹	玉 永 光 洋	学芸業務係	係長	佐藤 則（平成12年度～）
	室長	植田正巳（文化財係長）	主査	清松直人	
指導主事	主査	讃岐和夫	主 任	太田富雅宣（学芸業務係）	
	指導主事	後藤誠典 幸（歴史資料館）	主 任	武田弘通（学芸業務係）	
指導主事	指導主事	藤沢敏夫（歴史資料館）	技術員	中 西 武 尚（学芸業務係技師）	
	指導主事	甲斐 猛 徳（平成12年度～）	嘱託	藤 田 米 蔵	
主任技師	主任技師	姫野公貴美代（平成12年度～）	嘱託	広 連 広 治	
	主任技師	安部 裕 美（平成12年度～）			
主任技師	主任技師	塔 鼻 光 司			
	主任技師	坪根 伸 也			
技師	技師	池 邊 千太郎			
	技師	高 昌 豊			
技師	技師	河野 史 郎			
	技師	塩 地 潤 一			
事務員	事務員	三浦 垂 紀（平成12年度～）			
	嘱託	杉崎 重 臣			
嘱託	嘱託	奥村 義 貴			
	嘱託	神尾 至 文			
嘱託	嘱託	佐藤 道 二			
	嘱託	荻 幸 史			
嘱託	嘱託	小野 貴 史（平成12年度～）			
	嘱託	田中 貴 史（平成12年度～）			
嘱託	嘱託	佐藤 孝 則（平成12年度～）			
	理財課付				
嘱託	嘱託	羽田野 達 郎			
	嘱託	大野 康 弘			
下郡土地区画整理事務所付	嘱託	楊 原 嘉 明			
	嘱託	横山 步			
嘱託	嘱託	早田 利 宏			
	嘱託	宮田 剛（平成12年度～）			
嘱託	嘱託	羽田野 裕 之（平成12年度～）			
	横尾土地区画整理事務所付				
嘱託	嘱託	宮川 泰 男			
	嘱託	永松 正 大（事務員）			
嘱託	嘱託	上野 淳 也（平成12年度～）			
	嘱託	小住 武 史（平成12年度～）			

※（ ）内は平成12年度

大分市教育委員会事務局組織規則（大分市教育委員会規則第5号第8条：抜粋）

文化財課

- (1) 文化財の調査、保存及び整備に関すること。
- (2) 文化財保護思想の普及啓発に関すること。
- (3) 文化財保護審議会に関すること。
- (4) 歴史資料館、海部古墳資料館、毛利空桑記念館、池見家住宅その他文化財施設の管理に関すること。

3. 大分市文化財保護審議会

大分市文化財保護審議会委員

	【氏 名】	【勤務先・職名】	【担 当】
会 長	佐 藤 真 一	元荷揚町小学校長	動 植 物
副 会 長	豊 田 寛 三	大分大学・教育学部長	近 世
	北 野 隆 隆	熊本大学・教授	建 造 物
	日 高 隆 隆	日本文理大学・講師／前上野丘高校前校長	地 質 館 物
	橋 本 昌 信	別府大学・教授	考古埋蔵
	橋 本 操 六	大分大学・非常勤講師／前県総務課参事	中 世
	西 野 元 日	広島大学・文学部助教授	古 代
	宗 像 健 一	大分県教委・教育文化係長兼指導主事	美 術
	友 永 尚 子	大分県立芸術会館・主幹芸員	工 芸
	小 泊 立 矢	大分県立先哲史料館・副館長	民 俗

大分市文化財保護審議会条例（平成11年12月15日条例第42号）

- (設 置)
- 第1条 文化財保護法（昭和25年法律第214号）第105条の第1項の規定に基づき、大分市教育委員会（以下「教育委員会」という。）に大分市文化財保護審議会（以下「審議会」という。）を置く。
- (組 織)
- 第2条 審議会は、委員10人以内をもって組織し、学識経験者のうちから教育委員会が委嘱する。
- (任 期)
- 第3条 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 2 委員は、再任を妨げない。
- (会長及び副会長)
- 第4条 審議会に会長及び副会長1人を置き、委員の互選により選出する。
- 2 会長は、委員会を代表し、会務を総理する。
- 3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。
- (会 議)
- 第5条 審議会の会議（以下「会議」という。）は、会長が招集し、会長がその議長となる。
- 2 会議は、委員の過半数が出席しなければ、これを開くことができない。
- 3 会議の議事は、出席委員の過半数でこれを決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 4 会長は、必要があると認められるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。
- (部 会)
- 第6条 審議会に、教育委員会規則の定めるところにより、部会を置くことができる。
- (庶 務)
- 第7条 審議会の庶務は、教育委員会事務局において処理する。
- (委 任)
- 第8条 この条例に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、会長で定める。

附 則 抄

(施行期日)

- 1 この条例は、平成12年4月1日から施行する。
(大分市文化財調査委員会条例の廃止)
- 2 大分市文化財調査委員会条例（昭和51年大分市条例第4号）は、廃止する。

第二章 平成11年度事業概要

1 開発事前審査事業

(1) 平成11(1999)年度の概要

表1は平成11年度における開発申請内容を示したものである。

平成11年度の申請総面積は570,309.81㎡、総申請件数98件を数える。

その内訳は、開発計画事前審査申請9件、開発行為事前協議申請53件、開発行為変更事前協議申請2件、宅地造成工事前協議申請17件、墓地経営関係3件、土地売買等の届出14件である。また、本年度は開発行為事前審査申請、大規模土地取引事前指導申請、都市計画法32条協議申請、事業計画事前審査申請、開発協議会における質問事項、市街化調整区域における大規模開発については申請件数が0件であった。

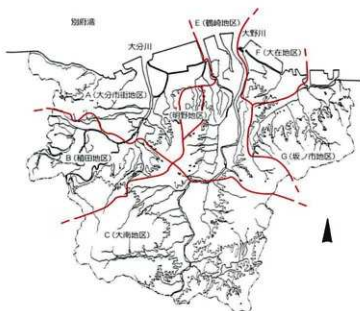
これを平成10年度の申請内容と比較すると、総件数では約10%の減少がみられる。これは宅地造成工事前協議が増加しているものの、大規模土地取引事前指導申請が前年22件が0件と落ちこんでいることが大きな要因といえよう。また、これは小規模開発(個人開発)は増加傾向であるが、大型計画が計画されていない事を如実に現しているといえよう。

次に、数年来減少傾向にあった申請面積は、本年になって激減している。なんと前年比で75%減、昨年度の1/4ということになる。大南地区は、昨年と近似しているが、特に、植田地区と坂ノ市地区は前年の5%以下の申請となっている。ただしこれは昨年度に大型の開発が計画されたためであり、一過性のものと考えられる。

申請エリアに関しては、昨年度が大分市街地区(A)で全体の3割を占め、他地区ではほぼ平均化されていたが、本年度は大分市街地区(A)と明野地区(D)に開発申請が集中しており、2地区で大分市全体の約70%を占めている。これは、今後の発掘調査件数の増加の要因となると考えられる。

本年の特徴としては、前述のとおり申請面積が激減したことがあげられる。前年比で1/4に減少しており、昨年は一時的に増加傾向が認められたものの、やはり長引く経済不況の影響が如実に現われているといえよう。

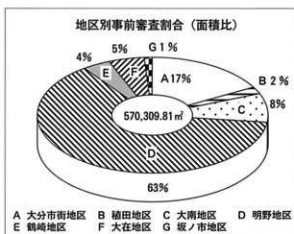
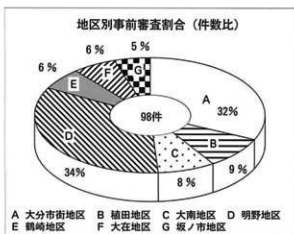
(塔鼻)



第1図 地域区分図

表1 開発事前審査件数一覧

地区名	A-大分市街地区	B-穂田地区	C-大南地区	D-明野地区	E-鶴崎地区	F-大在地区	G-坂ノ市地区	合 計
【開発計画事前審査申請】								
件数	2	0	1	4	0	2	0	9
面積 (㎡)	21,341.19	0	11,335.78	67,384.98	0	14,006.69	0	114,068.64
【開発行為事前協議申請】								
件数	20	4	5	16	3	3	2	53
面積 (㎡)	56,487.94	5,464.71	35,356.70	52,280.67	4,061.75	11,955.06	5,212.38	170,819.21
【開発行為変更事前協議申請】								
件数	0	0	0	1	1	0	0	2
面積 (㎡)	0	0	0	201,227.46	17,556.7	0	0	218,784.16
【大規模土地取引事前指導申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【宅地造成工事前協議申請】								
件数	6	2	1	8	0	0	0	17
面積 (㎡)	3,255.20	5,105.11	585.32	12,057.09	0	0	0	21,602.72
【都市計画法32条協議申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【土地売買等の届出】								
件数	3	2	0	4	2	1	2	14
面積 (㎡)	8,659.07	2,140.11	0	26,574.09	2,453.33	1,594.00	3,197.10	44,617.7
【墓地経営に関する事前審査】								
件数	0	1	1	0	0	0	1	3
面積 (㎡)	0	294	3.38	0	0	0	120	417.38
【事業計画事前審査申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【開発協議会における質問事項】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【市街化調整区域における大規模開発】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【総合計】								
件数	31	9	8	33	6	6	5	98
件数比 (%)	32%	9%	8%	34%	6%	6%	5%	100%
面積 (㎡)	80,743.40	13,003.93	47,281.18	360,124.29	24,071.78	27,555.75	8,529.48	570,309.81
面積比 (%)	17%	2%	8%	63%	4%	5%	1%	100%



第2図 地区別事前審査割合

2 発掘調査事業

旧石器・縄文時代

今年度行われた調査では旧石器時代の所産と考えられる遺構・遺物は確認されなかった。

縄文時代については玉沢地区条里遺跡群第2次調査で縄文時代晩期のか穴を18基検出している。遺物として縄文時代後期から晩期の土器（鉢類）や姫島産黒曜石製石鏃等が出土している。

弥生時代

弥生時代に関しては、下部遺跡群第115・118～124次調査、横尾遺跡群第75～78次調査、中安遺跡第2次調査、玉沢地区条里遺跡群トキワさだ新都心センター地区で確認されている。特に玉沢地区条里遺跡群第2次調査では、調査地西側で自然の流路を利用した弥生時代の水田耕作に関わる灌漑施設が検出され、水田への取水口には祭祀用と思われる小形甕が出土した。さらに、東側Ⅲ地区では、弥生時代中期から後期にかけての埋納土器や配石が検出された。なかには掘り込みを持つものや幼児用埋納墓、石棺、環状集石遺構等が確認され、弥生時代の墓域の範囲を把握することができた。

また、弥生時代中期の遺構として、下部遺跡群で環濠、井戸、墓、貯蔵穴、竪穴住居跡、土坑等が検出され、特に第120次調査は二重の溝を巡らせた環濠集落であり、土坑埋土から銅鏃が出土している。また、中安遺跡第2次調査では、竪穴住居跡が数基検出され、井戸跡から銅鏃が出土している。横尾遺跡群でも竪穴住居跡等が確認されている。

（後藤）

古墳時代

当該期の遺構は、下部遺跡群第115・119・120・124次調査、横尾遺跡群第77・78次調査、中安遺跡第2次調査、玉沢地区条里遺跡群第2次調査で若干検出されている。玉沢地区条里遺跡群第2次調査、弥生時代に続き、Ⅰ区～Ⅲ区の広い範囲から溝状遺構が検出され、この時代、この地域はすでに広い範囲に渡って水田耕作が行われていたと思われ、その後古代の条里に受け継がれていくと考えられる。今回の調査で七瀬川左岸と雄城台に挟まれた沖積地の土地利用を検討する上で良好な資料を提供することができた。また、中安遺跡第2次調査では後期の竪穴住居跡等が確認されている。

（後藤）

古代

今年度は、注目すべき重要な発見が相次いだ。

中安遺跡第2次調査では、飛鳥時代から奈良時代にかけての官衙遺構が検出され、3時期にわたる遺構変遷が確認されている。特に8世紀初頭～前半に位置づけられる第2期には方形の大形柱穴を有する掘立柱建物群がし字状に配列されていることが確認されたほか、四脚門の柱穴も確認されており、コの字形あるいはロの字形の典型的な官衙のプランであったことが推定された。このためこの遺構群は群衙政庁の中心遺構である可能性が高いと推定され、古代海部郡の政庁跡に比定できる可能性が高い。これに先行する第1期（7世紀後半～末）にも規格的に配置された建物跡群や道路状遺構が検出されており、前身となる官衙遺構である可能性が高いと考えられる。また整地跡を挟む第3期（8世紀後半）にも調査範囲内では建物配置の詳細が不明ながら、大型建物跡群が検出されている。このように今回の調査では同一地点において遺構の変遷が連続的に追える点でもきわめて貴重な発見といえよう。

大分郡跡に比定されている下部遺跡群第115次調査では、8世紀中頃の規格的配置を有する大型掘立柱建物跡をはじめ、土器焼成坑や多量の遺物を包含する大型廃棄土坑、井戸跡など多数の遺構が検出された。これらについては調査地点の西側に所在が想定される郡衙政庁に付随する、顕著的な性格を持つことと推定されている。

下郡道跡群第120次調査では第90次調査の成果とあわせ、8世紀中頃～後半に規格的配置がなされた掘立柱建物跡群が検出された。この他、祭祀的な遺構も検出されており、当該期の郡衙周辺域における場の意味づけに迫る資料になることが期待される

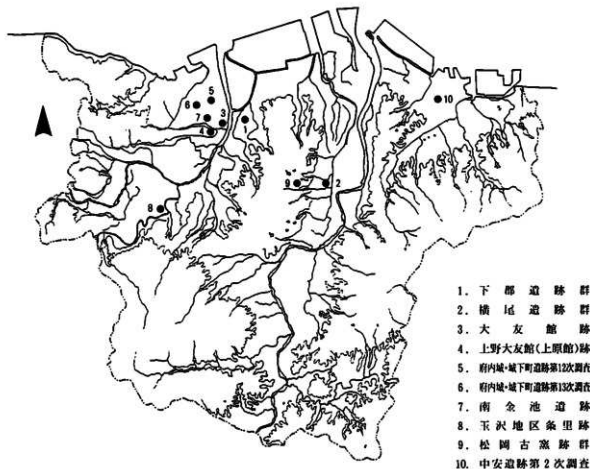
(高島)

中世

大友館については、昨年度の調査結果を受けて国史跡指定に向けての確認調査が行われている。第3次調査地点では総延長60mにも及ぶ庭園遺構の規模が確認され、15世紀後半以降16世紀末の館廃絶に至るまで、3時期にわたる変遷が明らかとなった。また、庭園遺構においては大友館内部で初めての例となる土師器大量廃棄が検出され、大名居館に特徴的な土師器使用のあり方を示すものとして注目される。

第2次調査区の北側で行われた第5次調査では館西辺土塁の延長が確認されている。また、第4次調査では、館中心部分の調査が行われ、大規模な溝遺構や整地遺構等が検出されている。これらの調査の結果、庭園遺構や土塁等の館周辺部の施設は次第に具体的に明らかとなりつつあるが、館西側の確定には未だ至っておらず、重要な課題として残された。

もう一つの大友館として知られている上野大友館（上原館）跡では、下水道工事に伴う確認調査が行われ、館に伴う土塁遺構等が検出された。土塁遺構は一旦掘り込んだ後、斜めに土を積み上げる手法で築かれており、築造年代は16世紀末と推定される。さらに、これより下層でも先行する土塁遺構と考えられる版築状の積土が検出され、遺構の変遷が注目される。このほか大型柱穴や古代に遡ると推定される遺構も検出されている。今回の調



第3図 調査遺跡位置図

表2 大分市平成11年度発掘調査地一覧

調査地点	種別	事業内容	道跡名	調査地	調査担当	道跡面積 (㎡)	調査期間
99001	公共事業	小学校建設	下郡道跡群 第115次調査	大分市大字下郡 F1KJ-r-6~8地点	坪根伸也・羽田野達郎 横山 歩・早田利宏	8,740	990401~000113
		下部地区土地区画整理 事業	第118次調査	H1Ks-7地点	坪根伸也・横山 歩	148.6	990309~990402
			第119次調査	D1Ko-16・17地点	坪根伸也・新原嘉明	150	990318~990514
			第120次調査	H1Kg-r-16・17地点	坪根伸也・小野貴史 早田利宏	1,600	990525~000131
			第121次調査	G1Kp-2地点	坪根伸也・横山 歩	200	990518~990527
			第122次調査	E1Km-n-16・17地点	河野史郎・新原嘉明	800	990526~991029
			第123次調査	B1Kd-15地点	坪根伸也・早田利宏	158	990802~990811
			第124次調査	J1Kr-a-8地点	坪根伸也・新原嘉明	360	991208~000306
99002	公共事業	橋尾地区土地区画整理 事業	橋尾道跡群 試掘	大分市大字橋尾	河野史郎・永松正大 宮田泰男	1,685	990512~990707
			第75次調査	C-26・27地点 (多武志道跡)	塩田潤一・永松正大 宮田泰男	1,484	990517~990804
			第76次調査	C-25地点 (多武志道跡)	塩田潤一・永松正大 宮田泰男	1,150	990809~991023
			第77次調査	C-15・22地点	藤沢敏夫・永松正大 宮田泰男	1,200	991101~000227
			第78次調査	C-22地点	藤沢敏夫・永松正大・宮田泰男 羽田野達郎・早田利宏	943	000208~000322
99003	公共事業	史跡整備事業	大友館跡 第3次調査	大分市顕徳町	河野史郎	2,300	991101~000331
			第4次調査		池邊千太郎・奥村義貴	132	991215~000229
			第5次調査		池邊千太郎・奥村義貴	60	000106~000229
99004	民間開発	個人住宅建設	上野地区(1區)跡 第2次調査	大分市大字上野丘西	河野・坪根・高品・奥村 佐藤・高木	100	990617~990830
			上野地区(1區)跡 第2次調査		堀崎・藤沢・塔島・坪根・河野 池邊・高品・塩田・永松	60	991104
99005	民間開発	共同住宅建設	南内城跡(1區)跡 第2次調査	大分市大手町	高品 豊	298	990702~990915
99006	民間開発	ビル建設	南内城跡(1區)跡 第2次調査	大分市中央町	池邊千太郎・奥村義貴	100	991004~991118
99007	公共事業	駅前周辺整備事業	南金池道跡	大分市金池	高品 豊	1,000	991108~000121
			駅前試掘確認 調査	大分市大道	杉崎・藤沢・塔島・奥村 羽田野・高品・佐藤・高木	2,726.7	990311~000321
99008	民間開発	商業施設建設	玉沢地区(案)里 跡	大分市大字玉沢	後藤典幸・萩幸二	18,500	991217~000624
99009	民間開発	宅地造成	松岡古芝跡群	大分市大字松岡	堀崎和夫・池邊千太郎 羽田野達郎・萩幸二	3,000	990304~990910
99010	公共事業	都市計画街路建設事業	中安道跡 第2次調査	大分市大字中安	藤沢・神代・堀地・高品 永松・堀崎	5,600	990401~000331

表3 大分市平成11年度試掘調査地一覧

番号	種 別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積(㎡)	調査期間	開発原因
1	試掘(民間)	大分市大字4692番地、4699番2 4691番1、4709番2	約29.57	2,196	99.04.26	駐車場建設
2	試掘(民間)	大分市片島字下川田448番地1、449番地1	約24.66	1,877	99.04.20	アパート建設
3	試掘(民間)	大分市国分寺町745番地 外 5 区	約3.335	8,000	99.04.27~28	牧場(牛舎)建設
4	試掘(民間)	大分市東鶴崎 3丁目12番	約53	1,025.48	99.05.13	宅地造成
5	試掘(公共)	大分市下都土地区画整理地内 B-24ニ・リ	13	407	99.05.28	下都土地区画整理
6	試掘(公共)	大分市下都土地区画整理地内 E-14ト・チ(下都土768-1・69)	39	1,268	99.05.28	下都土地区画整理
7	試掘(公共)	大分市下都土地区画整理地内A-11-1 中 (下都土2704-1、2705-1、2706、2707-2)	52	637	99.06.09	下都土地区画整理
8	試掘(民間)	大分市元町4731-2、4731-5 4731-1、4731-4	4	603.50	99.06.10	店舗・住宅建設
9	試掘(公共)	大分市東大道路1丁目2279-88(№2)	8.4	157	99.06.14	駅周辺総合整備事業
10	試掘(公共)	大分市東大道路1丁目2279-76(№103)	12	340.97	99.06.14	駅周辺総合整備事業
11	試掘(公共)	大分市東大道路1丁目2486-1(№99)	36	398.17	99.06.15	駅周辺総合整備事業
12	試掘(公共)	大分市東大道路1丁目2441-7(№86)	10	165.89	99.06.16	駅周辺総合整備事業
13	試掘(公共)	大分市東大道路1丁目2443-11(№87)	約13.5	98.39	99.06.17	駅周辺総合整備事業
14	試掘(公共)	大分市東大道路1丁目2443-23(№96)	約17	457.77	99.06.17	駅周辺総合整備事業
15	試掘(公共)	大分市東大道路1丁目2443-10(№12)	約13.5	10.437	99.06.17	駅周辺総合整備事業
16	試掘(民間)	大分市顕徳町	約9	353	99.06.22	マンション建設
17	試掘(民間)	大分市大字片島901番地1	約25	920.01	99.06.24	アパート建設
18	試掘(民間)	大分市錦町1丁目14番地27号	約83	5,580	99.06.29	宅地造成
19	試掘(民間)	大分市府内町1丁目6-33	約3	580	99.07.06	マンション建設
20	試掘(民間)	大分市大字猪野字地蔵本6番1、7番	約85	1,128	99.07.16	共同住宅建設
21	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-35(№105)	約10	91.70	99.07.22	駅周辺総合整備事業
22	試掘(民間)	大分市下都土大堀1440番地1 外 8 区	約45		99.07.27	宅地造成
23	試掘(民間)	大分市府内町2丁目86番地	約26	183.25	99.07.27	ビル建設
24	試掘(公共)	大分市下都土地区画整理地内 A-25ヘ・ト	約45	990	99.07.28	下都土地区画整理
25	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-38(№34)	約60	94.95	99.07.29~30	駅周辺総合整備事業
26	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-9(№35)		235.45		駅周辺総合整備事業
27	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-21(№36)		124.61		駅周辺総合整備事業
28	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-5(№39)		246.91		駅周辺総合整備事業
29	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-17(№40)		125.20		駅周辺総合整備事業
30	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-29(№77)		120.20		駅周辺総合整備事業
31	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-8(№89)		270.32		駅周辺総合整備事業
32	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-18(№110)		216.36		駅周辺総合整備事業
33	試掘(公共)	大分市板ヶ丘1108-7(№111)		190.42		駅周辺総合整備事業
34	試掘(公共)	大分市多目的運動施設(大分地区西側文教用地)	144	25,000	99.08.03~04	防球フェンス
35	試掘(民間)	大分市中央町1丁目15・17番	約10	208.53	99.08.05	ビル建設
36	試掘(民間)	大分市府内町3丁目36-1・2	約9	867.56	99.08.17	マンション建設
37	試掘(民間)	大分市大道路3丁目2327番1	約33	1,487.02	99.08.20	マンション建設
38	試掘(公共)	鶴崎小学校(現体育館跡または現幼稚園跡)	104		99.08.24~99.08.28	体育館増改築

番号	種 別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調査期間	開発原因
39	試掘(民間)	大分市上野丘1丁目15番6	約7.5	165.28	99.08.30	住宅建築
40	試掘(公共)	大分市大字駄原(1279番地の1 外6下	約16	300	99.08.31	駅南代持地
41	試掘(民間)	大分市錦町2丁目13202-2	約3	307.26	99.10.12	店舗建設
42	試掘(民間)	大分市下部土地区画整理地内 C-23ル・ヲ(下部字長無田24-2・825-2)	約27	635	99.10.19	下部区画整理
43	試掘(公共)	大分市金池南2丁目12883-3 (No.73)	約9	139.07	99.10.25	駅周辺総合整備事業
44	試掘(公共)	大分市金池南2丁目12894-2、3 (No.112)	約18	286.80	99.10.26	駅周辺総合整備事業
45	試掘(公共)	大分市金池南1丁目11143-11 (No.81)	約22	171		駅周辺総合整備事業
46	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2456-7 (No.85)	約14	269.83	99.10.27	駅周辺総合整備事業
47	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1108-14 (No.75)	約21	106.06		駅周辺総合整備事業
48	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1145-10 (No.76)	約11	117.32	99.10.28	駅周辺総合整備事業
49	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1150-3 (No.82)	約17	219.82		駅周辺総合整備事業
50	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2445-12 (No.90)	約17	242.89	99.11.04	駅周辺総合整備事業
51	試掘(民間)	大分市上野丘西410番地	約60	100		個人住宅建設
52	試掘(民間)	大分市下部土地区画整理地内 F-4ニ(下部字女屋敷870番地)	約9	131	99.11.05	下部区画整理
53	試掘(民間)	大分市上野丘1丁目484-1、7	約28	130.17	99.11.30	住宅建設
54	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2462 (No.22)	約172	6812.3	99.12.01~02	駅周辺総合整備事業
55	試掘(公共)	大分市下部土地区画整理地内 A-19ム(下部字辻2824-1)	約18	464	99.12.07	下部区画整理
56	試掘(公共)	大分市長浜町1丁目 1427、1439-21、1440-18	約8	636.59	99.12.08	住宅建設
57	試掘(公共)	大分市下部土地区画整理地内 A-27イ・ロ・ハ・ニ(下部辻2886-3外5玉)	約16	1737	99.12.14	下部区画整理
58	試掘(公共)	大分市下部土地区画整理地内 B-8ロ・ハ(下部字ノ坪2468-5外)	約25	675	99.12.15	下部区画整理
59	試掘(民間)	大分市瀬見町2丁目1310~315番地	約90	2,906.76	99.12.20	店舗建設
60	試掘(民間)	大分市都町2丁目1122番	約8.5	458.61	2000.02.08	店舗建設
61	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2511-7 (No.21)	約12	164.38	2000.03.07	駅周辺総合整備事業
62	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2511-5 (No.20)	約25	118.82	2000.03.07	駅周辺総合整備事業
63	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2511-14 (No.83)	約53.75	270.09	2000.03.07	駅周辺総合整備事業
64	試掘(公共)	大分市金池南2丁目2465-1 (No.69)	約110	13,000	2000.03.13	駅周辺総合整備事業
65	試掘(公共)	大分市東大道1丁目2488-9 (No.100)	約30	267	2000.03.13	駅周辺総合整備事業
66	試掘(公共)	大分市東大道1丁目2496-2 (No.97)	約65	261.31	2000.03.13	駅周辺総合整備事業
67	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2456-3 (No.92)	約24	88.49	2000.03.13	駅周辺総合整備事業
68	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2456-10 (No.45)	約24	88.49	2000.03.13	駅周辺総合整備事業
69	試掘(公共)	大分市金池南2丁目12894-4 (No.98)	約36	299.31	2000.03.14	駅周辺総合整備事業
70	試掘(公共)	大分市金池南2丁目2896-1 (No.74)	約79	461.58	2000.03.14	駅周辺総合整備事業
71	試掘(公共)	大分市金池南1丁目2444-4 (No.128)	約48	301.92	2000.03.15	駅周辺総合整備事業
72	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1149-10 (No.79)	約21	143.38	2000.03.17	駅周辺総合整備事業
73	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1146-32 (No.142)	約36	198.34	2000.03.17	駅周辺総合整備事業
74	試掘(公共)	大分市桜ヶ丘1148-5 (No.29)	約140	500.01	2000.03.21	駅周辺総合整備事業
	計		約5,675.38	100,257.54		

査では、すでに削平されたと思われていた部分でも土塁の基底部が確認でき、さらに館内部において良好な状態で遺構が保存されていることが確認されたことから、今後上野大友館（上原館）跡についても、その保存のための施策が早急に求められよう。

中世府内町に関しては、府内城・城下町跡第12次調査地点において、府内城築城時の整地層より下層で戦国時代の溝遺構が検出され、中世府内町の成立時期を示唆する資料が得られている。（高島）

近世

今年度は府内城・城下町内部の2ヶ所において調査が実施された。米屋町に当たる地点で実施された第12次調査では、外曲輪土塁遺構の基底部が確認され、さらに近世の町屋に伴う多数の遺構群が検出された。中でも、江戸時代中期の大火に伴うと推定される火災処理土坑の存在や、焼酎を有する陶磁器が大量に一括出土した土坑などが注目される。名ヶ小路町に当たる地点で行われた第13次調査では、これまで出土数の少なかった17世紀前半に比定される遺構が検出され、まとまった資料を得ることができた。出土遺物の中には17世紀前半の中国製磁器（いわゆる古染付・芙蓉手・呉須赤絵）などをはじめ優品が多く含まれ、当該期における居住者の性格を窺わせるものである。

これら近世城下町の調査はいずれも民間の開発に伴って実施されたものであるが、調査日程および調査費用負担等において、原因者との調整に苦慮した経緯がある。また、出土遺物が膨大であることなどから、今後の整理作業についても憂慮される問題が数多く存在する。こうした都市遺跡の取り扱いについては、中世大友城下町跡も含めその抜本的な対策が望まれるところである。（高島）

3 教育普及活動

（1）第6回 海辺のまつり 古墳説明会 平成11年9月11日（土）

「よみがえる 海辺人の情熱」をテーマに、亀塚古墳調査で出土した船形埴輪や大型船が描かれた埴輪などの遺物を展示し、パンフレットを配布して現地説明会を行った。

（2）遺跡現地説明会

遺 跡 名	所 在 地	開 催 日	参加人数
大友館跡第1次・第2次調査	大 分 市 顕 徳 町	平 成 11 年 5 月 2 日	1,000
松 岡 古 窯 跡 群	大 分 市 松 岡	平 成 11 年 7 月 25 日	150
下 郡 遺 跡 群 （第115次）	大 分 市 大 字 下 郡	平 成 12 年 1 月 16 日	350
大友館跡第3次～第5次調査	大 分 市 顕 徳 町	平 成 12 年 2 月 26 日	100
中 安 遺 跡	大 分 市 大 字 城 原	平 成 12 年 3 月 11 日	120

本年度は、大友館跡、松岡古窯跡群、下郡遺跡群（115次調査）、中安遺跡の現地説明会を行った。

（3）研修参加

奈良国立文化財研究所による埋蔵文化発掘技術者特別研修「遺跡地図情報課程」に1名の職員を派遣した。

(4) 出土遺物の貸し出し

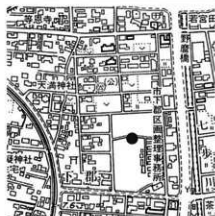
番号	期 間	資 料 名	目 的	申請者
1	1999.07.15	大友館跡第1次・2次調査全量写真 中世大友城下町跡第4次調査全量写真	中世都市研究第6号掲載	朝新人物 往来社
2	1999.08.30～09.28	中世大友城下町跡第3次調査出土遺構写真 岡出土遺物写真 中世大友城下町跡第4次調査遺構全体写真 大友館跡第1・2次調査出土遺構写真 岡出土写真	第4回秋期企画展図録 ポスター掲載	大分県立 先哲史料館
3	1999.09.03	浜・長無田遺跡出土孔列文土器	卒業論文作成のため	個人
4	1999.09.24～11.30	中世大友城下町跡第3次調査SX210出土資料 中世大友城下町跡第4次調査出土資料 大友館跡第1・2次調査出土資料 大友館跡第1次調査出土土師器	第4回秋期企画展 「府内と臼杵から戦国の世界が 見える」への展示	大分県立 先哲史料館
5	1999.09下旬～11月上旬	亀塚古墳出土埴輪 亀塚古墳空中写真	開館特別展 「大分の人と自然の交流史 -共生の心とかたちをさぐる-」	別府大学 附属博物館
6	1999.10.02～11.14	下郡遺跡群第43次調査出土弥生土器 岡75次調査出土弥生土器 岡90次調査出土弥生土器 米竹遺跡出土弥生土器 久原遺跡出土弥生土器 猪野・新土井遺跡出土弥生土器	「古代の折り-大分の土器」展	中国陶瓷 美術館
7	2000.01.12	大友館跡第2次調査出土土師器 中世大友城下町跡第4次調査出土土師器 猪野・中原遺跡出土土師器 横尾遺跡群第62次調査出土京部系土師器 一本遺跡(炭床地区・経蔵地区)出土土師器 久土遺跡第3次調査ST414出土土師器	修士論文作成のため	個人

I 下郡遺跡群第115次調査 F区j~r-6~8 地点

調査面積	8,740㎡	調査期間	99.04.01~00.01.13
地域	A	調査担当	坪根伸也・羽田野達郎・横山歩・早田利宏

今次の調査は、下郡小学校新設に伴う事前調査として実施した。事業対象面積は27,000㎡に及ぶが、調査は校舎等の建築部分を中心とした8,740㎡について行った。

調査の結果、遺跡地は調査対象地域のほぼ中央を東西方向に走る旧道を境に大きく様相が異なる。すなわち、北側部分については、明治11年の明治水路開削時の水田化に伴い、大きく地下げが行われている。1m近い客土を除去すると黄褐色、あるいは黄白色の基盤土層が現れ、浅い遺構はすでに欠失している。遺構配置図上で北側半分の遺構の密度が希薄であるのはこのためである。これに対して、南側部分は、厚さ0.3mの旧水田耕作土を除去すると、暗茶褐色土が存在し、この上面に遺構を確認することができる。南北の遺構検出面レベルは現状で0.5m程度の比高差を有している。



第4図 調査地点位置図

検出遺構には、弥生時代後期から近代まで連続する時期のものがあり、遺構内容も竪穴遺構、掘立柱建物跡、廃棄土坑、溝状遺構、井戸跡、土器焼成坑、土壇、道路状遺構など様々な内容を備えている。以下に各時期の主要遺構概要について略述する。

弥生時代後期～古墳時代初頭

当該時期の遺構分布は希薄であり、数基の竪穴遺構と井戸跡（115SE0291）が相当する。

SE0291は平面長軸約1.03m、短軸約0.8mの楕円形プランを呈する素掘りの井戸跡である。井戸の断面形状は、遺構検出面から約0.7m下位の部分以下に挟れが認められ、袋状を呈している。井戸内堆積土層はいずれもブロック土を内包しており、人為的な埋め戻しによるものと思われる。下部土層には粘質土が堆積しており、滞水状況を示している。埋土内からの出土物は概して少ないが、井戸底から古墳時代前期に比定される完形の甕2点が出土している。

古代（奈良時代）

掘立柱建物跡、土器焼成坑、土器廃棄土坑、井戸跡をはじめとする多種多様な遺構が検出されている。



第5図 調査区全景1（東方向から）



第6図 調査区全景2（上部が北）

当該時期の掘立柱建物跡は調査区南西部分に集中する。2間×5間の最も大型である115SB1602をはじめ、ほとんどの建物跡がN-8°-W前後の方向を意識して構築されている。配置の基本形がL字形あるいはコ字形をなすものと考えられ、これらの建物により囲繞される空間に井戸が造られている。

115SE0813は建物跡による囲繞空間に構築された井戸跡である。遺構検出時に楕円形を呈し、長軸約3.0m、短軸約2.6mの規模を有するプランを確認することができるが、これは井戸廃絶段階の井戸枠の抜き取りとそれに伴う埋め戻しの痕跡である。この所作は検出面から約0.55m下位まで及んでおり、この位置において、方形を呈する本来の井戸プランを検出することができる。井戸部には一辺約1.25mの木枠による方形の井戸枠を確認することができ、この部分から井戸底までは約1.14mを測る。井筒に相当する井戸枠部分は、最大約1.5mの板材を横方向に用いて積み、これを裏込め土と4本の隅柱によって固定している。さらに隅柱は横桟によって補強されている。出土遺物に下層埋土上面から9世紀前半に比定される土師器蓋（「十」の墨書あり）の完存品が出土しており、井戸の機能停止時期を示している。さらに水溜部からもほぼ同時期と考えられる土師器環が出土しており、機能時期推定の参考となる。

115SE0728は、115SE0813が構築される前に機能していた井戸跡である。つまり、115SE0813は115SE0728の造り替えられた姿である。本来素掘りの井戸（115SE0728）であったものを井戸枠を付設した井戸へと改修した姿が115SE0813である。115SE0813の井戸枠の外側には大きな挟けが認められ、これを埋めるように裏込め土が充填されている。出土遺物が少なく、明確な時期差を指摘することはできないが、土層状況と湧水量を考慮すると115SE0728構築後、時を経ずに115SE0813へと改修されたと考えられる。

115SE0773はSE0813の南西部分に位置する井戸跡である。検出面でのプランは方形を呈するが、約0.7m下位付近より円形プランを呈する水溜部を形成する。井戸底まで1.62mを測る。堆積埋土の下部層は灰色基調の粘質土により構成されているのに対して、上部3層は白灰色ブロック土を大量に内包しており、明らかに人為的な埋め戻しが行われた状況を示している。埋土中から土師器環、土師器甕破片などが出土している。出土遺物は8世紀中頃から後半に比定されるものであり、先述の115SE0728に先行して造られた井戸である可能性が高い。

115SX0427は土師器焼成坑である。1基のみの確認であり、古代期の遺構・遺物が希薄となる調査区中央東側部分において確認された。南北長約4.5m、東西長約4.12mを測る隅丸の長方形プランを呈する。現存深度0.4mを測り、南北東面に粘土による窯壁が遺存し、底面の東側2/3が著しく被熱する。西側部分は底面の焼土が欠失しており、掻き出し口として機能していたと推定される。内面に若干の土師器破片が遺存しており、これらから8世紀中頃から後半の所産であると判断される。

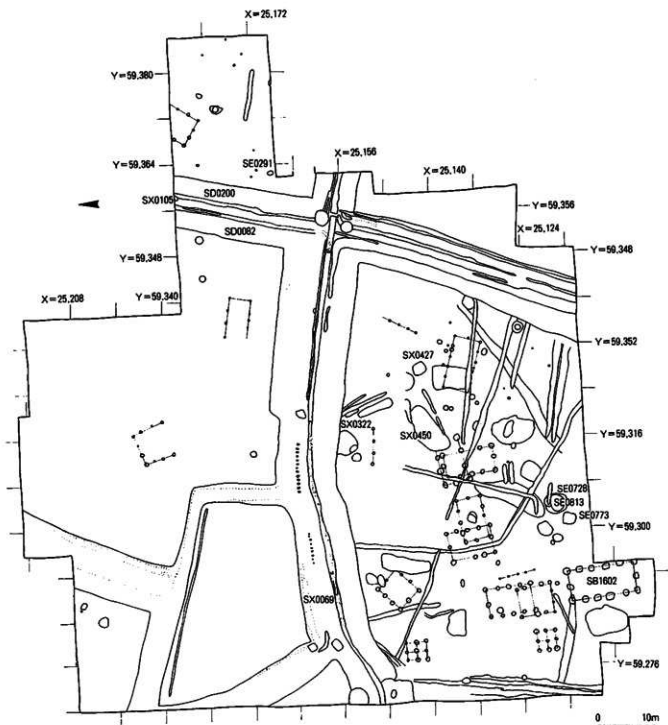
古代時期の遺構として注目されるものに土器廃棄土坑がある。数基の廃棄土坑が認められるが、分布の中心は掘立柱建物跡によって囲まれる空間の周縁部にある。



第7図 115SB1602完掘状況（南方向から）



第8図 115SE0813検出状況



第9図 主要遺構配置図 (1/700)

115SX0322は調査区のほぼ中央に位置する廃棄土坑である。

北側の一部はすでに欠失する。東西約4.2m、南北方向の現存長4.2mを測る。現存深度は約0.2mであり、埋没途中に大量の土器廃棄が認められる。土師器杯、土師器甕、甕、須恵器大甕などがあるが、特徴的なのは焼塩甕であり、土坑中央に集中的に廃棄されている状況が認められる。出土遺物から導き出される燂属年代は8世紀中頃から後半前後の時期が想定される。

115SX0450は長軸約9m、短軸約4.4mを測り、今回の検出土坑中最大の規模を有する。平面プランは楕円形を呈し、長軸はN-56°-Eの方向を示す。検出面からの深さは約0.5mを測り、床面には小さな起伏が多数認められるものの、ほぼ、フラットな底面を形成する。埋土の堆積状況は、大きく5層に分層することができ、プラン内の北側に3度の掘り返しが認められる。出土遺物はプランの東半分に集中する。出土器種には杯等の供膳形態

が多く認められ、その他に移動式カマド、都城系高坏など多彩な遺物内容を備えている。およそ8世紀中頃前後の所産年代を推定することができる。

中世～近世

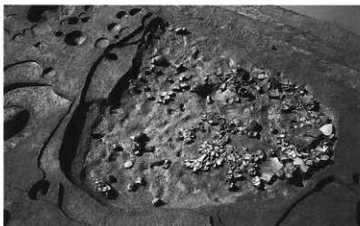
中世の所産になるものに溝状遺構、掘立柱建物跡、井戸跡、墓墳などがある。

調査区内に展開する小規模な溝状遺構の大部分はこの時期に比定されるものである。なんらかの区画を意図しているものと考えられるが、特に規格性を見出すことは出来なかった。溝埋土から底部糸切痕を残す土師器が出土する。時期的には、中世前期から中世末期のものがあり、8世紀に比定される掘立柱建物跡群と方位を異にする。所産時期は明示できない小規模な柱穴により構成される掘立柱建物跡も当該時期のものと推定される。井戸跡については、全て素掘り構造である。

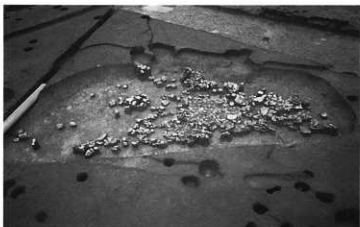
遺跡中央を東西に走る溝状遺構(115SX0069)を境として南北で状況が異なる点はすでに指摘した。この溝状遺構は複数の溝状遺構の複合により構成されているが、基本的な構造は、溝中央に幅1.0m程度の基盤土層の高まりを掘り残し、その両側に逆台形の溝が掘削される。このような構造は、明治11年、当地区に明治水路が掘削され、今回の調査対象地域のほぼ全面が水田化する段階まで継続していることを土層断面に示される堆積土層は示している。ちなみに明治初期の地籍図に示される土地の利用形態は、この115SX0069の基本構造に呼応するように、溝中央の高まりの部分が道として利用され、その両側に細長く水田が展開する。他の部分については115SX0069が溝状を呈していることから明らかなように、高位にあったと思われる、広く畑地として利用されている。これらの点は、115SX0069を境に遺跡の遺存状況が異なる事象が明治11年の明治水路設置、水田化という一連の作業の中で、通水を意図した地下げ地業をその要因とする蓋然性の高さを示唆している。溝内堆積土層のグライ化と出土遺物の対応を検討すると、溝状の通路状の高まりの両サイドに水田が展開し始めるのは18世紀後半である。第17図に115SX0069他の土層断面図を掲載しているが、基盤土層の掘り残しによって形成される中央の高まりは数回の版築状の土盛りを行うことで、かさ上げされていく。基盤土層上面には径0.5m前後の円形連続土坑が造られており、道路状遺構で見られる同種の遺構との関連が注目され



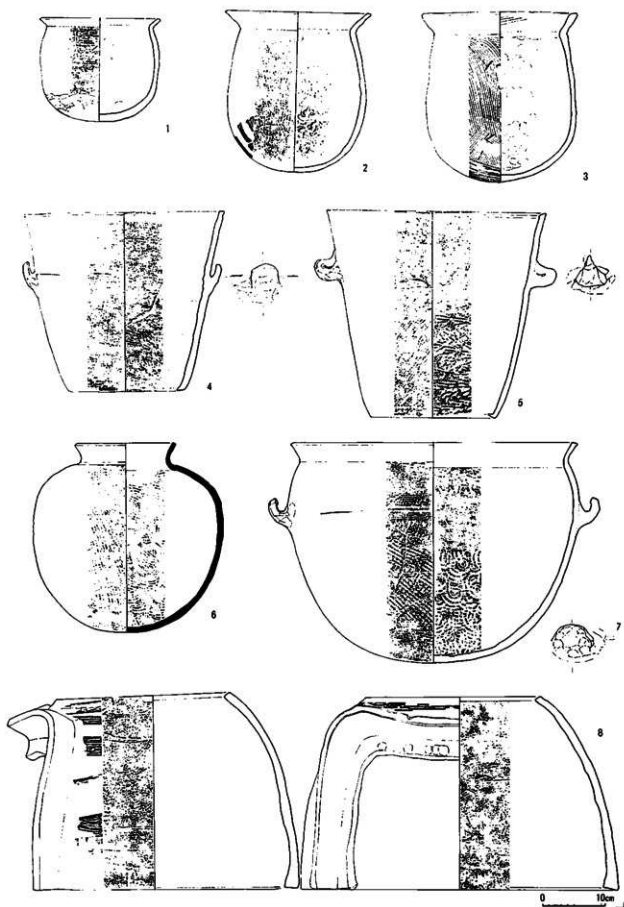
第10図 115SX0427発出土状況



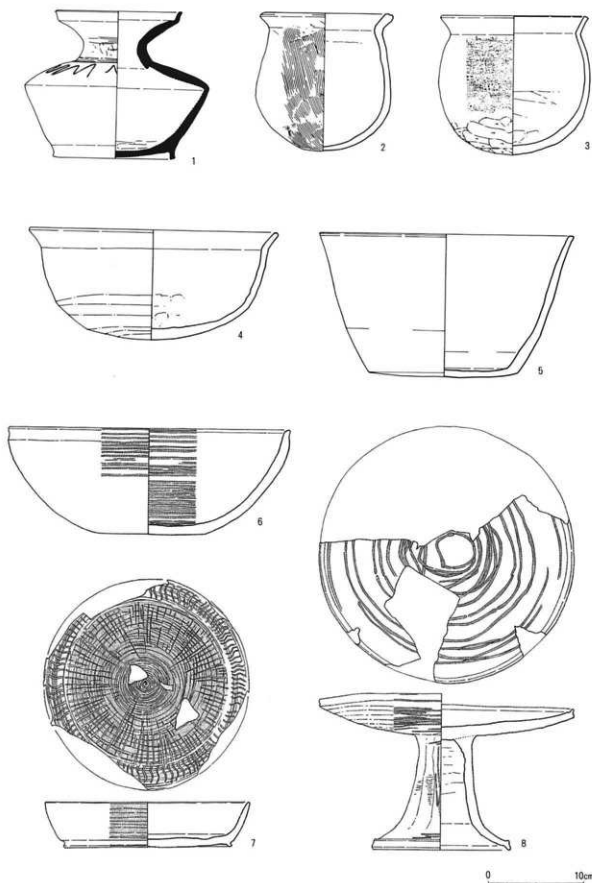
第11図 115SX0322遺物出土状況



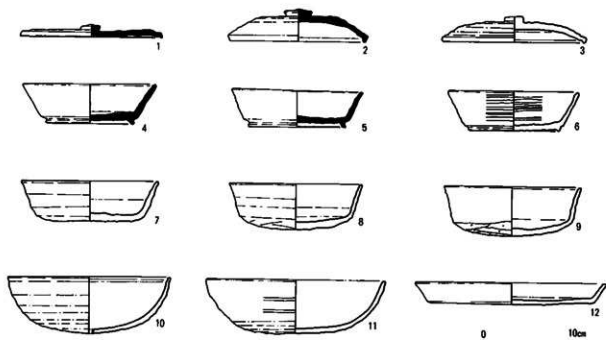
第12図 115SX0450遺物出土状況



第13圖 115SX0450出土遺物実測圖 1 (1/6)



第14図 115SX0450出土遺物実測図2 (1/4)



第15図 115SX0450出土遺物実測図3 (1/4)

る。土坑内には小礫を含む茶灰色シルト土が充填されており、内部から出土する遺物より、中世末期、16世紀後半前後の時期所産と推定される。出土遺物には朝鮮王朝産陶器、備前焼鉢鉢、中国青花、鉛製鉄砲玉などがある。

115SD0082は、115SX0069と調査区東側で直交する溝状遺構である。遺構埋没後に近年までルート上が道路として利用されていた点は115SX0069と共通するが、溝中央に高まりを持たない点で構造的に異なる。しかしながら、逆台形を呈する溝底までの土層は、すべて18世紀後半以降の水田土層に対応することから、本来存在した中央の高まりがこの段階に破壊された可能性も否めない。溝底において、並列する溝状遺構（115SD0200）と土壌（115SX0105）を確認することができた。115SD0200は幅約0.4m、深さ0.24mを測る並列する溝状遺構である。溝間は心々で約2mを測る。上部を115SD0082により削平されているので、詳細は不明であるが、道路状遺構に伴う側溝である可能性も考えられよう。そうすると、115SD0082掘削前に掘り込みを伴う道路状遺構の存在が想定され、先の115SX0069と同様の目的によって造られた遺構と考えることができる。115SD0200からの出土遺物は少なく、厳密な時期比定は困難であるが、数少ない出土遺物の中に白磁陶IV類の口縁部破片があり、古代末から中世前期にさかのぼる可能性もある。115SX0105は115SD0200を切って構築されている馬埋葬土壌である。土壌の北側部分が調査対象範囲外に存在するため、完掘することはできなかったが、土坑内からは原位置を保持する馬骨1体分が出土している。所産時期は出土遺物が皆無であるため不明だが、遺構の切り合い関係から、115SD0200よりも新出するもので、115SD0082掘削段階、すなわち18世紀後半よりも古い段階のものであることは確実である。

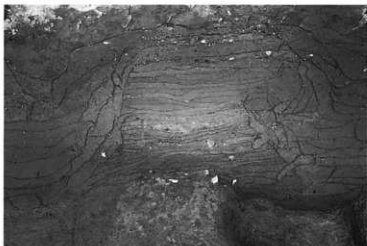
小結

今回の調査では、弥生時代から現代におよぶ遺構・遺物が確認された。なかでも奈良時代（8世紀中頃）に大型建物跡を中心とする規格性を有する遺構展開が認められた。具体的には、南北棟である115SB1602を中心にL字状、あるいはコ字状を基調とする建物配置が看取される。

下部地区は「郡」地名を有することなどから、大分郡衙推定地のひとつとして有力視されてきた地域である。昭和62年から継続実施されている土地区画整理事業に伴う調査では、従来の推定を補強するような大型掘立柱建



第16図 115SX0069調査状況(東方向から)



第17図 道路状遺構(115SX0069)土層断面

物跡群、大規模な井戸跡、道路状遺構など次々と検出され、さらに陶硯、帯金具、石帯、墨書土器、刻書土器などの出土が相次いでいる。しかし、下郡遺跡群は約96haを調査対象とするが、古代遺構は、遺跡地すべてにおいて検出される訳ではなく、B区、F区、H区の三つのエリアに集中する。今次の調査地点である第115次調査地点は、F区に相当し、周辺の調査においてもこれまで真南北方位を指向する建物跡が検出されており、H区で確認された真南北方向に延びる道路状遺構との位置関係や、第115次調査地点の西側に位置する第84次調査地点での真南北・真東西に展開する冊列コーナーの存在などから、いまだ未確認である政庁域の推定地に第115次調査地点の西側部分が有力視されている。

以上に示したこれまでの調査所見を踏まえ、今次の調査における古代遺構に関する成果と課題について、いくつか触れておきたい。

まず、建物配置についてである。今回の配置の特徴としては、建物によって囲繞された空間の中央部に井戸を配置する点を指摘することができる。実は、これはH区にある第120次調査地点(本年報所収)でも確認されているパターンでもある。両者の異なる点は、中央井戸の廃棄に伴い、第120次調査地点の場合は、祭司・呪術的な面が強調されているのに対し、第115次調査地点では、特に顕著な行為行動の痕跡は認められない点が指摘される。さらには、第115次調査地点では、空間の周辺部に供膳形態・煮炊形態を中心とする土器資料を多量に包含した大型の廃棄土坑が複数分布する点を特徴とするが、第120次調査地点ではこのような状況はなく、対照的である。

この様相の相違はおそらく其々の遺跡・遺構の性格を暗示していると考えられる。すなわち、両者とも施設配置に共通性を持ち、極めて官的な様相を示しながらも、第115次調査地点の場合は、日常性の高い空間を形成し、第120次調査地点例は非日常的な空間の存在を示唆していると考えられよう。第115次調査地点の西側には郡衙政庁空間の存在推定もなされており、この点を重視すれば、今次の調査で確認した施設は郡衙政庁に付随する厨的な空間想定が最も妥当性が高いのではないかと考えられる。

建物方位に関しては、周辺調査での同時期建物跡が真南北を指向するのに対して、今回の建物跡群は主軸方位が若干異なる。この点については、調査区中央を東西方向に横断する溝(道路状遺構)方向と符合し、溝(道路状遺構)を基準として構築された可能性も否定できない。現状で溝(道路状遺構)は中世末期を上限とするが、大規模な溝状の掘り込みを伴っているため、それ以前の遺構痕跡が欠失したことも考えられよう。ちなみに、溝(道路状遺構)の底面中央に残された基盤土層の盛り上がりや空中写真、測量図面などにより検討すると、複数の直線の組み合わせによってルートプランが規格されていることを指摘できる。古代(8世紀中頃)まで遡る遺構であるのかどうか、今後周辺調査において留意しておきたい課題のひとつである。

(坪根)

Ⅱ 下郡遺跡群第118次調査 I 区 s-7 地点

調査面積	148.6㎡	調査期間	99.03.09～99.04.02
地域	A	調査担当	坪根伸也・横山歩

今次の調査は、下郡地区土地区画整理事業に伴う道路建設における事前調査として実施したものである。調査地点は、大分市下郡北2丁目3番地に所在し、大分川右岸に展開する自然堤防の西側縁部分に相当する。

表土除去の結果、調査区の西側約二分の一について段落ちが認められ、遺構はすでに欠失している。これに対して東側部分の遺構遺存状況は比較的良好であり、近世の埋葬遺構、弥生時代・古墳時代に比定される竪穴住居跡、柱穴等を検出することができた。

以下に主要遺構について概説する。



第18図 調査地点位置図

118ST001

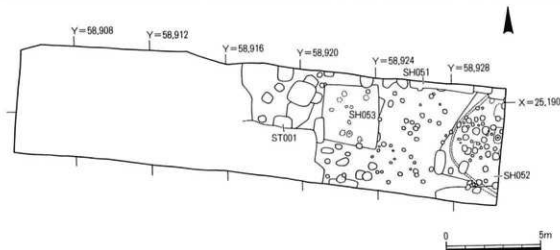
調査区のほぼ中央において確認した近世墓である。南側半分が掘乱穴によって滅失する。墓墳は東西0.95m、南北0.65m+αの規模を測り、隅丸長方形の平面プランを呈している。土層断面の状況から早稲を埋葬主体とするものと判断される。検出面からの深さ0.85mを測り、桶径約0.56mを推定することができる。また、墓墳の南側中位にはテラスが形成されている。埋葬主体から人骨一体分を確認したが、遺存状態が悪く、性別・年齢等についての詳細は不明である。遺存部位から判明した埋葬方向・葬位は、顔面をほぼ西に向けた座葬であるが、頭骸骨については、原位置を保っておらず桶内に土砂が流入する以前に本来の位置から落下したものと推定される。

出土遺物には土師器小皿、六道銭がある。六道銭は6枚をセットとし、内5枚は錆着する。この中で少なくとも1枚は鉄銭を含むものと推定される。また、遊離した1枚は「新寛永」である。

土師器小皿は、下肢骨上から出土しており、棺内埋土の状況から本来棺上に置かれていたものが落ち込んだものと推定される。

118SH051

調査区北側壁際で検出した竪穴住居跡である。調査区の関係から一部のみの検出となっているが、確認部分か



第19図 遺構配置図 (1/200)



第20図 118ST001人骨出土状況



第21図 118SH052完掘状況

ら一辺約3.4mの方形プランを呈するものと判断される。住居床面には貼床がなされており、住居南壁中央部において造り付けのカマドと推定される構造物の存在を確認することができた。出土遺物は確認範囲の関係から、概して少ないが、カマドの存在と出土土器片の諸特徴から5世紀末から6世紀の所産になるものと推定される。

118SH052

隅丸方形を呈すると推定される竪穴住居跡である。床面には貼床がなされ、中央に地床炉を有する。南東部コーナー付近の床面において柱穴1基を確認しており、配置状況から4本柱になるものと推定される。また、住居壁際には壁溝が巡り、溝内には径約5cm程度の小柱穴が配置されている。竪穴内の堆積埋土はレンズ状の堆積を示しており、多量の炭化物・焼土を含有する。埋土内には、弥生時代後期終末に比定される土器資料を内包しており、竪穴の帰属時期を弥生時代後期終末として大過ないであろう。

118SH053

調査区の中央付近において確認した方形プランを呈する竪穴住居跡である。3.0m×3.2mの規模を測る。現存壁高は遺存状況の良好な部分で約0.20mを測り、床面には淡黄褐色土による貼床が施されている。また、床面の中央西寄りに2本の柱穴を確認しており、主柱穴になるものと推定される。住居内の堆積埋土は暗灰茶色土を基調とし、焼土粒等を含むが、出土遺物は少なく、時期の比定を行えるような資料は皆無である。当該地域の住居構造との比較から、弥生時代後期のものと推定されるが、残念ながら確証を得ることはできなかった。

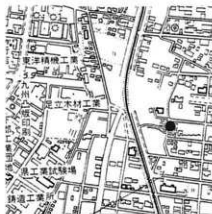
(坪根)

III 下郡遺跡群第119次調査 D区o-16・17地点

調査面積 約150㎡ 調査期間 99.03.18～99.05.14
地域 A 調査担当 坪根伸也・栃原嘉明

今次の調査は、土地区画整理事業の区画街路造成に伴う事前調査として実施した。調査区は下郡遺跡群の中央を走るJR豊肥線の東側に位置し、近隣には第87次調査地点、第70次調査地点などが所在する。

調査では、弥生時代～近世におよぶ遺構・遺物が確認された。以下に時代別概要を記す。



第22図 調査地点位置図

弥生時代

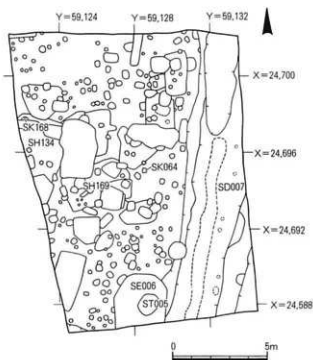
弥生時代の主要な遺構としては、土坑、竪穴住居跡等を検出している。119SK064は調査区のほぼ中央に位置するビット状の小規模な土坑で、弥生中期後葉前後の土器破片が、折り重なった状態で出土し、ほぼ同一レベルから結晶片岩製の磨製石鏃1点が出土した。これらは遺構底面から出土するのではなく、約0.1m浮いている。遺物の除去後、掘り下げを行ったところ、底面直上から骨片と思われる白色物質を検出した。出土土器片には甕形土器の口縁部・壺形土器の頸部・高杯の脚部などがあるが、1個体に完形復元できるものは皆無である。

119SK168は調査区西側に位置する119SH134のカマド跡の下において検出した土坑である。遺構南側は後世の擾乱のため欠失しており、本来のプラン形状は不明である。出土遺物には弥生後期初頭に比定される甕形土器破片などがある。

119SH169は長方形プランを有する竪穴住居跡である。住居跡北側と南側は後世の掘乱により破壊されていたため、遺構の遺存状態は良好とはいえない。遺構検出面から床面までの遺存壁高は約0.07~0.08m程度である。出土遺物は少なく、厳密な場属年代の推定は難しいが、出土した破片資料の様相は、弥生時代中期後半前後に比定されるものであり、当該住居跡の所産年代を示している可能性がある。

古墳時代

古墳時代の遺構としては119SH134がある。遺構自体は西側半分が調査区外にあたるため、プランの全容は不明である。北側壁面にはカマドが付設されているが、機能停止段階に袖石を含む諸施設は破壊されており、「カマド封じ」的な行為が行われた可能性を指摘できる。出土遺物に土師器甕の小細片などがカマド周辺から出土している。詳細は不明であるが、およそ6世紀後半か



第23図 遺構配置図 (1/200)

ら7世紀代の所産と推定される。

中世

中世の遺構には119SE006（井戸跡）などがある。現存深度約1.2mを測る。積極的に帰属年代を示すような遺物の出土は認められないが、最下層の粘質土層から瓦質の播鉢底部片が出土しており、本資料の特徴から中世末期頃の所産年代が推定される。



第24図 119ST005人骨出土状況

近世

近世の遺構には119SD007（溝状遺構）と119ST005（土壇墓）がある。119SD007は調査区東側を南北に走る溝状遺構であり、溝幅約2.5m、深さは南側最深部で約1.1mを測る。堆積土層の状況を観察すると、複数回の掘り返し痕跡が認められた。遺構の切り合い関係から最も古いと判断される掘り返し内埋土から肥前系の外青磁筒形碗が出土している。なお遺構の機能時期については、119SD007の最下層にあたる粘質土層から出土する肥前染付碗などの出土遺物から、17世紀末～18世紀前半の機能年代を推定することができる。

119ST005は119SE006に重複して検出された楕円形プランを呈する土壇墓である。頭部は東側を向き、膝を曲げた状態の人骨を検出した。出土状況は良好とは言えず、頭部と脚部以外はほとんど残っていなかった。副葬品の類の出土はなく、所産時期の推定は行えない。119SE006との切り合い関係から中世末期以降のものである点のみ指摘することができる。

小結

今次の調査では弥生時代中期から近世にかけての遺構・遺物を確認できた。弥生時代、古墳時代に関しては、平成8年度調査の第87次調査地点と同時期の遺構が確認され、この周辺に当該時期の集落が展開していた事実が知られる。

中・近世に関しては井戸跡・溝状遺構・土壇墓が認められるが、建物跡等の確認はなされておらず、当該時期の集落の分布・構造の解明に関しては、今後の調査成果に期待したい。（坪根・栃原）

IV 下郡遺跡群第120次調査 H区g・r-16・17地点

調査面積	1,600㎡	調査期間	99.05.25～00.01.31
地域	A	調査担当	坪根伸也・小野貴史・早田利宏

今次の調査地点は、平成9年度に調査を実施した下郡遺跡群第90・92次調査地点に南接し、遺跡の連続的な展開が予見されていた地点にあたる。調査は土地区画整理街区の整地工事に伴う事前調査として実施した。

調査地点は、水田として利用されていた場所に相当し、旧水田層を除去すると暗茶褐色土があらわれ、この土層上面において遺構を検出することができる。調査の結果、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝状遺構等を確認した。これらの遺構は、弥生時代中期から近代におよぶものであり、以下に各時期における主要遺構について概説する。



第25図 調査地点位置図

弥生時代

当該期の遺構には、溝状遺構（120SD1100・120SD1200）、土坑（120SX1340）、井戸跡（120SE1090）などがある。

120SD1100は検出面での幅4.5m、深さ1.5mを測る溝状遺構である。調査区北西角付近から南側中央に展開し、両端ともに調査区外に展開する。溝埋土内には数回の掘り返しが認められ、さらに、底面付近を中心に灰色細砂により構成されるラミナ堆積物を認めることができ、機能時に流水があった事実が知られる。

出土物は概して少ないが、断片的な出土土器の様相から中期後半～末前後の機能時期が推定される。

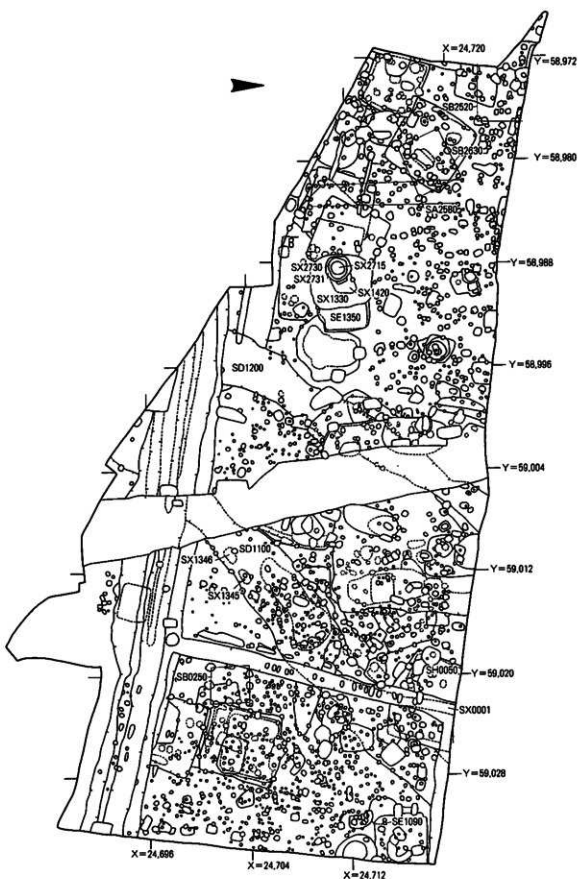
120SD1200は、120SD1100の西側に位置する溝状遺構である。検出面での幅約2.8m、深さ0.9mを測り、120SD1100に比べると一回り規模が小さい。本溝にも数回の掘り返しが認められる。この中で最終掘り返し溝の埋没する過程に生じた窪地に大量の土器廃棄が認められ、溝の機能停止時期推定の参考となる。廃棄された資料は中期末前後のものも含むが、後期前葉から中葉に比定されるものが主体を占めており、この時期には120SD1200がすでに機能を停止していたことを示している。出土土器には完形に復元可能なものも多数含んでおり、擬凹線文土器や赤色塗彩された器台などもある。

120SX1340は、120SD1100が現在確認できる規模の約半分程度埋没した段階において溝内に構築された土坑である。長軸1.2m、短軸0.75m、深さ0.5mを測る。隅丸長方形を呈する。埋土は2層に分層され、上部層は淡黄灰色砂質土、下部層は暗灰黄色砂質土を基調とする堆積土により構成される。埋土中から歯が確認されており、墓墳であると考えられる。隣接する120SX1345も堆積土層、形態の類似等から同種の遺構であると推定される。所産年代は、120SD1100の機能期間が中期中頃～後期初頭前後と推定されることから、この時間幅の中で造られたものと判断される。

120SD1100と120SD1200は、規模に差異があるものの、



第26図 調査区全景（東方向から）



第27圖 遺構配置圖 (1/300)

推定機能年代は一部重複し、中期後半～後期初頭の段階において、同時併存していたと考えられる。120SD1200の最終埋没途上に廃棄された土器群に後期中葉段階まで下るものがある点などを考慮すると、機能停止時期には若干の差異が存在するものと推定される。

120SE1090は直径2.3mの円形プランを呈する素掘りの井戸跡である。現存深度2.2mを測り、底面より約0.8m上位の地点に挟りが認められ、当時の水際ラインを示している。井戸埋土は8層ほどに分層できるが、挟りが認められる部位よりも上位に位置する土層は基本的にブロック土混じりの混土層によって構成されており、井戸機能停止時に人為的な埋め戻しが行われたことを示している。土層観察の結果は、この埋め戻し作業後も窪み状に遺構痕跡が残っていたことを示唆しており、これに呼応するように窪み部には大量の土器が一括廃棄されている状況を看取することができた。その位置は検出面から約0.3～0.4m下位に相当し、壺、甕をはじめとする多種多様な器種によって構成されている。これらの資料は諸特徴から弥生時代後期中葉前後の所産になるものと推定され、当該時期の良好な一括（廃棄）資料を提供したことになる。ちなみに、本井戸が掘削された段階には、すでに前述の溝状遺構（120SD1100・SD1200）は機能を停止している。



第28図 120SE1090遺物出土状況

古墳時代

数基の竪穴住居跡を確認している。検出した住居跡は、時期的に大きく2群に分別することができる。具体的には、古墳時代初頭に比定される一群と6世紀後半代を中心とする一群である。構造的には前者がカマドを有さないのに対して、後者は住居跡北壁面にカマドを付設する。後者の住居跡は前者に比して遺物出土が稀である点も特徴のひとつとなっており、この中のいくつかには、7世紀段階のものが含まれている可能性もある。

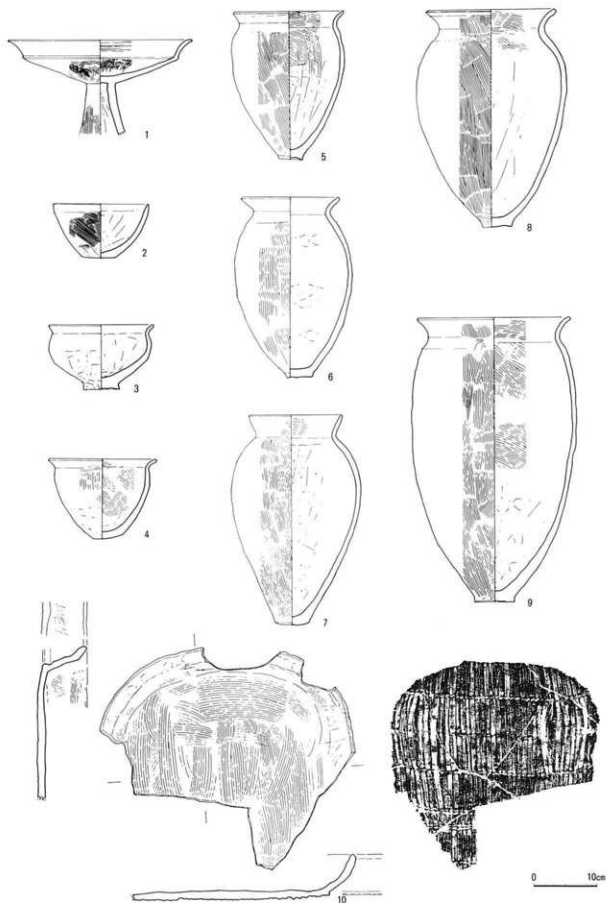
120SH0050は隣接する第92次調査地点の92SH0400の南側半分に相当する竪穴住居跡である。第92次調査での所見を総合すると平面規模は7m×6.7mを測り、現存壁高約0.5mを有する。住居跡壁際には幅0.1～0.2m程度の壁溝を巡らし、住居南壁際には屋内貯蔵穴と推定される土坑を配置する。土坑は1.0m×0.7mの規模をもち、住居床面からの深度0.45mを測る。住居床面直上には数個体の土器が床面に貼り付くような状況で検出されており、当住居跡の使用年代推定の手掛かりとなる。これらの土器の中には布留式系土器の特徴を具備するものがあり、特徴から古墳時代初頭に位置づけることができる。また、住居床面において確認した4本主柱のうちの二つの主柱穴を今次の調査では検出しているが、この中で西側に位置するものについては、柱抜き取り後、柱穴位置に長軸1.0m、短軸0.7m、深さ約0.2mを測る土坑（120SX1080）を掘削し、完存の複合口縁壺1個体と焼成後穿孔を施した壺体部を埋置する。



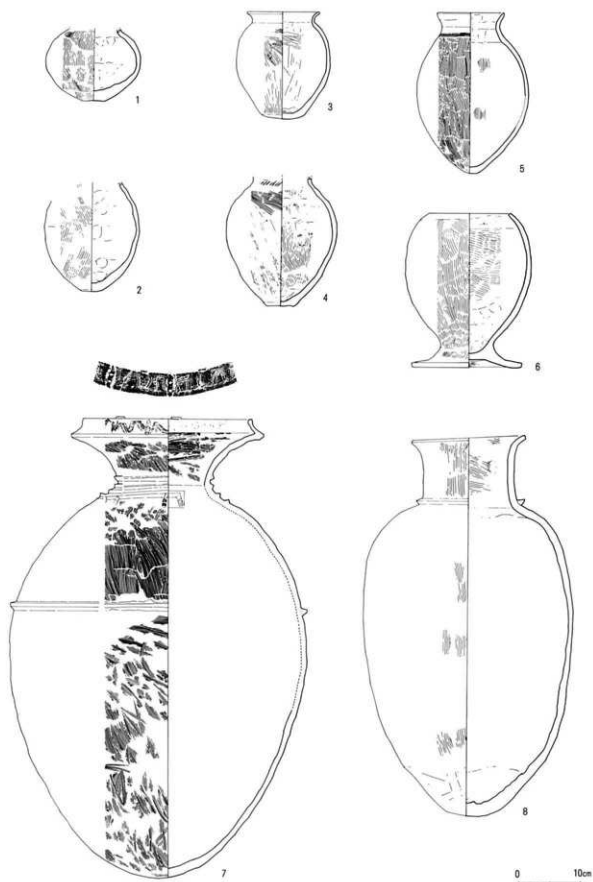
第29図 120SX1080遺物出土状況

古代（奈良時代）

掘立柱建物跡、柵列、井戸跡、土坑などを検出している。



第30図 120SE1090出土遺物実測図 1 (1/6)



第31圖 120SE1090出土遺物実測圖 2 (1/6)

確実に当該時期の掘立柱建物跡と考えられるものには120SB2520がある。建物方向はN-1°-Eを示す。隣接する90SB008の延長となる建物跡である。これにより、90SB008が4間×4間の規模を有する建物跡であることが明らかとなった。120SA2580はN-1.5°-Wの方向に造られた柵列状遺構である。心々で1.7mの間隔において2列の柵列が並列して存在する。

120SE1350は長方形の掘り方プランを有する井戸跡である。井戸機能停止時に井戸底まで大きく掘り返されており、井戸プラン西側に位置する円形の120SX1330は、この掘り返しのプランとなる。復元される井戸跡の掘り方プランは、推定で5.0m×4.2mの規模を有し、東側の不整合な平面プランを示す張り出し部は当初の掘削プランを示していると考えられ、この部分は検出面から1.8m下位においてテラス状のフラット面を形成している。検出段階では別遺構と考えていたが、遺構内に充填される埋土に差異はなく、井戸構築に際して120SE1350の掘り方として掘削されたものと考えられる。この点を傍証するように北側面は同一の方形辺を形成する。おそらく井戸構築に際し、従来プランで検出面から1.8m下位まで掘り下げた段階において井戸本体部の位置をより西側へ配置しようとする意思が作用したものと推定される。

また、東側のテラス形成レベルからは、西側に向かっておよそ0.4m前後の段差をもってさらにテラスを形成する状況があり、この地点を境として、さらに西側へ大きく落ち込む状況を確認することができる。これは先に指摘した120SX1330の下部遺構であり、これを便宜的に120SX1420と称呼する。120SX1420は東西に長い船底状の断面形状を呈しており、標高値2.9m付近において、一辺0.65mの方形プランを確認することができる。プラン確認面から井戸底までは約0.4mを測る。詳細な堆積土層の観察は夥しい湧水により実施できていないものの、120SX1420内には暗灰色を呈する粘質土の存在をかなり確認している。井戸の構造であるが、底部付近で確認できる方形プランの南北西には裏込めと思われる土層との境に垂直に立ち上がるシャープな面を随所に確認することができ、板状の囲繞施設の存在を想起させる。これに対して、東側部分は、120SX1420掘削時に破壊されており、底部付近に河原石による列石がみられる。120SX1420を埋め戻す際のなにかの施設に伴うものと推定さ



第32図 120SE1350完堀状況



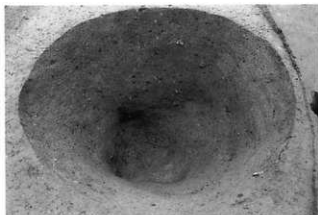
第33図 120SX1420土師器短頸壺出土状況



第34図 120SX1420土師器短頸壺出土状況

れる。

次に当該井戸跡の掘り返しプランである120SX1330について概述する。これは井戸掘り返しプランの西側、すなわち井戸本体が存在する部分に位置し、明らかに井戸本体に何らかの改変を意図して掘られたものと考えられる。平面プランは南北に長い楕円形を呈し、検出面での長軸径5.0m、短軸径4.5mを測る。120SX1330による掘り返しは、検出面から約2.0mの地点にまで及んでおり、これより下位については、120SX1420の掘削によって底面まで達している。



第35図 120SX2715検出状況

これらの井戸掘り返し遺構はどのような目的で掘削されたのか。両者による掘削がおよぶ最深面には土師器短頸壺の完存品が据えられていた。船底状を呈する120SX1420の西側は井戸底まで達しており、この土師器短頸壺の埋置を目的とするとの想定が最も妥当性が高いと考えられる。この想定を傍証するように埋置された土師器短頸壺は井戸底直上になく、約5cm上位に置かれている。この点は土師器短頸壺が井戸構築当初に埋置されたものでないことを示している。ちなみに埋置された土師器短頸壺は、完存品であり、若干口を斜め上方に向けながらもほぼ正位置の状態で出土している。このような状態であるにも関わらず、壺内部には若干の土砂流入が認められるものの、上部1/2には空洞部が残っている点は、木質あるいは紙質の蓋状のものが存在していた可能性を示唆している。

壺の埋置後、120SX1420、120SX1330は埋め戻されたと考えられるが、ブロック土を大量に包含する120SX1330の埋土（灰茶色シルト質土層）からは剣骨が1点出土している。

さらに、この上部に重複して構築される土坑120SX2715、120SX2731、120SX2730は、まさに土師器短頸壺の直上位置に造られており、各土坑とも桶鉢状を呈する形状、内部で火を焚いた痕跡が認められる点など、極めてマジカルな様相を呈しており、井戸の機能停止後、何らかの祭祀的な行為が行われたことを示している。

中世

多数検出した柱穴の中には、中世前期の土師器皿等を内包するものがあり、この時期のものも多数含まれている。古代の掘立柱建物跡と建物方位を大きく違える建物跡（120SB2630）などは当該期のものである。

調査対象範囲の東側部分を南北方向に斜走する溝状遺構（120SX0001）は検出面レベルにおいて、溝方向に直交する連続土坑が確認されており、他の事例との比較から道路状遺構の可能性も考えられる。16世紀後半代に比定される京都系土師器皿が出土しており、戦国期の所産と推定される。

小結

今回の調査対象地である第120次調査地点は、下郡地区の中でも比較的高所に位置しており、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝状遺構等を検出した。これらの遺構の概略はすでに記したが、ここでは、時期毎の変遷概要にふれ、まとめたい。

まず、弥生時代であるが、120SD1100・120SD1200の存在から、弥生時代中期後半～後期前葉前後の時期に、二条の溝状遺構が並走して存在することが明らかとなり、集落周囲に二重の環濠が巡らされていた可能性がわかに高まった。この二者のうち内側に位置する120SD1100の廃絶が若干早いと考えられ、この点は120SD1200の最終機能停止後に後期前葉から中葉に比定される土器の大量廃棄が認められる点からも首肯される。一括廃棄さ

れた土器の中には全面赤色塗彩された器台や擬凹線文を施した壺なども散見され、非常に多彩な内容を備えている。

また、若干時期は下るものの、120SE1090に廃棄された土器群はこれまで稀薄であった後期中葉前後の良好な資料として位置づけられ、当該期の土器様相解明に大きく寄与するものと期待される。

120SD1100はの埋没途上において、120SX1340・120SX1345が掘削されており、歯の出土により墓の可能性を考えた。実は同様の状態は近隣に位置し、今回の120SD1100の延長部と推定される溝状遺構が確認されている第109次調査地点においても確認されており、120SD1100の中でも局所的な現象ではない可能性が考えられる。これまで実態の不明であった墓地群の様態を示すデータとして重要である。

第120次調査地点で最も注目されるのが古代、奈良時代の遺構群である。隣接する第90次調査地点では、8世紀中頃～後半に比定される大型掘立柱建物跡群が検出されていた。今次の調査はこの建物群の延長にあたる部分であり、第90次調査での調査所見を補完する様々なデータを得ることができた。まず、第90次調査で90SB007とした建物跡についてである。これは南側、すなわち今次の調査エリアへ展開するという予測に基づき建物跡と推定していたが、今回の調査所見により、南側へは展開しないことが明らかとなった。つまり、柵列として完結することが明白となったのである。次に唯一の南北棟であった120SB008が、南側へは1間分しか延びず最終的に4間×4間の建物跡になることが判明した。以上の2点が前回の調査との関連において明らかとなった具体的な成果である。これにより、建物の空間配置の面から興味深い内容が示された。すなわち、第90次調査の90SB008と90SB007、ならびに今回明らかとなった90SB007の南側の柵列、120SA2580によりL字状、あるいはコ字状に圍繞された空閑地の存在が明らかとなった。この空閑地の中央部分には大規模な井戸が構築され、機能が停止した段階に大規模な掘り返しを行い、土師器短頸壺を井戸底付近に埋置する。しかも、埋め戻しに際しては刻骨を封入し、揺鉢状に掘り窪めた土坑内で何度も火を焚くという行為を行っており、極めて祭祀的な空間を想起させる。时期的には8世紀中頃～後半。まさに下部遺跡群内に広範な官衛的建物群の展開が認められはじめる時期に相当する。

(坪根)



第36図 120SD1200遺物出土状況

V 下郡遺跡群第121次調査 G区p-2地点

調査面積 200㎡
地域 A

調査期間 99.05.18～99.05.27
調査担当 坪根伸也・横山歩

今回の調査は、下郡地区土地区画整理事業に伴う道路建設の事前調査として実施したものである。

下郡遺跡群は大分川右岸に連なる自然堤防上に位置する。この自然堤防上には下郡遺跡群をはじめ、多くの遺跡が立地しており、この地域がかつてより居住空間として適していたことを窺い知ることができる。その中でも下郡遺跡群は弥生時代から現代に至るまでの複合遺跡を形成しており、各地点とも高い遺構密度を示している。

今回調査を行った第121次調査地点は下郡遺跡群の中でも北端に位置する。同調査地点は標高約5.0mであり、表土直下には黄褐色の基盤土層を認めることができる。遺構検出面は標高約4.8mから4.9mと下郡遺跡群内の他の調査地点と比べて低い。また、遺構の遺存状況も良好ではないことなどから、第121次調査地点周辺は後世の削平を広範囲に受けていると思われる。



第37図 調査地点位置図

今回の調査では土坑、柱穴、溝状遺構等、主に近世の遺構を検出することができた。

以下に概略を記す。

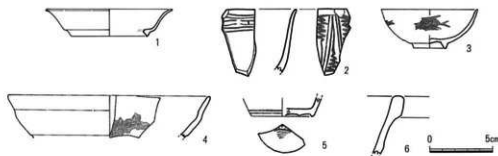
概略

第121次調査地点は南北に長い調査区となっており、東西幅約1mの限られた中での調査となった。

用途不明土坑 (121SX001・SX002・SX016・SX017・SX022・SX029・SX030) は全て、調査区が限定されていたため、平面プランの全容を把握することはできなかった。現存深度はいずれも0.2mから0.3mと浅く、埋土の堆積状況は自然堆積によるものである。

出土遺物には明治時代の型紙摺りの磁器片、寿文皿片、端反り碗片、紅皿片、陶胎染付碗片等が出土している。これらの遺物様相から19世紀前半から中頃にかけての所産と考えられる。

溝状遺構 (121SD028) は調査区の北端に位置する。遺構の大部分が調査区外へと展開するものであるとともに掘乱坑と重複していたため、溝の肩の一部のみの検出となった。121SD028は東西方向に延びており、旧字境と一致している。堆積土層の下層には青灰色粘質土が堆積しており、滞水していた可能性を指摘できる。主な出



第38図 出土遺物実測図 (1/3)

土遺物には唐津産の皿や肥前産の筒形碗片、擂鉢片等、近世の陶磁器片が多く、19世紀前半には廃絶したと思われる。

出土遺物

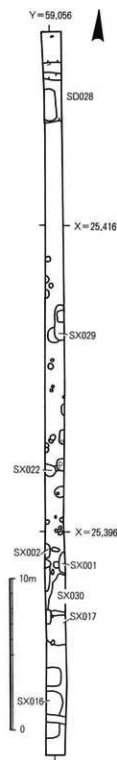
第38図1は121SX001出土の瀬戸美濃産寿文皿（白磁）である。1855年以降のものである。2は121SX002出土の肥前産端反り碗である。19世紀前半代の製品である。3は121SX017出土の肥前産染付小坏である。胎土は淡黄白色で、高台内側に砂が付着している。外側に大小6つの井桁文様が入っており、口径に対して高台が小さい。18世紀後半から19世紀中頃のものと思われる。4～6は121SD028出土の遺物である。4は唐津産の皿である。胎土は灰白色で薬灰釉を施軸している。17世紀前半代のものと思われる。5は肥前産染付筒形碗である。胎土は淡灰白色の磁胎である。高台は蛇の目凹型高台で、見込みに水とサギ（？）の文様が認められる。19世紀前半から中頃のものと思われる。6は擂鉢（肥前産？）である。焼成は悪く、土灰釉を施軸している。胎土は赤褐色を呈する。所産時期は小片のため不明である。

第121次調査地点の周辺状況

本調査地点の西側には第89次調査地点が存在する。ここでは8世紀後半から9世紀にかけての溝が検出されており、当調査地点の周囲にも古代段階の遺構が展開していることを示している。今次の調査では大規模な削平を受けていることもあり、古代の遺構は検出されていないが、周辺地域に当該期の遺構が遺存している可能性もあり、これら遺構の探索が今後の課題となろう。（横山）



第39図 調査区全景（南方方向から）



第40図 遺構配置図(1/250)

VI 下郡遺跡群第122次調査 E区m・n-16・17地点

調査面積 800㎡
地域 A

調査期間 99.05.26～99.10.29
調査担当 河野史郎・橋原嘉明

第122次調査地点は、遺跡群の中央やや南よりの、E区m・n-16・17地点に設定された。調査は、区画街路・庄ノ原佐野線工事に伴い実施された。隣接する調査区には、前述した工事に伴う第27次、第70次、第87次調査、その他の土地区画街路工事に伴う第26次、第54次、第59次調査等があげられる。

調査の結果、弥生時代、中世、近世の遺構群が検出された。以下、各時代別にその概要及び主要遺構について述べる。

弥生時代

弥生時代の遺構については、土坑及び小穴群が検出されている。全て弥生時代中期に位置づけられるものであるが、中期前半に位置づけられる貯蔵穴の可能性をもつもの（122SK217）と、中期でも中頃以降のもの（122SK021・053・190・217・299）が存在する。

中世

中世の遺構については、大きく中世前半期と後半期の2時期に分けることができる。

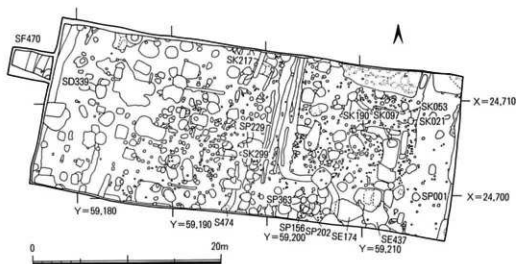
中世前半期の遺構については、土坑・井戸跡及び小穴群が検出されている。いずれも13世紀中頃～14世紀初頭に位置づけられ、一連のものと考えられるが、小穴群に建物跡を構成するものが無いことから、その中心部は、調査区外に位置するものと考えられる。検出された井戸跡（122SE437）については、幾内系の瓦質土師器鍋（6）、羽釜（7）、同じく幾内系の和泉型瓦器壺（3）、



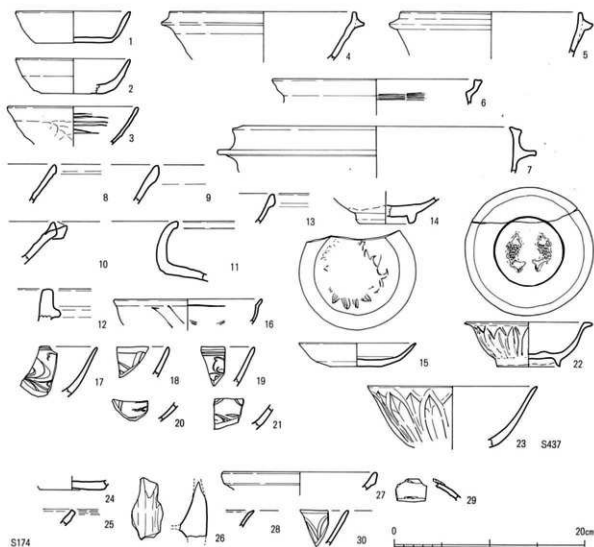
第41図 調査地点位置図



第42図 調査区全景（南方向から）



第43図 遺構配置図（1/400）



第44図 中世前半期遺構出土遺物実測図 (1/4)

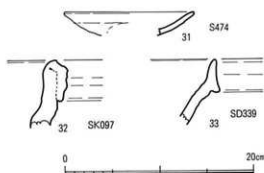


第45図 122SE174完掘状況 (北方向から)

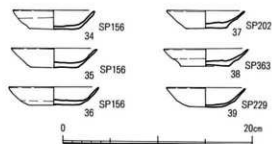


第46図 122SE437青磁碗出土状況 (西方向から)

井戸最下層から完存状態で出土した龍泉窯系双魚文青磁皿皿類 (22) 等、特に特出すべき遺物の出土がみられた。同じく122SE437を切る形で検出された122SE174からは、幾内系の瓦質土器羽釜の脚部と考えられる (26)、瀬戸卸皿 (25) 等が出土している。両者ともに素掘りの井戸であり、その土層観察から人為的に埋められた痕跡が認められた。この埋土からは、井戸の中から出土した陶磁器の中でも古い一群 (大宰府編年D期12世紀初頭～13



第47図 中世後半期遺構出土遺物実測図 (1/4)



第48図 近世墓出土土器実測図 (1/4)

世紀前半) が出土しており、周辺にこの時期の遺構が存在する可能性を示す。

中世後半期の遺構については、井戸跡、溝状遺構、土坑 (122SK097)、小穴群 (122S474) があり、調査区西半分を中心に検出されている。調査区西端で検出された溝状遺構 (122SD339) は、近世道路 (122SF470) と併行しており、それに先行する道路の側溝である可能性を有する。

近世

近世の遺構については、土坑、墓跡、井戸跡、溝状遺構、道路跡、小穴群がある。特に、調査区中央東側の位置には南北方向に延びる溝群は、これらの溝を隔てて東西に分かれて分布しており、何らかの区画を意味する溝



第49図 122SP156遺物検出状況 (南東方向から)



第50図 122SP204遺物出土状況 (西方向から)

状遺構であることがわかる。墓跡については、計28墓確認され、桶及び人骨等の遺存状態の良好さから、近世の墓制に関する良好な資料が得られた。特にSP156、202、363、229については、土器器皿 (34～39) の供献が確認された。このような土器器皿の供献は、桶の外側裏込めの部分に認められた。この他、遺存状態は悪いものの同じく桶外に漆器碗を埋置するもの122SP204もあった。道路跡 (122SF470) については、現存する道路の下面に形成されており、この道路が近世段階から踏襲されたものであることに加え、その初期段階では掘り込みを伴うことが確認されている。

最後に、調査区北面中央部よりやや西側の地点において、調査用排水溝を掘削する際に出土した板状木製品 (第51図) について記す。

板状木製品は、幅2.2cm、長さ16.7cm、厚さ0.7cmの板状を呈し、表面に「栗三[]」、裏面に「九月廿〇日」との墨書が認められ、その墨書内容から古代の荷札木簡の可能性を十分にもつものと考えられる遺物である。

一方、①この板状木製品の上に荷札木簡にみられる切り込み部が無いこと。②節の残る板であることや刀子による削り痕跡が確認されない等、木の選定・加工の面で疑問が残ること。③文字がやや崩し気味の行書である



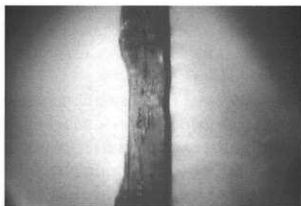
表 上



裏 上



表 中



裏 中



表 下



裏 下

第51図 墨書板状木製品赤外線写真

こと④その出土状況（明確な遺構に伴うものではなく、周辺にある近～現代の攪乱層から出土した可能性が高いことや、調査区内の古代遺構について、他時代の遺構に古代の遺物が混入する程度で明確な遺構が存在しないこと）等、古代の木簡とするには疑問点も残っている。

下郡遺跡群は周知のとおり古代郡衙推定地であり、この墨書板状木製品の評価については、慎重を記したいと考えている。今後、全国でのこのような木簡の類例調査を行うと同時に、下郡遺跡群内の周辺地区の調査成果を待ちたい。

（河野・栃原）

Ⅶ 下郡遺跡群第123次調査 B区d-15地点

調査面積 約158㎡
地域 A

調査期間 99.08.02～99.08.11
調査担当 坪根伸也・早田利宏

今回の調査は、下郡地区土地区画整理事業における区画街路建設に伴う事前調査として実施した。調査対象地は、大分市大字下郡六田に所在する。調査地点は、大分川河口右岸の河岸段丘上に形成される下郡遺跡群の西側地域に位置し、東200m地点に下郡桑苗遺跡^(※1)が存在する。

この地域周辺には、弥生時代前期末から中期の集落跡が展開していることが過去の調査により明らかになっており、近隣に弥生時代から現代にいたる水田土層の存在が推定されていた。調査は、重機により客土層以下第4層まで掘削した後、それ以下の土層については人力により掘り下げを実施した。

調査の結果、泥炭土層の分布を確認し、安定地盤は検出されなかった。土層観察によると、第1層は黄色の砂礫等と現代の廃棄物により構成される客土層である。第2層は淡青灰色粘質土、第3層は淡茶灰色粘質土で、両者とも非常に軟質である。第4層は灰色の強い粘質土であり、下部に鉄分が帯状に沈着している。第5層は淡茶灰色粘質土で、遺物を含み、下部には腐食植物等の堆積がみられる。第6層は淡茶灰色褐色土で構成され、鉄分やマンガンが沈着しており、非常に硬質である。第7層は茶褐色粘質土で非常に粘性が強く、下城式甕形土器口縁部及び底部と考えられる破片、須玖式系土器や逆L字状口縁甕（東北部九州系と思われる）などの中期的な要素をもった土器片が多量に出土する。また、トレンチ南側では、第7層中に部分的ながら白色粘土の集中が認められる。第8層は淡青灰色細砂層であり、本地点の基盤となる土層である。無遺物層である。

なお、第7層は北側においては認められず、中央の確認トレンチから北へ約2.54mの地点より西側及び南側に展開している。

また、第56図には今回の調査で出土した遺物の実測図を掲載した。

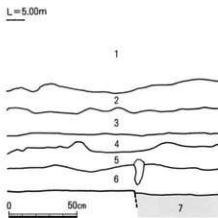
1は下城式甕形土器である。口縁部下に2条の刻目突帯を貼付する。器壁は比較的厚く、外面には被熱した痕跡が認められる。また、胴部外面にハケ目、内面にはナデによる調整が施されている。2は鉢部と脚部の外面境界線に刻目突帯を付ける脚付鉢である。鉢部と脚部の接合部はいわゆる円盤充頭技法で作られている。3・4は、東北部九州系甕の口縁部と考えられるものである。最も多量に出土しており、磨滅したものが多い。3は器壁が



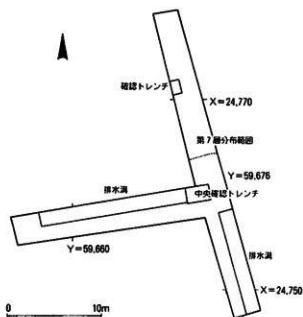
第52図 調査地点位置図



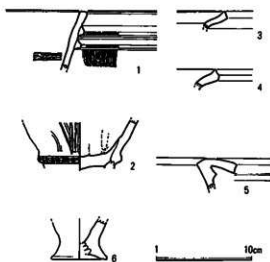
第53図 調査区全景（北方から）



第54図 土層断面模式図（1/30）



第55図 遺構配置図 (1/400)



第56図 出土遺物実測図 (1/4)

厚く、口縁部が丸みをもって立上り端部をつまみあげた形状を呈する。4は器壁が薄く、シャープな成形をしたものであり、大きくこの2種類が認められる。5は北部九州の弥生時代中期後半頃の土器である須玖式系甕の口縁部である。口縁部直下に突帯を巡らす。胎土には、比較的精良な粘土が使用されており、石英粒と褐色粒子が目立つ。口縁端部上面に黒斑が認められるが、磨滅が著しく調整等の詳細は不明である。6は東北部九州系甕の底部と考えられるものである。調整等は不明である。

以上の所見から第2、3層は耕作土、第4層是水田土層、第5層は包含層(水田土層か?)と考えられる。第7層はその特徴、検出レベル等から、調査対象地北側のB区において既に確認されている泥炭質土層と同一のものと推定される。これらの泥炭質土層は、弥生時代前期末から中期の集落跡が周辺に存在している事実を考慮すると、その一部は集落に隣接した水田土層である可能性も考えられよう。第7層から出土する土器群から、その時期は弥生時代中期後半から末頃に位置づけられると考えられる。泥炭土層は南方向へさらに広がるものと予測され、下部地域の弥生時代における地理環境を示す一資料を提供したといえる。(早田)

参考文献

註1 「下郡桑苗遺跡 七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書」大分県文化財報告書 第80輯 大分県教育委員会 1989

VIII 下郡遺跡群第124次調査 J区r・s-8地点

調査面積 360㎡
地域 A

調査期間 99.12.08～00.03.06
調査担当 坪根伸也・枋原嘉明

今回の調査地点は下郡地区土地画整理事業に伴う街路工事の事前調査として実施した。本遺跡は大分川右岸の自然堤防上に位置し、標高約5.5mを測る。

調査地点は街路建設地を対象としたため、東西に長い形状を呈しているが、調査地内の西側半分には整地層を確認することができる。出土遺物から19世紀後半以降の整地層と判断された。したがって、これ以前の遺構は整地層除去後に検出することができる。検出した遺構には弥生時代の堅穴住居跡、古墳時代の堅穴住居跡、近世墓、近世の溝状遺構等がある。以下、主要遺構について略述する。



第57図 調査地点位置図

124SH053は調査区中央部のやや西側に位置する堅穴住居跡である。東側は近代以降の掘乱穴に破壊され、また北側は調査区外に展開する。遺存形状から方形プランを呈すると考えられる。現存深度は最も残りの良い西側部分で約0.4mを測り、西側には張り出し型のカマドが付設されている。カマドは床面を掘り込み、そこに粘土を積み上げ、中央部に焚口を形成している。検出時には左側の袖石及び天井石は本来の位置から外れており、住居廃絶時に破壊されたものと考えられる。本遺構の所産時期は床面から出土した土師器から6世紀後半～末頃に位置付けられる。

124SH081は調査区西側に位置する隅丸方形プランの堅穴住居跡で、東側を124SH053に切られている。南側は調査区外に存するが、東西のプランから約7m四方の堅穴住居跡と推測できる。現存深度は約0.35mである。床面に貼り床を施し内部壁際に壁溝を巡らせ、中央部に地床炉を配置する。地床炉の南側には長方形の土坑があり、埋土に炭化物を含むことから灰溜りに使用されていた可能性が高い。主柱穴は全体のプランが確認できていないので明確な数は不明である。ただ、確認した柱穴に切り合い関係を有する重複が認められ、建替えが行われたことを示している。以上の諸施設は全て貼り床上面から掘り込まれたものである。貼り床除去後、床面に直径0.2m程度の柱穴2基が並列して確認されている。これらは地床炉の位置に近接しており、地床炉との関連が想定される。



第58図 調査区全景（西方向から）



第59図 124SH053完掘状況



第60図 124SH081完掘状況（東方向から）

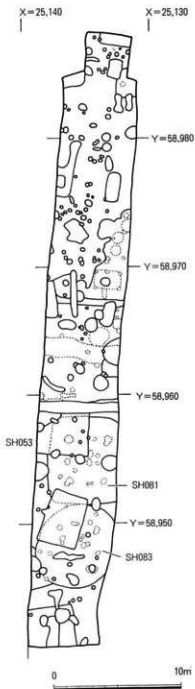
遺構出土遺物は小片ばかりで時期決定は困難であるが、住居跡の構造が、当該地域の弥生時代終末から古墳時代初頭のものに類似することから、現状ではこの時期前後のものと考えておきたい。

124SH083は調査区西側に位置する円形竪穴住居跡で、北東側に長方形の張り出しをもつ。直径約6.5m、現存深度は約0.3mを測る。南端は調査区外にあり、東側は124SH081に切られている。住居跡床面には貼り床を施し、その上から柱穴等の諸施設が掘り込まれる。中央部に地床炉をもち、その南側には土坑が認められる。124SH081に認められたものと同様な地床炉に伴う灰溜土坑と考えられる。この土坑には切り合い関係を有する造り替え痕跡が認められ、住居床面に認められる二ヶ所の地床炉が、土坑との対応関係から新旧関係をもち二者であることが確認できる。主柱穴は地床炉を中心に円を描くように、内側と壁側に配置されている。遺構の所産時期は、土坑内から出土した土器資料から弥生時代後期後葉から終末と推定される。

小結

今次の調査では弥生時代後期から古墳時代にかけての堅穴住居跡及び近世以降の遺構を確認することができた。今次の調査地点は、下部遺跡群内でも比較的高所に位置し、検出した堅穴住居跡は、当地点が弥生時代後期、古墳時代において、集落分布範囲の一角に相当することを示した。中世に関しては遺構を確認することはできなかったが、調査区東側にあたる第125次調査地点では中世居館の一部と考えられる巨大な堀跡が確認されている。居館推定地の隣接地である今次の調査地点において遺構が皆無であるという事実は、居館との位置関係において重要な示唆を与えるものであり、居館とそれに付随する空地という観点から、今後の周辺調査の結果が注目される。

（坪根・栃原）



第61図 遺構配置図 (1/300)

下部遺跡群
第124次調査
J区 r+s-8

IX 横尾遺跡群確認調査

調査面積 1,685㎡
地域 E

調査期間 99.05.12～99.07.07
調査担当 河野史郎・永松正大・宮川泰男

平成11年度の横尾遺跡群の確認調査は、区画整理対象地内における遺跡の有無及び遺構密度、遺構検出面深度等のデータを収集し、今後の発掘調査期間の算出、調査対象地の絞り込み等を目的とした。全21地区にわたる広い範囲に調査区が設定され、調査の結果、その時期や密度の違いはあるものの、21地区中17地区で遺構・遺物が確認された。以下、遺構・遺物が確認された調査区の中でも特筆すべきものについて、その概要を記す。



第62図 調査地点位置図

YKSS-009 (A-10・16区)

調査区に6本のトレンチを設定し、1トレンチからは、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝条遺構1条、小穴群が、2トレンチからは、時期不明の溝状遺構が2条（一部地形の落ちが含まれるか?）、3・4トレンチからは、時期不明の小穴群が、5トレンチからは、弥生時を含む黒褐色系の堆積土の下層より小穴群が、6トレンチからは、時期不明の小穴群がそれぞれ検出された。

検出された遺構の内、1トレンチで検出された掘立柱建物跡（SB001）については、2間×?間の東西棟建物と推定され、柱間は、約1.8mを測る。その地形から調査区の東側に展開すると推定されるが、ほぼ主軸を同じくする溝状遺構（SD002）の存在から西側に展開する可能性も残したい。同じく1トレンチで検出された土坑の内、埋土に拳大の礫が含まれるSK001が注目される。この他6トレンチで検出された柱間が2.3mとやや幅広であるが、櫓の可能性を有する小穴群（SA004）等がある。

YKSS-013 (B-14区)

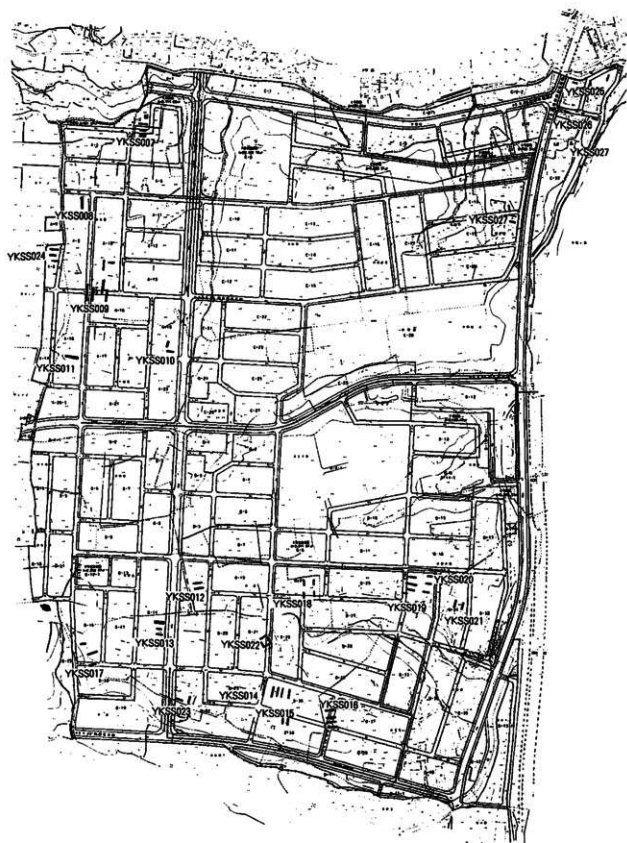
調査区に3本のトレンチを設定し、3本のトレンチ中1本のトレンチから遺構が検出された。遺構の検出されたトレンチは、調査区北端にあたる3トレンチで、検出された遺構は、掘立柱建物跡（SB002）を構成するものを含めた柱穴群及び土坑である。検出遺構は、土層図中の第2層上面より形成されている。出土遺物に関しては、P001とした柱穴内よりほぼ完存となる土師器環が出土している。その時代的な位置づけについては、その法量及び形態から13世紀後半から14世紀中頃を考えたい。

YKSS-018 (D-24区)

調査区に4本のトレンチを設定し、4本中すべてのトレンチで遺構が検出された。検出された遺構は、土坑及び小穴群で、遺構の時期については、表土中及び遺構埋土から出土した遺物より9世紀前半から中世にかけての遺構群と推定される。

特に4トレンチで検出された大型の土坑（SK001・002）について、当初その検出状況から溝状遺構の可能性を考えていたが、一部掘り下げた際の遺物の出土状況及び近接する調査区で同時期の廃棄土坑群が検出されていることから、今回の遺構についても廃棄土坑として考えている。出土遺物については、SK001より土師器環及び高台杯、又は碗と考えられるものが、SK002からは、土師器環、甕（金紋型甕）、土錘群がそれぞれ出土しており、時代的には9世紀前半の時期が考えられる。この他、2トレンチの表土中より、外面に刷毛及びへう状の工具による文様が施された青磁の壺又は瓶と考えられる遺物も出土している。

（河野）



第63図 榊尾地区地籍調査位置図 (1/6,000)

X 横尾遺跡群第75次調査 C-26・27地点(多武尾遺跡)

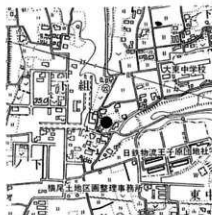
調査面積	約1,484㎡	調査期間	99.05.17～99.08.04
地域	E	調査担当	塩地潤一・永松正大・宮川泰男

主要遺構

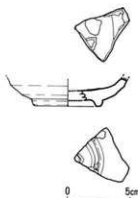
- SB001……………9世紀前半の掘立柱建物跡
- SA095・105・115……………柵列跡
- SX070……………弥生時代中期前半の土壇
(土壇墓の可能性を想定している)
- SX064……………14世紀以降に比定される木蓋土壇墓
- SE080……………17世紀初頭頃に埋没した井戸跡
- SD015……………19世紀中頃～後半に埋没した南北溝
- SD100……………19世紀中頃～後半に埋没した南北溝
- SA085……………19世紀中頃以降の集石(根石)列
- SX078・044・077・083……………19世紀後半頃の埋藏
- SX029・081・084・086・089・090……………18世紀後半～19世紀中頃に埋没した土坑
- SX040・071・073……………地層横転遺構
- 暗茶土……………縄文時代早期の包含層

主要遺物

朝鮮王朝産陶器、上野・高取系播鉢



第64図 調査地点位置図



第65図 SD015出土遺物(1/3)

調査地は大野川の分流・乙津川左岸に広がる鶴崎丘陵上の標高約31mに位置し、乙津川に向けて開口する開析谷の北側緩斜面にあたる。

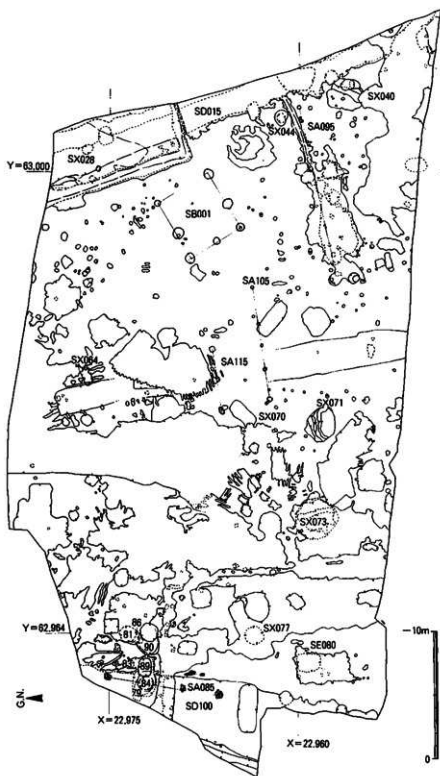
調査の結果、縄文時代早期の包含層を基盤面として弥生時代～近代にかけての遺構群を検出した。この中でも注目されるものが掘立柱建物跡と墳墓の存在である。

前者については2間×2間の東西棟と考えられ、出土遺物より9世紀前半代に比定される。柱の掘り方は直径約0.9mの円形を呈し、深さは僅かに0.1m～0.2mを測る。柱痕の直径は約0.3m前後である。周辺に展開する当該期の一連の遺構群として位置付けられよう。また、後者については出土した土師器小皿片により14世紀以降に比定した平面隅丸長方形を呈する土壇で、埋土ならびにその堆積状況から木蓋土壇墓と判断したものである。埋土は茶褐色土を基調とするブロック土層であり、土壇中央部から円錐状に堆積したと考えられる。つまり、木蓋の朽廃により上層の積み土が土壇中央部から流入し、その後の木蓋の崩落に伴って一挙に埋没したものと想定される。

さらに、SX070は平面隅丸長方形を呈する土壇で、出土した東北部九州製片から弥生時代中期前半に比定したものである。残存状態が悪く、埋土の状況からは積極的な評価が出来なかったものの、平面プランより土壇墓の可能性を想定して土壇サンプリングを行った。分析の結果からはリン酸含量において高い傾向を示すことが指摘されており、遺体が埋納されていた可能性が高いという注目される報告が提示されている。

今回の調査によって丘陵を分断する谷部においても遺構の存在が判明した。また、縄文時代早期の包含層については区画整理予定地内において初めて発見された縄文時代の遺構であり、今後の調査においては両者ともに留意する必要がある。

(塩地)



第66圖 遺構配置圖 (1/300)

XI 横尾遺跡群第76次調査 C-25地点（多武尾遺跡）

調査面積 約1,150㎡
地域 E

調査期間 99.08.09～99.10.23
調査担当 塩地潤一・永松正大・宮川泰男

主要遺構

- SX001……………弥生時代後期初頭頃に比定される土坑
- SB040……………13世紀初頭以降に比定される掘立柱建物跡
- SB080……………14世紀後半～15世紀前半頃の掘立柱建物跡
- SB125……………14世紀後半～15世紀前半頃の掘立柱建物跡
- SB090……………15世紀前半以降に比定される掘立柱建物跡
- SB020……………16世紀代に比定される掘立柱建物跡
- SB050……………17世紀前半頃に比定される掘立柱建物跡
- SB030・100……………掘立柱建物跡
- SA120・195……………柵列跡
- SX130……………円形周溝遺構
- SX200……………大形円形建物跡
- SD071……………15世紀末～16世紀初頭頃の溝状遺構
- SX150……………石積み土坑から内面に格子目文が残る唐津焼締陶器甕片が出土している。



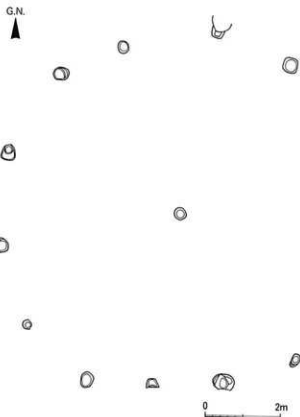
第67図 調査地点位置図

調査地は大野川の分流・乙津川左岸に広がる鶴崎丘陵上の標高約31mに位置し、第75次調査地点の北東部に隣接する。調査の結果、上記主要遺構をはじめとした弥生時代～近世にかけての遺構群を検出した。この中でも注目されるものが掘立柱建物跡群と円形周溝遺構ならびに大形円形建物跡の存在である。

掘立柱建物跡群についてはすべて1間×3間の柱間を有し、ほぼ同規模の建物跡と推定されるものである。また、その主軸もほぼ同じであり、出土遺物の属属年代からも建て替えが行わ



第68図 SB050出土遺物実測図 (1/3)



第69図 SX200平面実測図 (1/100)

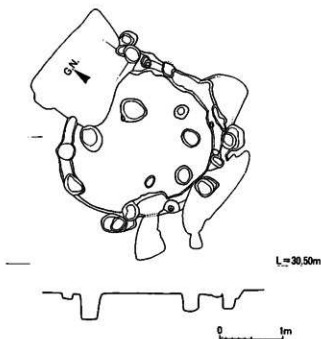
れたと考えられる。つまり、これらの建物跡群については主軸をほぼ一定に保ちながら13世紀初頭頃から造営がはじまり、14世紀後半以降建て替えを繰り返しながら17世紀前半段階まで存続したと判断できる。

さらに17世紀前半段階においては建物廃絶に伴って（SB050）柱痕上面に唐津焼陶器碗を埋置する祭祀行為を行っており、周辺に存在する半町規模の方形館跡の存在や戦国大名大友氏の豊後除国そして近世城下町の形成などとの関連が注目される現象と捉えている。

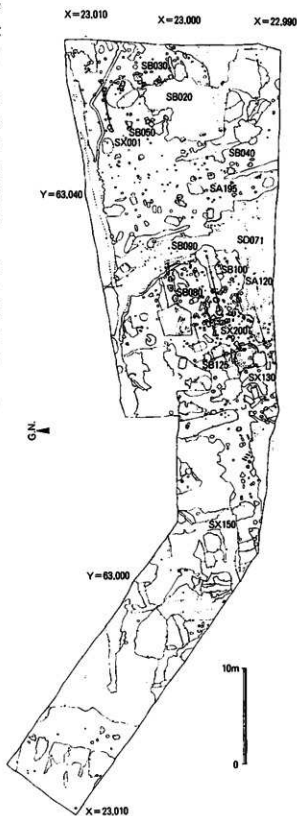
円形周溝遺構については直径約2.5mを測り、幅約0.2mの溝が円形にめぐる。現状でこの溝は東側部分において途切れているものの、残存する溝の深さを考慮すると当初から開口していたかは断定できない。また、周溝床面ならびに周溝内側には柱穴が存在するが、これもその相関性については断定できていない。周溝内側において検出された柱穴からは9世紀代に比定される土師器坏片が出土している。

大形円形建物跡についてはセンターピットから直径約10mの範囲に柱穴がめぐる。この建物跡は掘立柱建物跡（SB090・125）との重複関係が認められ、中世後半期（15世紀前半以降）に比定されるものである。管見のかぎり、類例は皆無であり、今後の周辺地における遺構の展開を踏まえて性格付けを行っていきたいと考えている。今後の調査に期待したい。

（塩地）



第70図 SX130平面断面実測図（1/60）



第71図 遺構配置図（1/400）

XII 横尾遺跡群第77次調査 C-15・22地点

調査面積 約1,200㎡
地域 E

調査期間 99.11.01～2000.02.27

調査担当 藤沢敏夫・永松正大・宮川泰男

今次の調査地は、大野川流域左岸に広がる鶴崎丘陵上に位置し、南に開析谷を望む標高約31mに立地している。調査区は、環壕集落である多武尾遺跡の西側にあたり、第72次調査区北と隣接する。

調査の結果、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世（幕末期）の遺構を検出した。

弥生時代の遺構は、円形竪穴住居跡（SH100）を検出した。遺存状態は悪く、わずかに壁周溝や、貼床、遺構中央に土坑（SK250）が確認できた。5.5m×5.0mの楕円形プランで、壁周溝は南で切れる。SK250から弥生時代後期末の甕片が出土、当該期に廃絶したと思われる。主柱穴は、5本が確認できた。

古墳時代の遺構は、隅丸方形竪穴住居跡（SH050）を検出した。4.0m×4.5mの平面プランを持ち、検出面から床まで約0.25mを測る。遺構南側に焼土の集中と、1.3m×0.85mを測る隅丸長方形プランを呈する屋内土坑（SK260）や、壁坑が認められた。壁坑は中央部に向かい、間仕切りの性格を持つと思われる、北西側に地山削り出しのベッド状部分を確認した。中央部付近は貼床が施され、貼床面に焼土を検出した。炉跡であろうか。主柱穴は、東西に2本確認されている。SK260は、中心部に落ち込みがあり床までの深さ約0.4mを測り、南側には壁坑が取り付く。遺物が遺構上層で集中してみられ、土層堆積と出土状況から、住居廃絶時に廃棄したものと考えられる。屋内土坑の性格は、不明である。SK260からの出土遺物は、小型丸底壺、高杯、壺、甕、砥石が見られ、小型丸底壺は在地で造られた模倣形態であり、4世紀後半～末に比定できると考えられ、住居跡も当該期に廃絶したものと想定される。

古代の遺構は、掘立柱建物跡（SB160・220・240）、溝状遺構（SD001）1条を検出した。SB160は2間（3m）×4間（6.8m）、SB220は1間（4.0m）×2間（3.0m）で、柱穴の深さが0.5mと深い。SB240は2間（3.8m）×2間（4.3m）の総柱建物跡で、径0.2m前後の柱痕が確認された。SB160・220・240の柱穴内から古代の所産と思われる土師器破片が出土している。SD001は南北に延び、北から13.5m南で揺鉢状に立ち上がる。遺物は流れ込んだ状況であり、篠簞座？壺底部（糸切痕）が出土している。この壺は、10～11世紀代の所産と考えられる。

中世の遺構は、掘立柱建物跡（SB020・030）、溝状遺構（SD040・060・090）を検出した。SB020（N-13°-E）は2間（4.8m）×3間（7.8m）、SB030（N-14°-E）は2間（3.8m）×3間（6.9m）で、SD001をきる。両遺構とも、柱穴が隅丸方形や楕円形プランであり、また方向性も同方向である点などからSB020の建て替えがSB030と考えられる。SB030の柱穴の裏込め土から京都系土師器片（16世紀後）が出土しており、両遺構も当該期におさえられる。SD040・060は、並んで北東から南西に延び、SD060は第72次調査で確認された溝状遺構の続きである。SD040は幅2.5m、深さ0.6m、断面逆台形で、最下層より京都系土師器片（16世紀後～末）、青花皿B群（15世紀中～16世紀前）、玉縁口縁青磁碗（14世紀末～）が出土し、遺構廃絶を16世紀後半～末に比定できる。

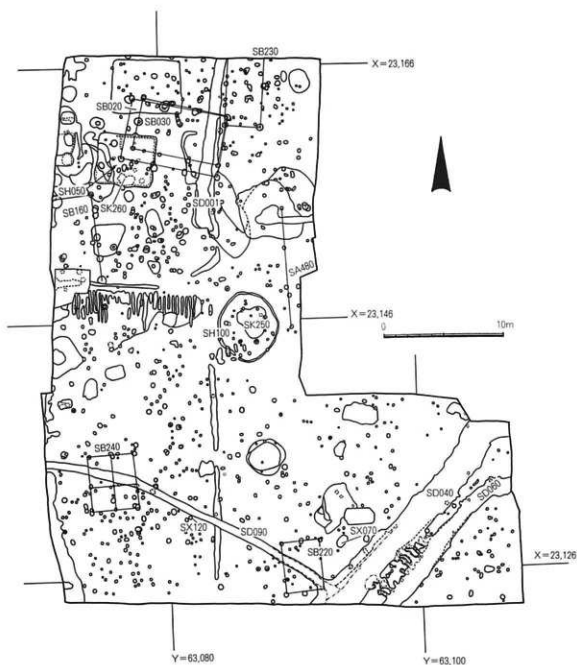
以上の調査結果を踏まえ、まとめると、弥生時代終末の竪穴住居跡を確認し、また、古墳時代初頭段階の住居跡が見つかるなど、弥生時代か



第72図 調査地点位置図



第73図 調査区全景（上部が南）



第74図 遺構配置図 (1/300)



第75図 SK260遺物出土状況(北から)

ら古墳時代への集落の変遷の一端を窺うことが出来た。中世では、溝状遺構と建物跡を確認し、建て替えが見られることから継続性を想定することが可能である。今回の調査で、性格不明土坑(SX070・120)がある。SX070は明らかな人為推積があり、墓壙等が考えられ、SX120は、ピット内から約10点の土鍾が確認され、単なる流れ込みとは考えにくく、何らかの祭祀行為と想定される。

(永松)

ⅩⅩ 横尾遺跡群第78次調査 C-22地点

調査面積 約943㎡
地域 E

調査期間 00.02.08～00.03.22

調査担当 藤沢・永松・宮川・羽田野・早田

本調査は、横尾地区の区画整備に伴う街路建設に際して、記録保存を目的に行われた。調査地は、鶴崎丘陵舌状台地の東端、標高約31mに立地する。調査区の北側は第77次調査区、東側は第72次調査区にあたり、多武尾道路の西側に位置する。

調査の結果、弥生、古墳、古代、中世から近代までの各時代の遺構を検出した。各時代毎の概要を述べることにする。

弥生時代の遺構は、円形竪穴住居跡（SH050）1基、土器棺（SK051）を検出した。SH050は、約5mの円形プランを有し、土層堆積は単層である。出土遺物は弥生時代後期中葉から後葉に比定できる複合口縁壺や壺、甕が破片資料の状況で出土し、廃棄されたものと思われる。床面は、地山ブロックまじりの貼床が施され、壁周溝は確認されていない。貼床面から焼土の集中区や、隅隅長方形の土坑が確認でき、地床炉と灰溜土坑と考えられる。主柱穴は4本確認できた。SK051（第79図）は、0.73m×0.45mの中心がやや窄まる楕円形の平面プランで、北西～南東に主軸をもつ。削平を受けており、遺構上部は欠損していると思われる。複合口縁壺胴部と甕の口縁部を向かい合わせて、埋置している。土層観察から、黒茶褐色土で裏込めし、土器を安定させているのが判る。出土した甕から、弥生時代後期中葉に比定できる。

古墳時代の遺構は、竪穴遺構（SK020）1基を検出した。平面隅隅長方形（3.6m×2.8m）で、検出面から床面まで、0.35～0.4mを測る。土層観察所見から、床から浮いた状態で焼土及び炭化材の集中堆積が見られる。壁に被熱の形跡はなく、また遺物が破片資料である点などから、焼土、炭化材、遺物は廃棄されたものと思われる。床面には、約0.15m掘り込んだ壁坑が確認できたが、地床炉、灰溜土坑は確認できない。遺構の性格は不明である。出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭の範囲におさまると思われる。

古代は、掘立柱建物跡（SB060）を検出した。2間（3.6m）×3間（5.4m）+αで、主軸をN-5°-Wに振る。径約0.4m、深さ約0.55mで、柱痕埋土内に9世紀前～中の土師器環が出土している。

中世では、溝状遺構（SD013・030・040）が検出された。SD013は、北側はSD004に切られている。土層観察から、断面は逆台形で滯水の痕跡等は見られず、地山の黄褐ローム土ブロックを含むなど、溝以外の機能を持つ可能性がある。龍泉窯系青磁Ⅰ類（13世紀代）が出土しているが、上層出土であり時期は確定できない。SD030・040は、SF001に切られる。SD030から瀬戸天目碗片、SD040から京都系土師器皿片（16世紀後半）が出土している。

近世は、溝状遺構（SD004）を検出している。SD004は、東西方向に延び、西側でやや南に振って調査区外に延びる。断面は緩やかな逆台形を呈し、土層堆積は暗茶褐色土を基調としており、溝以外の機能を持っていたかもしれない。砂目段階の唐津焼碗（17世紀前）が出土し、近世前半まで機能していたと思われる。

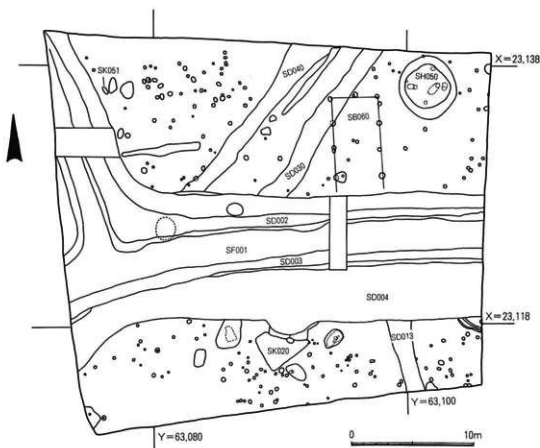
近代から現代の道路状遺構（SF001）が、東西方向に延び、西側でもう1本の道路と合流し、やや南に振り、調査区外に延びているのが確認された。第72次調査の道路状遺構の続きで、トレンチを設定し土層観察を行い、



第76図 調査地点位置図



第77図 調査区全景（上部が東）



第78図 遺構配置図 (1/300)

道路面の造成を側溝の造成・廃絶から4回確認した。

道路の構造は、側溝廃絶後、暗茶褐色などの粘質土と地山ブロックを0.4m～0.5mに嵩上げを行ったことが判る。遺物は、全て側溝より出土しており、最下面の側溝から近世陶磁器（江戸期）→銅版転写の碗・皿（明治～大正）→型紙刷碗（明治）・古銭「十銭」（昭和）・ガラス（近現代）と変遷しており、前年度調査で最終廃絶期が、昭和23年頃であり、約70年以上使用されていたと思われる。

以上が、各時代の概要であるが、今次の調査で第69次・77次調査で確認されている古墳時代の遺構が、本調査でも確認され、多武尾遺跡における当該期の遺構が更に西側に広がることが認められた。第72次調査で確認された道路状遺構の時代が確定でき、その構造が判明した。また道路の合流個所が確認でき、今後の調査と合わせて

横尾を含めた鶴崎丘陵の道路網を想定できるようにしたい。

（藤沢・永松）



第79図 SK051遺物出土状況

XIV 大友館跡第3次調査

調査面積 2,300㎡
地域 A

調査期間 99.11.01～00.03.31
調査担当 河野史郎

大友館跡第3次調査は、第1次調査で未確定となった庭園の西端部の確認、庭園に付属する建物跡の存在の確認を目的とし、第1次調査の西側隣接地に調査区が設定された。

調査の結果、庭園遺構についてはその西端部が確認され、この他石製礎盤を有する建物跡、玉砂利集中部等が確認された。調査は、確認調査という性格上全ての遺構を完掘するのではなく、主要遺構についてサブトレンチを設定し、部分掘り下げを行う形で行われた。以下確認された主要遺構についてその概要を記す。

建物跡

建物跡については、調査区北西部において石製の礎盤を有する建物跡を確認した。確認された柱穴は2基で、周辺部の擾乱のためその他の柱穴については確認されなかった。確認された柱穴の柱間は、2.2mを測り、石製礎盤は、東側が地面に露出する形で、西側は柱穴の底部にそれぞれ設置されていた。この建物については、周囲の擾乱状況からその全容は不明であること、庭園遺構との距離が離れすぎていること等の問題はあるが、館内において掘立柱以外の建物跡が確認されるのは初めてであり、注目される。出土遺物は、土師器の小片のみで時期は不明である。

玉砂利集中部

玉砂利集中部は、調査区中央やや北西よりの位置で確認された。サブトレンチによる土層観察の結果この玉砂利集中部は、玉砂利を敷き詰めたと言うよりはむしろ、整地層中に玉砂利が多く含まれているといった状況であった。

庭園遺構

庭園遺構については、検出作業の結果、第1次調査で確認された東端部より西に83.6mを測る地点で収束（完結）することが確認された。このことは、単に庭園遺構の東西長の確認だけではなく、当初、堀等の区画施設的な性格も考えられたこの大型遺構を、庭園遺構とする有力な要素となった。加えてその平面形態が、西端部分で



第80図 調査地点位置図



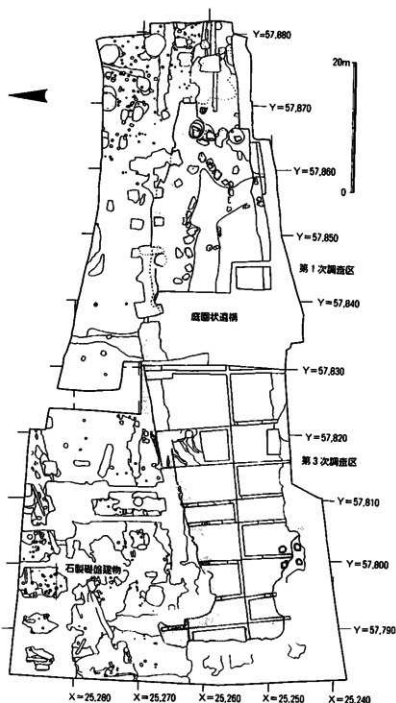
第81図 調査区全景



第82図 石製礎盤建物跡全景（南方向から）



第83図 玉砂利検出状況



第84図 遺構配置図 (1/500)

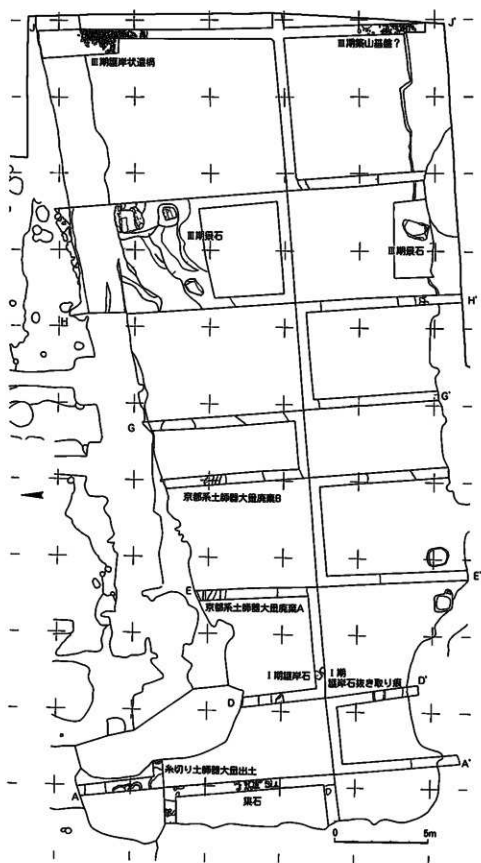
系の産片(24)がある。特に大量に出土した糸切りの土師器皿については、赤褐色を呈し内面に工具による段成形が施された特徴的な土師器皿で、その法量も11径で6.9~7.6cmと法量分化しており、従来の在地系土師器と違う様相を示している。なお、これらの土師器は、その出土状況から遺構を埋める際に廃棄されたものと考えられる。

続くⅡ期庭園遺構については、東側をⅢ期庭園遺構に切られ、西側についても掘乱やⅢ期の不明遺構に切られておりその全容は不明であったが、Ⅰ期の南北方向から東西方向に主軸を変え、よりⅢ期庭園遺構に近い形及び

北側に突出する特徴的な形態であることが確認された。

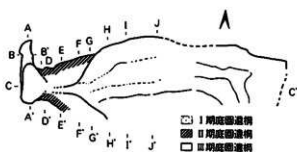
庭園遺構の内部の状況については、サブトレンチによる部分調査が行われた。その土層観察の結果、庭園遺構には切り合いが存在し、大きく3時期存在することが確認され、西から東側への庭園遺構の移転・拡大・改修等の状況が明らかになった。このことは、前述した特徴的な平面形態が遺構の切り合いに起因するものであることも示している。以下、各時期別に遺構の概要を記す。

最も古く位置づけられる西端部分のⅠ期庭園遺構は、南北方向に主軸を持つ楕円形状を呈する平面形態である。その内部構造については、サブトレンチによる調査により、その南東部を中心に第1次調査で確認されたものと比べやや小振りな石による護岸石3基とその抜き取り痕跡1カ所を確認、その中央部よりやや西北部において、集石が確認された。集石の性格については、築山の基壇部や、景石等が想定されるが、サブトレンチによる調査のため詳細は不明である。出土物については、その大半が糸切りの土師器皿(1~23)であり、陶磁器類については、少量の青磁小片と磁州窯

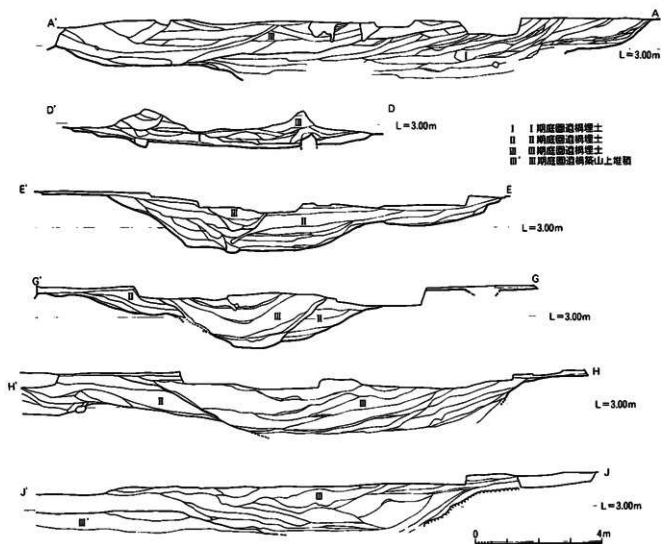


第85图 庭園状遺構平面図 (1/200)

範囲になっていることわかる。サブトレンチによる内部の状況確認では、護岸石や景石は確認されなかったが、東側にテラス状の段を有し、このテラス部分から大量の京都系土師器の出土（京都系土師器大量廃棄A）が確認された。出土した京都系土師器（25～28）は、口径13.0cm前後を測るもので統一されており、白色系の胎土に薄手に成形された京都系土師器でも古い一群に属するものと考えられる。京都系土師



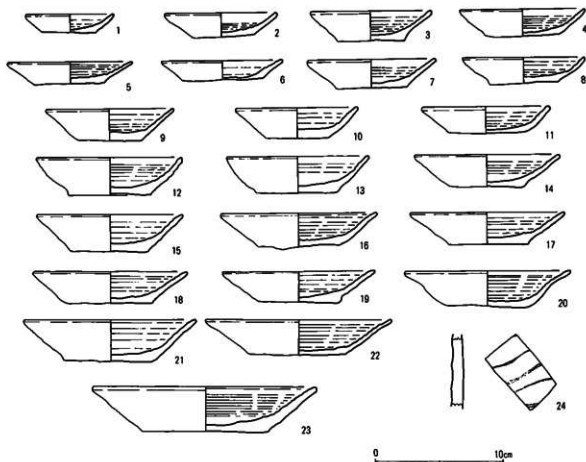
第86図 庭園遺構切り合い概念図



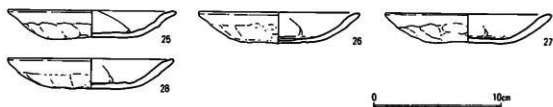
第87図 庭園遺構土層断面図（1/120）

器の大量廃棄地点は他にも、サブトレンチNo.6の最深部付近でも確認されており（京都系土師器大量廃棄B）、A地点と同様の古い京都系土師器の一群（29～35）が口径で10.6～16.0cmと法量分化した状態で出土している。このような京都系土師器の出土状況の違いは、館内における京都系土師器の使用方法に関わる貴重な情報といえよう。

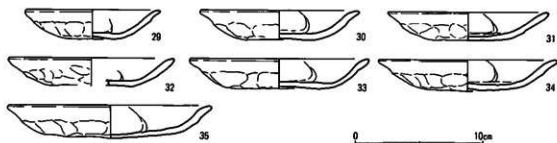
最後にⅢ期庭園遺構については、西側にむかって集束する大型の景石や、拳大の円礫を敷き詰めた護岸状況が確認された。なお、第1次調査で確認された庭園遺構は、この時期のものであると考えられ、この結果、Ⅲ期庭



第88図 I期庭園遺構出土遺物実測図 (1/3)

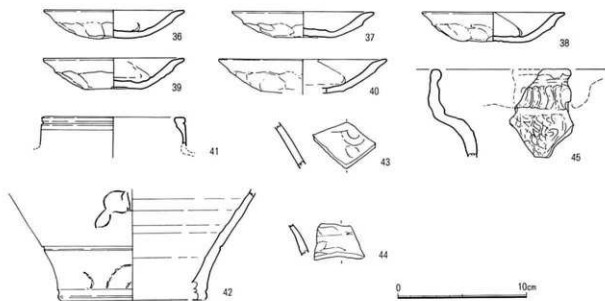


第89図 京都系土師器大皿廃棄A出土遺物実測図 (1/3)



第90図 京都系土師器大皿廃棄B出土遺物実測図 (1/3)

園道構の東西長は、66mを測るものとなった。この他、サブトレンチNo.9の南部の土層観察では、台形状に盛り上がった土層が確認された。特にこの台形状の土層を抜いたNo.9 トレンチ東部分では、その下層から墨書による梵字の記された凝灰岩製の宝塔の一部を含む渠石が観られた。この渠石がなんらかの基礎であるとするならば、その土層にみられる台形状の高まりについては築山である可能性を示すものと考えられる。この他、Ⅲ期庭園道



第91図 III期庭園状遺構出土遺物実測図 (1/3)



第92図 糸切り土師器出土状況



第93図 京都系土師器集中廃棄A出土状況



第94図 I期庭園状遺構護岸石全景



第95図 III期庭園状遺構景石全景

構の西端部については、西側に向け収束し一旦溝状となった後、I・II期庭園状遺構と重なる部分において再び広がる状況が確認されている。その機能等は不明であるが、今後、類型等の検討を待ちたい。III期庭園状遺構の出土遺物については、II期庭園状遺構より出土するものと比べ新しい属性（厚い器壁・外反する口縁部・大量廃棄ナシ・灯明皿への転用等）を有する京都系土師器（36～40）、ベトナム産長胴瓶（41）、華南三彩壺（42・43）、同水注（44）・同鳥形水注等がある（45）。

（河野）

XV 大友館跡第4次調査

調査面積 132㎡
地域 A

調査期間 99.12.15～00.02.29
調査担当 池邊千太郎・奥村義貴

第4次調査区は、推定大友館の中心にあたり、主殿もしくはそれに付随する施設が検出されることを想定して調査が行われた。

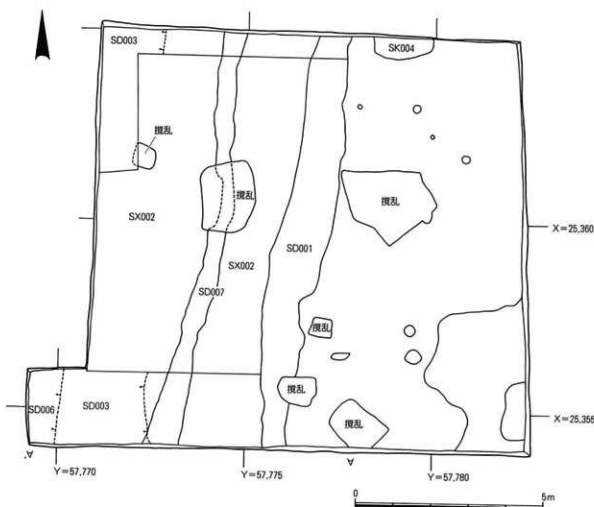
調査の結果、16世紀中頃の堀（SD003）、16世紀中頃の区画溝（SD006）、16世紀後半の整地事業跡（SX002）、平行する2本の区画溝（SD001・SD007）、廃棄土坑（SK004）がそれぞれ確認できた。その他は、ピット数基と擾乱である。

調査区は、地表から約25cmほどに現在の埋土が見られ、その下部は江戸時代の水田層が堆積した状態である。その層を除去した段階で16世紀後半の整地層（SX002）が検出でき、これを基盤面とする遺構の存在が確認できた。検出した遺構は、廃棄土坑（SK004）と溝状遺構（SD001・SD007）である。

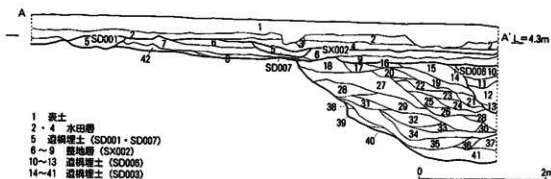
廃棄土坑（SK004）は調査区北東側で検出され、直径1.7mを有する。出土遺物には、16世紀後半の京都系



第96図 調査地点位置図



第97図 遺構配置図 (1/100)



第98図 SD001・SX002・SD003・SD006・SD007土層図 (1/60)

土師器が多量に出土している。

2条の溝状道橋 (SD001・SD007) は整地層 (SX002) を基盤面として掘削されており、SD001とSD007は共に幅約1.0m、深さは検出面から約10~15cmを有する。この2条の溝は2m間隔で平行に南北 (N-8°-E) に延びている。道橋の性格として館内を分けていた区画溝か道路側溝の可能性が高いと考えられる。

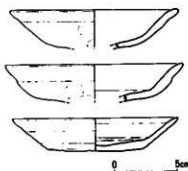
整地層 (SX002) は、調査区の中心から西側全面に確認されるが、さらに広い範囲に及んでいる事が想定される。整地層は水田層までの約20cmの厚さで堆積が確認でき、その下部には溝状道橋 (SD006) とこれより古い時期の堀 (SD003) が見られる。このことから、道橋の埋め戻し後の地盤改良による整地事業と考えられる。整地堆積土中には16世紀中頃に比定される多量の京都系土師器や庭園跡で見つかった白い玉砂利 (石英製) が出土しており、周辺部に存在していた道橋を削って埋められたことが想像できる。

溝状道橋 (SD006) は、整地層 (SX002) の下部から検出され、堀 (SD003) が埋め戻された段階に掘り込まれたことが確認できた。道橋は、調査区外側に延びているものの推定で幅1.5mを越え、深さは整地層下から0.75mを有し、N-6°-Eに振って南北方向にそれぞれ真っ直ぐに延びている。道橋の年代は、堆積層から出土した多量の非クロロ成形成の京都系土師器とクロロ成形成の土師器により、16世紀中頃に比定される。

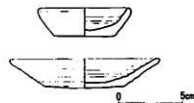
堀 (SD003) は、整地層 (SX002) の下部から検出され、調査区で最も古い道橋である。推定で幅5mを越え、深さ1.6mの規模を有する。出土する遺物から16世紀中頃に比定される。

今回の調査で確認された大規模な堀跡 (SD003) は、2町四方の推定大友館跡の中心を二分する状況にあり、16世紀中頃~後半にかけては、館内において改修・拡張等の整地事業が行われたことが各調査区で確認されている。また、当該地は他の調査地点の道橋検出面よりも標高が高く、当時館の中心部に向かって道橋形成面が高くなっていたことを窺い知ることができる。なお、調査区の東側の立地は今調査区の標高よりもさらに高くなっていることから、館の主殿もしくはそれに付随する施設の発見が期待される。

(池邊)



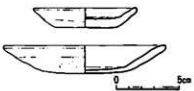
第99図 SD004出土遺物 (1/3)



第100図 SX002出土遺物 (1/3)



第101図 SD006出土遺物 (1/3)



第102図 SD003出土遺物 (1/3)

XVI 大友館跡第5次調査

調査面積 60㎡
地域 A

調査期間 00.01.06～00.02.29
調査担当 池邊千太郎・奥村義貴

大友館跡第5次調査区は、推定大友館の西側外郭にあたる。大友館跡第2次調査で確認された土塁（SX035）の延びを確認するため、その延長線上に6×10mの調査区を設定した。

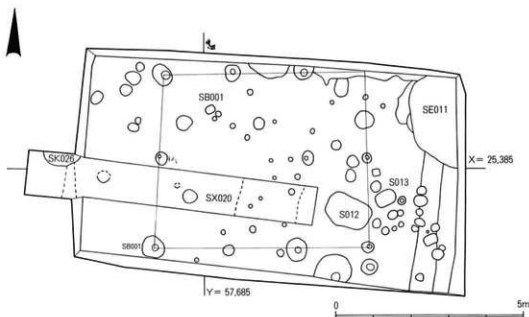
調査の結果、整地層（SX019）を挟んで上下に遺構が確認された。遺構としては、16世紀前半～中頃に比定される土塁跡（SX020）、16世紀後半の土坑（SK026）、16世紀後半の整地層（SX019）、井戸跡（SE011）、掘立柱建物跡（SB001）などで、その他にピットを数十基、土坑を数基、溝・不定形の掘り込みを検出した。

調査区は、地表から約0.8mほどに現在の埋土が見られ、その下部は江戸時代の水田層が幾重にも堆積した状態である。その層を除去した段階で16世紀後半の整地層が検出でき、これを基盤面とする遺構の存在が確認できた。この整地層を基盤面として形成された遺構には、大型の掘立柱建物跡1棟（SB001）、井戸跡1基（SE011）、溝状遺構1条をはじめ不定形土坑やピットが見られた。

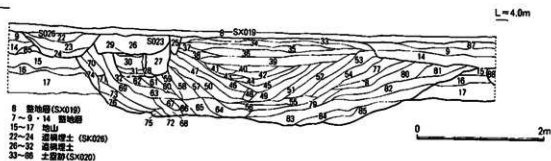
特に掘立柱建物跡（SB001）は、現状で2×2間の建物の東側に庇が付いており、建物配置はN-2°3'-Eである。なお、建物の桁行はさらに調査区外側に延びていることが予想される。規模は桁行間隔が2.2～2.4m、梁行間隔が1.9mあり、直径約30～60cmの柱穴で構成されている。柱穴にはそれぞれ柱痕がはっきりと確認でき、焼けた建物の壁材の一部や炭化木が大量に含まれていることから、建物は火災によって消失したことが窺える。時期的には、時期を比定できうる遺物の出土が少ないものの、近世段階の遺物が含まれない事、整地層に含まれる遺物が16世紀後半を下るものがないことから、16世紀後半の範疇に比定される。火災については、天正14～15年（1586～1587）の島津軍の府内侵攻による原因も可能性として注目される。



第103図 調査地点位置図



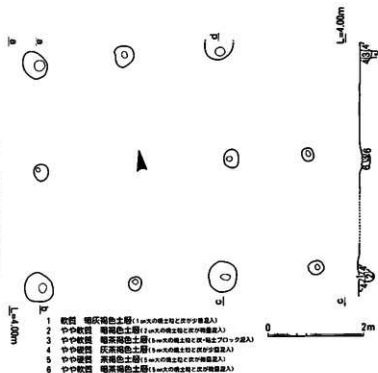
第104図 遺構配置図 (1/100)



第105図 土層跡 (SX020) 土層図 (1/60)

また井戸跡 (SE011) も同じく16世紀後半と考えられるが、建物と共存していたかは不明である。掘り方の直径は2.5m以上になり、深さは検出面より1.95mを有する。埋土状況は、二重に堆積状況が確認できることから本来は井筒が存在していたものが、廃棄段階で抜かれたものと考えられる。

整地層 (SX019) は、掘立柱建物 (SB001) や井戸 (SE011) の基盤面となる面である。土層 (SX020) の上面を削った後に整地した層で土層上面から厚さ10cmを確認し、土層掘部からは、約40cmもの堆積状況が見受けられる。出土遺物より16世紀後半の大規模な土木事業の一部であると思われる。なお、この整地は第2次調査の第2次整地層 (SX065) と同一である。

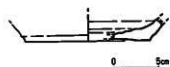


第106図 掘立柱建物跡 (SB001) 平面・断面図 (1/80)

整地層 (SX019) の下位においては、南北方向に延びる土層跡 (SX020) が検出された。土層跡は、逆台形状に掘り込まれた中に質感の異なる土を左右から内側に向かって斜めに堆積させ、その中心でやや緩まった土を水平に堆積させた積み方をおこなっている。法面の高さは、上面が削平されており、現状で約30cmほどが残っているにすぎない。その規模は、現状で頂上幅4m、裾部幅7.3m、底部幅3.3m、積土の高さは掘り込み面から1.3mを有する。この土層跡は、南に30m離れた第2次調査のL字状 (東西・南北方向) に確認された土層 (SX035) の延長線上にあたる。

なお、土層が削平され、整地層 (SX019) が形成される前の段階で土坑 (SK026) が作られている。規模は、直径約1.2m、深さ35cmであり、出土遺物から16世紀後半に比定される。

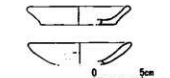
今回の調査では、16世紀前半〜中頃の土層の規模と構造は明らかになったが、これに付随する可能性の高い堀を確認する事が出来なかった。また、16世紀後半段階には土層を削平した上面に建物や井戸を形成しており、この段階における館を区画する土層や堀などの施設の存在も確認できなかった。これについては、今後の調査によって検証すべき課題である。(池邊)



第107図 SB001出土遺物 (1/4)



第108図 SE011出土遺物 (1/4)



第109図 SK026出土遺物 (1/4)

XVII 上野大友館(上原館)跡第2次調査

調査面積	100㎡	調査期間	99.06.17～99.09.30
地域	A	調査担当	坪根伸也・高品 豊・奥村義貴・佐藤道文・高木隆司・河野史郎

調査は、平成12年度公共下水道中央処理区上野丘西2639-3号線汚水・雨水施設工事に伴い行われたもので、調査の結果、館の土塁、不明遺構、柱穴等が検出された。加えて、館跡内からは、柱痕が認められる大型柱穴や、柱穴の底部に板状の石が設置されたもの等、館跡内における建物跡の存在を窺わせる柱穴の存在も初めて確認されている。

調査区については、工事の性格上、汚水施設工事が幅0.85m、深さ2.0m、総延長125.5m、雨水施設工事が幅1.0m、深さ1.0m、総延長125.5mの細長いものとなったため、館南面の東西土塁の掘部を横断する部分を「東西土塁地区」、館東面の南北土塁を横断する形で西方向に屈曲する部分を「南北土塁地区」、さらに館中央部を北に向かう部分を「館内部地区」のそれぞれ3調査区を便宜的に設定した。以下、各調査区別の調査概要について記す。

各調査区別の遺構状況としては、「東西土塁地区」については、土塁の掘部ながら土塁の痕跡を示す斜堆積が確認された。「南北土塁地区」については、土塁の土層断面がほぼ完全に検出されており、一旦掘り込んでから盛土が行われている土塁の構築方法や、中世末段階の土塁の下層で検出された版築状土層等興味深い状況が確認された。加えて土塁西側には柱痕の残る大型柱穴も確認され、建物跡の存在を窺わせる資料となった。「館内部地区」については、まとまった柱穴群が検出されており、中でも石製礎盤を有する柱穴の存在は、建物の性格を考える上で興味深いものとなっている。柱穴の中には中世前半期や、古代のものがあ、古墳時代の不明遺構(溝又は住居跡)の存在を加えると、館形成以前の状況を知る上での貴重な資料となった。

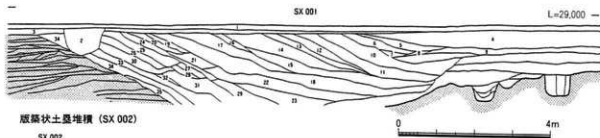
出土物には、SX003より出土した土師器小型丸底甕、高環の脚部、SX004より出土した金紋型甕に類似した甕、Pit 2出土の土師器高環、Pit 1出土の土師器環、包含層(整地層)より出土した須恵器蓋環、土師器甕、青磁碗、京都系土師器皿、不明磁器碗がある。(河野)



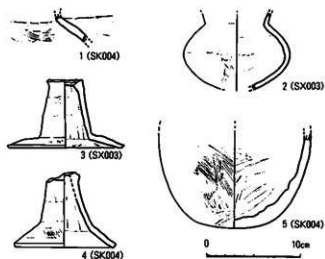
第110図 調査地点位置図



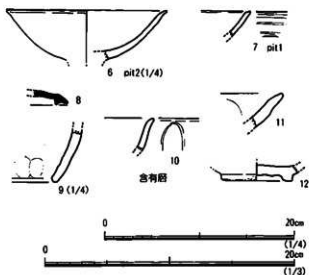
第111図 調査区位置図



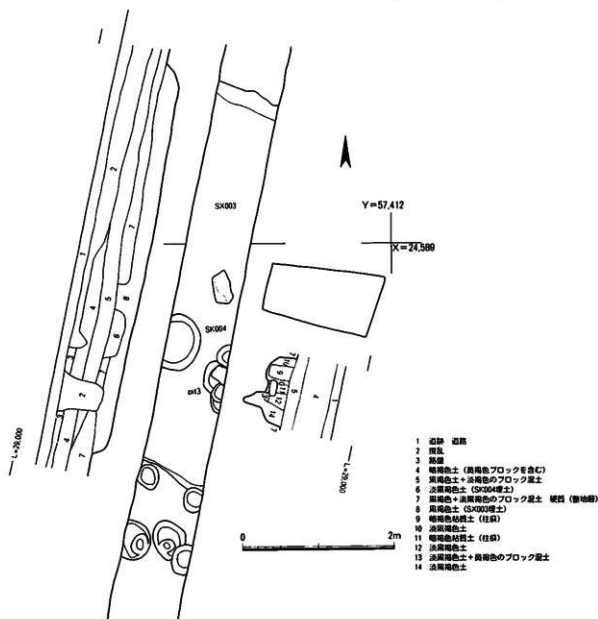
第112図 南北土塁土層断面図 (1/100)



第113図 SK003・SK004出土遺物実測図 (1/4)



第114図 館内部地区柱穴・包含層出土遺物実測図(1/2・1/4)



第115図 SK003・SK004・Pit3遺構実測図 (1/50)

XII 上野大友館(上原館)跡第3次調査

調査面積 60㎡ 調査期間 99.11.04

地域 A 調査担当 讃岐・藤沢・塔鼻・坪根・高畠河野・池邊・塩地・永松

上原館跡は、大分川左岸に延びる台地先端部付近に位置し、標高約29mを測る。昭和62年の大分市史の刊行に伴い、地形測量図が作製され、現存する土塁基礎部間で南北長約156m、東西長約112～130mの規模が推定されている。また、測量図の作成により館主郭部の北西部分に「郭」状の張り出しの存在が明らかとなった。今次の調査は、館西側の土塁上に相当する部分での個人住宅の建築に伴うものである。工事開始の報を受け、現場に到着した段階にはすでに掘削が完了しており、そのため、調査は北・東・南の3面の土層断面観察・記録作製調査という形をとらざるを得なかった。今後の事前審査体制の強化が囑望される事例となった。

これまでの調査により、上原館跡の南と西側の土塁構築状況には、新旧2時期の段階があることが判明している。すなわち、古段階に相当するものは、版築状に積土がなされるもので、締まっており、構造からそれほど大規模なものではないと想定されるものである。出土遺物から15世紀後半から16世紀前半の所産年代が推定されている。新段階のものは、16世紀後半に構築されたもので、古段階のものを被覆する形で形成され、斜堆積を示す積土を特徴とする。

今次の調査における土層断面をみると、北・東・西壁で大きく様相が異なっている。これは土層切断面が土塁主軸に対して並行、あるいは直角といった位置関係にないためであり、確認される土層状況から土塁の中軸線は、おおむね調査区の南東部分から北西部の方向へ展開しているものと判断される。つまり、東壁を中心に認められる水平堆積は、土塁の中央部の土層堆積を示し、南壁の斜堆積は土塁の西側、すなわち館に対して外側部分の積土の状況を、これに対して北側の斜堆積は館内側の積土状況を示していることになる。

以上の様相から、斜堆積を伴わない第44層以下の水平堆積部分が古段階のものに相当し、これより上位の斜堆積を主体とする積土部が16世紀後半に構築された新段階の土塁遺構に対応する可能性があるものの、明確な区分は難しく、なおも周辺の調査データの蓄積が不可欠である。(坪根)

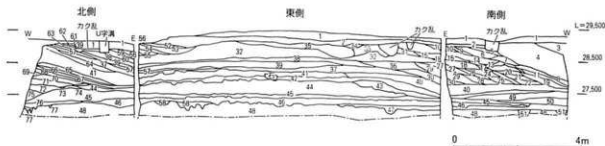
『上野大友館(上原館)跡 下水道工事に伴う発掘調査報告書』2000 大分市教育委員会



第116図 調査地点位置図



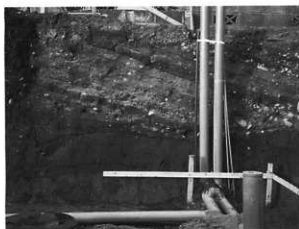
第117図 調査区位置図



1. 黄土 黄褐色砂質土 褐色砂土+黄土色土層 (黄土)
2. 黄土 黄褐色砂質土 黄褐色土 (黄土、固くしまる、砂利を含む)
3. 黄褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土+コシシメの円レキ+褐色砂質土 (しまりがない)
5. 黄褐色砂質土
6. 黄褐色砂質土+黄褐色粘質土ブロック+黄土色土層
7. 黄褐色砂質土+黄褐色粘質土ブロック+黄土色土層 ブロックがらに比して大きき径 3~4cm程度
8. 黄褐色砂質土+黄褐色粘質土ブロック+黄土色土層 (円レキを含みしまっている 硬)
9. 黄褐色砂質土
10. 黄褐色砂質土 (5~10cm程度のレキを少量含む) 比較的しまっている
11. 黄褐色砂質土+黄褐色砂質土ブロック+2~3cmの円レキを少量含む 比較的しまっている
12. 黄褐色砂質土+黄土色土層 (黄土色土層の含有率が比較的高い)
13. 黄土色土層+黄褐色砂質土ブロックの黄土層
14. 黄褐色砂質土ブロック+黄土色土層+黄褐色砂質土の黄土層
15. 黄褐色砂質土+黄土色土層+コシシメの円レキを少量含む
16. 黄褐色砂質土+黄土色土層+コシシメの円レキを含む
17. 黄土色土層+黄褐色砂質土
18. 黄土色土層+黄褐色砂質土+黄土色土層が厚く分布
19. 黄土色土層+黄土色土層 (ブロック状で厚く分布)
20. 黄褐色砂質土+黄土色土層の黄土層
21. 黄褐色砂質土+黄土色土層+黄土色土層の黄土層
22. 黄土色土層+黄土色土層+黄土色土層の黄土層
23. 黄褐色砂質土ブロック+黄土色土層 (黄土色土層が上部に厚く分布)
24. 黄褐色砂質土ブロック+黄土色土層 (黄土色土層が上部に厚く分布)
25. 黄褐色砂質土ブロック+黄土色土層 (黄土色土層が上部に厚く分布)
26. 黄褐色砂質土ブロック+黄土色土層 径 3cm程度の円レキを少量含む (よくしまっている)
27. 黄褐色砂質土+黄土色土層+黄土色土層 コシシメの円レキを少量含む
28. 黄土色土層+黄土色土層 (硬くしまっている)
29. 黄土色土層+黄土色土層 (硬くしまっている)
30. 黄土色土層 (黄土色土層のブロックを少量含む)
31. 黄土色土層
32. 切妻系黄土層 黄褐色砂質土ブロック
33. 黄土色土層+黄土色土層 (黄土色土層のブロック)
34. 黄褐色砂質土+3cm程度の円レキ
35. 黄褐色砂質土+コシシメの円レキを少量含む 黄褐色砂質土層 (砂利を多く含む)
36. 黄土色土層+黄土色土層 (黄土色土層のブロック)
37. 黄土色土層+黄土色土層 (黄土色土層のブロック) 小レキを少量含む (固くしまっている)
38. 黄土色土層 (固くしまっている 3cm程度の円レキ) 黄褐色砂質土層、黄土色土層、黄土色土層
39. 黄土色土層+黄土色土層の黄土層 (3~4cmの円レキを含む) 黄褐色砂質土層 (黄土色土層のブロックを少量含む 固くしまっている) 黄褐色砂質土層、黄土色土層、黄土色土層 (固くしまっている)
40. 黄褐色砂質土+黄土色土層の黄土層
41. 黄褐色砂質土層 (多量の円レキを含む) 黄褐色砂質土層 黄土色土層+黄土色土層 2~3cm程度の円レキを含む (固くしまっている)
42. 黄土色土層+黄土色土層 (若干砂質) 黄土色土層+黄土色土層 (やや砂質)
43. 黄褐色砂質土+黄土色土層

44. 黄褐色砂質土 (5~10cm程度のレキを少量含む) 1cm程度のレキを少量含む黄土色土層+黄土色土層+黄土色土層 (黄土色土層のブロックを含む) (固くしまっている)
45. 黄褐色砂質土 (5~10cm程度のレキを少量含む) 切妻系黄土層、やや軟弱 若干の砂質土を食みやや赤みを帯びている
46. 黄褐色砂質土 黄褐色砂質土 黄褐色砂質土ブロックを含む
47. 黄土色土層+黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
48. 黄褐色砂質土 (黄土色土層)
49. 黄土色土層+黄土色土層の黄土層
50. 黄土色土層+黄土色土層の黄土層
51. 黄土色土層
52. 黄褐色砂質土 (5~10cm程度のレキを少量含む)
53. 黄褐色砂質土 (2~3cm程度のレキを少量含む)
54. 黄褐色砂質土 (5~10cm程度のレキを少量含む 固くしまっている)
55. 黄褐色砂質土 (5~10cm程度の円レキを少量含む 固くしまっている)
56. 黄褐色砂質土 黄土色土層、5~10cm程度の円レキを含む
57. 黄土色土層+黄土色土層 (しまり強い)
58. 黄土色土層+黄土色土層+黄土色土層の黄土層 (黄土色土層の黄土層)
59. 黄褐色砂質土+黄土色土層の黄土層 (黄土色土層の黄土層)
60. 黄褐色砂質土+黄土色土層の黄土層 (黄土色土層の黄土層)
61. 黄褐色砂質土+黄土色土層の黄土層 (黄土色土層の黄土層)
62. 黄褐色砂質土+黄土色土層の黄土層 (黄土色土層の黄土層)
63. 黄褐色砂質土+黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
64. 黄褐色砂質土、砂利を食み、黄褐色砂質土ブロックを含む (固くしまっている)
65. 黄褐色砂質土+黄土色土層の黄土層 (黄土色土層の黄土層)
66. 黄褐色砂質土、砂利を食み、黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
67. 黄褐色砂質土+黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
68. 黄褐色砂質土+黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
69. 黄褐色砂質土
70. 黄褐色砂質土、黄褐色砂質土、黄土色土層、黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
71. 黄褐色砂質土 (黄土色土層の黄土層)
72. 黄褐色砂質土+黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
73. 黄褐色砂質土、黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
74. 黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
75. 黄褐色砂質土、黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
76. 黄褐色砂質土、黄土色土層 (黄土色土層の黄土層)
77. 黄褐色砂質土+黄土色土層の黄土層

第118図 土壌土層断面図 (1/120)



第119図 北側土層



第120図 南側土層

Ⅸ 府内城・城下町跡第12次調査（米屋町）

調査面積	298㎡	調査期間	99.07.02～99.09.15
地域	A	調査担当	高 豊

調査地は、府内城外曲輪の東南隅付近、旧米屋町に位置し、「戦国時代の府内復原想定図」（註）に基づくと中世には府内町の北端近くで舟入付近の位置にあたる。

今回の調査は、共同住宅建設に伴う事前の調査として、建物基礎に伴う掘削部分についての記録保存を目的として実施した。

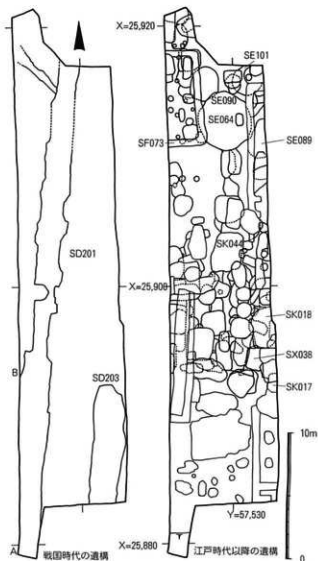
調査の結果、調査区の南端部で江戸時代初頭に築造された府内城外曲輪土塁の基底部を検出し、これの北側で江戸時代初頭から幕末に至る各時代の遺構を検出した。検出した遺構には建物基礎1、井戸跡4、方形石組み遺構1、瓦質大塚埋設遺構2、火災処理坑を含む土坑105基などがある。また、江戸時代初頭の整地層よりも下では、戦国時代の溝状遺構を2条検出した。以下、主要な遺構について時代別に記述する。

戦国時代

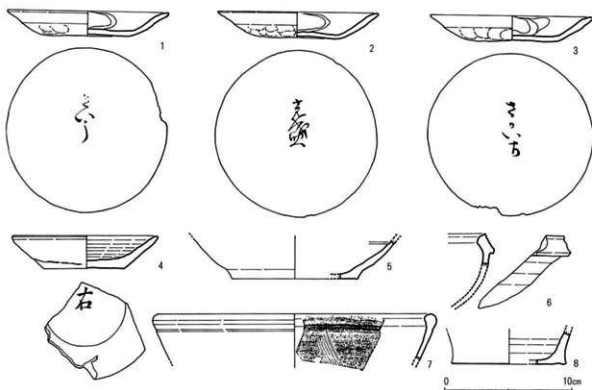
府内城築城時の整地層直下で、幅約2m、深さ約1mの溝を2条検出した。溝は芯々間約6m、調査区南端から約9mまで平行してN-6°-E方向に延びているが、東側の溝SD203はそこで切れ、西側の溝SD201のみ調査区を貫通している。何らかの区画溝と考えられるが、溝と溝の間に版築等の地業は認められないものの道路の可能性も考えておきたい。SD201には複数の掘り返しが認められるが、溝を覆っている府内城築城時の整地層は溝の中央部で厚くなっていることから、府内城築造時には完全に埋まりきっていなかったことが推定できる。これらの遺構からは京都系土師器皿や貿易陶磁器などが出土している。（第123図）埋土下層から一括出土した墨書土器（1～3）は、16世紀中頃に比定される3点の京都系土師器の底面に「さい良」「光盛」「さかい寺カ」とそれぞれ墨書されているものである。また1点の糸切り土師器にも「右」（「〇〇すけ」と判読できるものの一部である可能性がある）と墨書されているもの（4）が確認されている。これらのうち1、2、4は、人名の可能性が高いが、大友氏の家中に該当する人物が確認できないことから、付近に居住していた職人等であろうと推定される。また、中国産ではないかと推定される焼締陶器としては、瓶



第121図 調査地点位置図



第122図 遺構配置図（1/300）



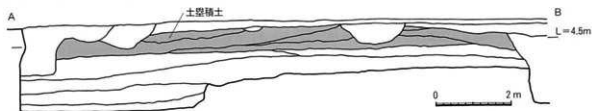
第123図 SD201・SD203出土遺物実測図(1/3)

等と考えられるもの(8)、口縁部が内側に張り出した玉縁状になる特徴的な形態の鐏鉢(7)のほか、鉢(鐏鉢以外)と推定されるものの口縁部(6)および底部(5)が出土した。このほか染付碗C群、E群も出土しており土器と陶磁器の年代観により、16世紀中葉～末の存続年代が考えられる。

江戸時代

遺構面の基盤となる府内城建設時(1597年～1607年)の整地層は、厚さ平均30cm程度のシルト質土で、調査区全域で検出された。江戸時代の遺構はすべてこの上から掘り込まれている。整地層中からは17世紀初頭の中国産青花(芙蓉手)、胎土目積段階の唐津焼等が出土しているが、これは府内城の普請が終了して町屋が移転するのが1607年とされていることと矛盾しない。このほか、部分的な整地層はあるが、調査区全面を覆う江戸時代の整地層は他には検出できていない。

調査区南端では府内城外曲輪土塁遺構(SF117)が検出された。すでに平成9年度に行われた試掘調査の際に、確認されていたが、今回の調査で、南北幅約14mにわたって検出された。明治時代の中頃(明治30年代:1900年前後)までには削平されてしまっていたとみられるが、近世初頭の整地層の上に約0.7mの高さで積み土が残存していることが確認された。発掘調査前、本調査地点の地表面は南端付近が北端付近よりも高く、南→北の傾斜がみられたが、これが府内城土塁の残存高に対応したものであったことが確認できた。土塁の積み土は、南側に傾斜をもって土質の異なる土を交互に積み上げていることが確認されており、大友館等にみられる土塁の構築方



第124図 土塁遺構土層図(1/100)

法と基本的には同様である。(第124図)。

土塁遺構の北側においては、町屋に関連する遺構と考えられる土坑・井戸等が著しい切り合いをもって検出されている。これらの分布についてみると、唯一検出された建物基礎と推定される石列遺構(SF073:18世紀末以降)や井戸跡(SE064・SE089・SE090・SE101)が調査区北部で検出される一方、火災処理坑を含む多数の土坑群は調査区中央から南にかけての土塁寄りの部分に集中している。これは町屋の短冊形地割内での空間利用のあり方を反映しており、裏庭にあたる部分に土坑が集中しているものと考えられる。

これらの遺構のうち17世紀代とりわけその前半期以前にさかのぼるものはきわめて少ない。数少ない当該期の遺構としては土塁基部付近で検出された方形石組み遺構(SX038)などがあるが、これらはいずれも砂目積み段階の唐津焼及び初期伊万里を伴っており、胎土目段階の唐津焼のみを伴う遺構は検出されなかった。

火災処理坑を含む土坑群の多くは18世紀前半以降に位置づけられる。火災処理坑については18世紀中頃から後半にかけてのものが複数検出されており、年代を特定できる可能性のある良好な一括資料が得られている。これらのうちSK044は寛保の大火もしくは18世紀中頃の他の火災に比定される可能性が高いと考えられる。なお、SK044ではオランダ産クレイパイプ(第127図)が出土している。

土坑群のうち最も注目されるものは焼窯を施した陶磁器を多数含む大量の陶磁器を廃棄した土坑SK017である。この遺構は調査区南東隅の土塁裾部分で検出された方形の大形廃棄土坑である。調査区の端にかかっているため、全体の一部しか掘っていないと考えられるにもかかわらず、出土した陶磁器はコンテナ箱10箱を超える膨大なものである。焼窯を施された陶磁器の中には高台内などに文字が朱書あるいは墨書された、いわゆる焼窯文字を有するものが多く認められた。出土した最も新しい陶磁器の年代観により、これらが廃棄された時期は1850年代から1860年頃である可能性が最も高く、焼けた陶磁器が多いことから火災後の廃棄とも考えられる。

出土した焼窯を有する陶磁器のうち82個体に焼窯文字が認められる。ほとんどは底部に朱書したものであるが、墨書を併用するものや墨書のものも認められる。文字には地名と考えられるもののほか、人名と判断されるもの、さらに数字(〇〇〇:金額か)があり、これらが併記されているものも多く認められた。判読の結果、地名については本調査地点が所在する米屋町や古川町といった城内の町名、東新町・元町など近接地の地名も多くみられるものの、「おしの」「つもり」「門田」といった周辺の村落名も多数確認され、遠くののものには「へつき」さえ認められた。これらの村落には、府内藩領だけでなく延岡藩・臼杵藩など隣接する他藩領も多く含まれており、その分布は概ね地籍が所在する府内城東南部から延びる街道沿いであることが注意される。



第125図 調査区全景空中写真



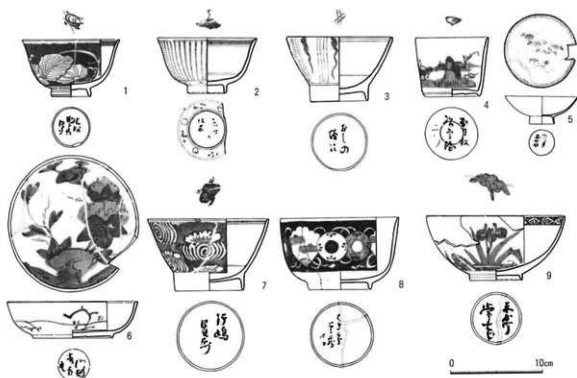
第126図 SK044土層



第127図 SK044出土クレイパイプ



第128図 SK017陶磁器出土状況



第129図 SK017出土焼継文字を有する磁器実測図(1/4)

焼継ぎについての従来の研究によれば、江戸においては、行商の焼継ぎ屋が町内を巡回して注文を得ていたのではないかと推定されており、その際堤炉等の道具を携行して出先で焼継ぎを行ったとも推定されていた。しかし今回のSK017出土資料にみられる地名の分布とその一括出土状況からは、周辺村落を含む広範な地域から本地点に持ち込まれて焼継ぎが行われていた可能性を示唆するものと考えられる。いずれにしても1道跡1道構からのものとしては、全国的にほとんど例をみない豊富な焼継ぎ文字資料であり、地方における焼継ぎの営業形態の実体に迫る重要な資料になると考えられる。

まとめ

以上のように、今回の調査では中世、近世のいずれの時期に関しても注目すべき調査成果が得られた。

中世については、戦国時代の溝が検出されたが、当該期の道構が高密度で検出される中世府内町の中心部分とは全く異なった様相であった。今回の調査地点が中世府内町の北端付近と推定されることから、調査結果を積極的に評価すれば、溝の掘削時期と推定される16世紀中頃になって初めて、この地域まで府内町の領域が拡大したと解釈することもでき、中世府内町の成立と変遷を考える上で貴重な資料となろう。墨書土器の意味やこれらが出土した溝の性格づけについても、調査地点が当時の町境付近に比定されることと関連する可能性もあり、報告書作成に向けての重要な検討課題である。

近世については、初めて府内城築城時の整地と外曲輪土塁の築造状況が一体的に調査できたことをはじめ、火災処理坑等の良好な一括資料の検出など多くの成果が得られている。とりわけSK017において出土した多数の焼継ぎ文字資料は、府内城とその周辺村落との経済的な関係の一端を考古学的に明らかにするだけでなく、「焼継ぎ」そのものの全国的な比較研究にも一石を投じるものになると考えられることから特に注意して整理作業を進めた。

(高畠)

註：『大分市史中巻』付図2 大分市史編纂委員会 1987

XX 府内城・城下町跡第13次調査

調査面積	842㎡	調査期間	99.10.04～99.11.18
地域	A	調査担当	池邊千太郎・奥村義貴

近世城下町遺跡は、豊後国のほぼ中心に位置し、現在の大大分市荷揚町に所在する府内城を中心に形成された城下町である。

調査地は、大大分市中央町1丁目の城下町の「名々小路町」に含まれる位置に当たる。調査区の北側に位置する東西方向の道路がかつての「名々小路」の名残で、「名々小路町」とは「名々小路」に面する区画の町屋を指す。

調査区は西側のA区、東側のB区に大きく分かれ、調査面積はそれぞれ、44.8㎡、39.4㎡である。

調査の結果、A区では土坑23基、廃棄土坑3基、井戸跡1基、ピット4穴が確認された。北側には昭和に掘り込まれた大きな掘削があり、近世の遺構が削平されている。SK001・SK005・SK026の廃棄土坑は、城下町区割に平行もしくは直行して順次掘られており、屋敷内におけるゴミ捨て場として空間利用された配置である。A区の遺構の年代は、17世紀前半代に集中し、17世紀後半から18世紀前半代のものが少し見られる。

B区は、土坑31基、廃棄土坑1基、火災処理土坑1基、井戸跡1基、ピット5穴が確認された。調査区にはコンクリート建物の基礎が残っており、調査の妨げとなった。B区の遺構の年代は、A区とは対照的に17世紀前半代のものはほとんどなく、18世紀代を主体とする遺構が大半を占める。

調査地全面は、城下町造営段階の淡黄茶色土の整地層が確認された。整地層は、厚さ0.3mを有するが、上面はすでに削平されている。近世の遺構はこの整地層を基盤面として形成されている。また、整地層の下層は自然の砂層であり、遺構・遺物は確認できなかった。

調査区内には、廃棄土坑や火災処理土坑が遺構の大半を占め、その廃絶時期は、A区である西側において17世紀前半代に多くの土坑・廃棄土坑が集中し、さらに17世紀後半代から18世紀前半代、20世紀前半代にまとまっている。B区では18世紀前半代、18世紀後半代の遺構が集中する。

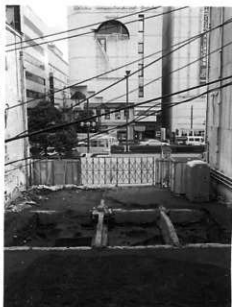
遺構の廃絶時期の背景を見ると、17世紀前半代の遺構は、竹中氏による城下町築造後より形成されたもので、日根野氏による城と城下町の改修などとの関連が指摘されよう。17世紀後半代から18世紀前半代にかけては、元禄11年（1698）の大地震、宝永4年（1707）の大地震、寛保3年（1743）の大火など災害が見うけられ、それに伴う片付けによるものと考えられる。20世紀前半代は昭和20年7月の太平洋戦争による大大分市空襲を想定することができる。このほかにも記録に残っていない災害や建物改修の際の処理土坑、日常的に使われていた廃棄土坑の存在が考えられる。

調査区の中で、A区の廃棄土坑にのみ瓦が集中して出土している。供伴する遺物から、17世紀前半代に比定される。このことから、A区にあたる場所に城下町初期段階以降の瓦葺き建物の存在が想定できる。

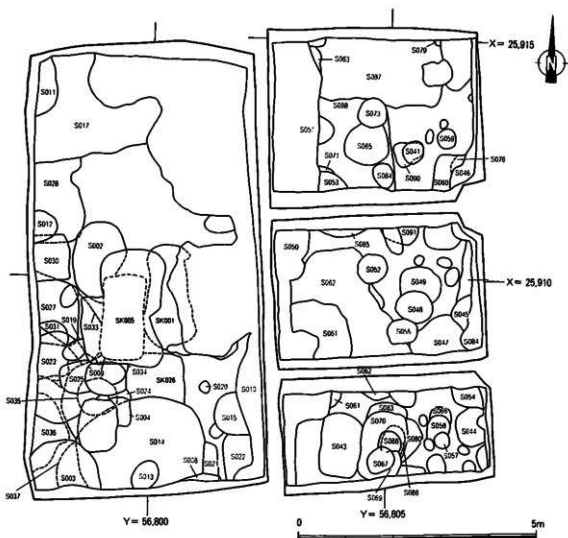
また、A区・B区共に土坑出土遺物の中に初期伊万里、輸入磁器な



第130図 調査地点位置図



第131図 調査区全景



第132図 遺構配置図 (1/80)

どわずかながら優越品が見られ、注目されるところである。

なお、A区とB区との境は、攪乱や旧建物の基礎によって確認することはできなかったが、各時期に遺構の廃絶にまとまりがあり、なおかつ両区において顕著に廃絶時期に違いが見受けられた。さらに、A区にのみ城下町初期段階より互葺きの建物跡の存在が指摘できることから、A区とB区との境は、調査区の北側を東西方向に走っていた「名々小路」の道路南側に存在する区画内の敷地を区切る地割りと重なるものと考えられる。

本調査区周辺の旧町は、近世府内城下町の「名々小路町(各号小路町)」にあたる。中世府内町跡に存在していた、本光寺や称名寺の門前に形成された「御北町(於北町)」・「名々小路町」が竹中氏による城下町形成段階での強制移転によって光西寺の門前町の要素をもって移転されたものと推定される。

また、府内城・城下町跡第11次調査¹⁾において、時期的にはやや新しいが「名々小路 村田」の文字が焼継ぎされた器に書かれているのが発見されている。一般的には、名字を有する者は武士もしくは町名主などの有力商人などに限られており、「名々小路町」における有力者の存在が窺える。

以上、今回の調査地は、名々小路町南面区画内の短冊型地割の敷地二軒分にまたがっており、江戸時代の始めにおいては互葺き建物を有し、優越品を所有する身分階層の屋敷の存在が想定されよう。中世府内町の移転者を含んで開かれた町だけに、移転者とその子孫の生活や職種など、中世府内町から近世府内城下町への人的変遷を考察する上でなお不明な点が多いが、今次調査によってその一端を確認することができた。(池邊)

(注1) 大分市教育委員会が1998年度に調査を行った。

XI 南金池遺跡第1次調査

調査面積 1,000㎡
地域 A

調査期間 99.11.08～00.01.21
調査担当 高島 豊

調査地点は大分川左岸の微高地上に所在し、中世大友城下町跡として周知される遺跡範囲の西側にあたる。これまで周知遺跡にはなっていないが、平成10年度に実施した試掘調査により遺跡の所在が確認された。その際、中世大友城下町跡との間に低地が存在する可能性が推定され、さらに検出された遺構が古代を中心とするものと判断されたことから、旧字名により「南金池遺跡」として把握することにした地域である。

今回の調査は、駅周辺総合整備事業に係る区画整理事業に伴って実施し、区画整理後に建設が予定されている公共施設の建物部分について、記録保存を目的として発掘調査を行ったものである。

調査の結果、遺構密度は低いものの、掘立柱建物跡2軒、柵列2条、溝状遺構4条、土坑7基等が検出された。



第133図 調査地点位置図

掘立柱建物跡

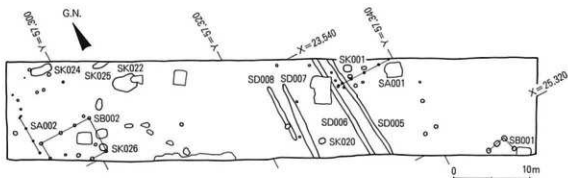
SB001は規模は不明であるものの直径0.4～0.5mのやや大きな柱穴を有するもので、N-6°-Wを指向する。SB002は2間×3間からなり、梁行方向をほぼ真南北方向に指向するものである。これらはいずれも遺物が僅少であるが中世以前、おそらくは古代の可能性が高いと判断される。

溝状遺構

溝状遺構は中央部付近ではほぼ平行して4条検出されている。幅0.3～0.5m、深さ0.1～0.3mでSD007のみ方向がやや異なるもののN-4°-Eであり、他はSD005がN-4°-W、SD006がN-2°-W、SD008はほぼ真南北方向でかなり類似していると言え、いずれか2条の組み合わせにより道路の側溝として機能していたことも考えられる。SD005からは周防産緑釉陶器や研磨土師器碗が出土している。後者の年代観によりSD005は12世紀後半代と考えられる。他の溝からの出土遺物は極めて僅少であるが、近接した年代に位置づけられるものと推定される。柵列や建物の方向もこれらの溝と似通った方向を指向していると言え、関連性があることが考えられる。

土坑

土坑は散漫に分布しており、出土遺物から多くは古代以降のものと推定される。その中において、SK026は、



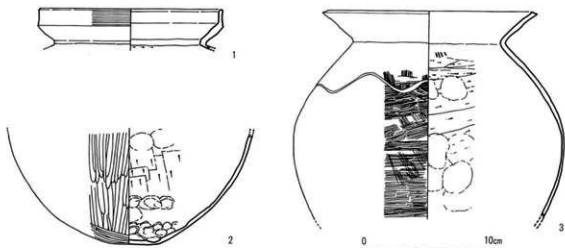
第134図 遺構配置図 (1/500)



第135図 SK026土器出土状況



第136図 調査区全景（東方向から）



第137図 SK026出土遺物実測図（1/3）

古墳時代初頭に比定される土坑であり、同一個体と思われる吉備系の土器（第137図1・2）と布留式古段階の甕（第137図3）が共伴して出土した。2の底部はやや凸状ではあるが平底を残しており、内面には著しい指押さえ痕及びへう削りが観察される。また、胴部外面は縦方向に磨かれている。こうした特徴から、この土器は吉備におけるいわゆる「亀川上層式」の範疇であり、近年の編年では吉備10期の中で位置づけることが可能である。この資料は、古墳時代初頭における土器の広域分布の点で注目される資料となろう。

以上のように今回の調査では、古墳時代初頭から中世にかけての遺構群が検出され、隣接する中世大友城下町跡とは様相が大きく異なっていることが明らかにできた。今回の調査地点の遺構密度は低いものであったが、周辺地区の試掘によっても古代及びそれ以前の遺構・遺物が検出されつつあり、今後の調査の進展により遺跡群の詳細が明らかになることが期待される。

（高畠）

XIII 大分駅周辺総合整備事業に伴う試掘調査

調査面積	2,726.7㎡	調査期間	99.03.11～00.03.21
地域	A	調査担当	杉崎・藤沢・塔鼻・奥村・羽田野・高畠・高木・佐藤

大分駅の高架化と大分駅南側の区画整理事業を基幹とする、大分駅周辺総合整備事業は平成8年度から本格的に着手された。これに伴い、区画整理事業の予定地内においては、埋蔵文化財の試掘及び確認調査が平成8年度から実施されてきた。

平成11年度までに区画整理対象地区のほぼ全域にかけ、88地点が調査された。調査結果の概要については表4に示すとおりである。調査の結果、22地点で近世以前と思われる遺構が検出され、さらに1地点で弥生時代の遺物包含層が検出されている。

このうち、対象地区東端の顕徳町1丁目においては新規の遺跡が発見された。(No.60・64) この地域については、中世大友城下町として周知されている地域に隣接しているにもかかわらず、検出された遺構は古代およびそれ以前と考えられるものが主体であったことから、「南金池遺跡」として新たに把握することとした。また対象地区中央部の東大道地区(No.2・86)、金池南地区(No.22・No.69ほか)及び南端の桜ヶ丘地区(No.26・No.34ほか)においても遺構が検出されており、東大道遺跡を拡大して「大道遺跡群」として把握することになった。特にNo.26地点においては、大溝遺構が検出されている。大溝は、幅2mほどの溝が、繰り返し掘られたものの集積であったが、埋土の状況から、水路としての機能を有するものと推定され、底面に木杭が打たれていることも確認された。出土遺物からは8世紀後半～9世紀初頭のものと考えられることから、調査地区の西側にある大道条里跡との関連が注意される。

一方、対象地区東半部分の大半(東端を除く)には泥炭層を伴う低湿地が広がっており、南部にも南端部を除いて低湿地が分布していることが判明した。また、大道条里に近い対象地区西端部分は、一応安定地盤は認められるものの今のところ遺構は検出されていない。

以上のように対象地区内では東端・南端及び中央部で遺跡の存在することが確認されているが、広範囲に低湿地が分布していることも明らかになり、遺跡はそれ以外の微高地上に立地することが確認されつつある。遺構の密度についてはいずれの地点においてもかなり散漫で、時期や性格の明らかでないものが多いが、今後の発掘調査により解明されることが期待される。

(高畠)



第138図 調査地点位置図 (1/20,000)



第139図 No.26地点遺構検出状況

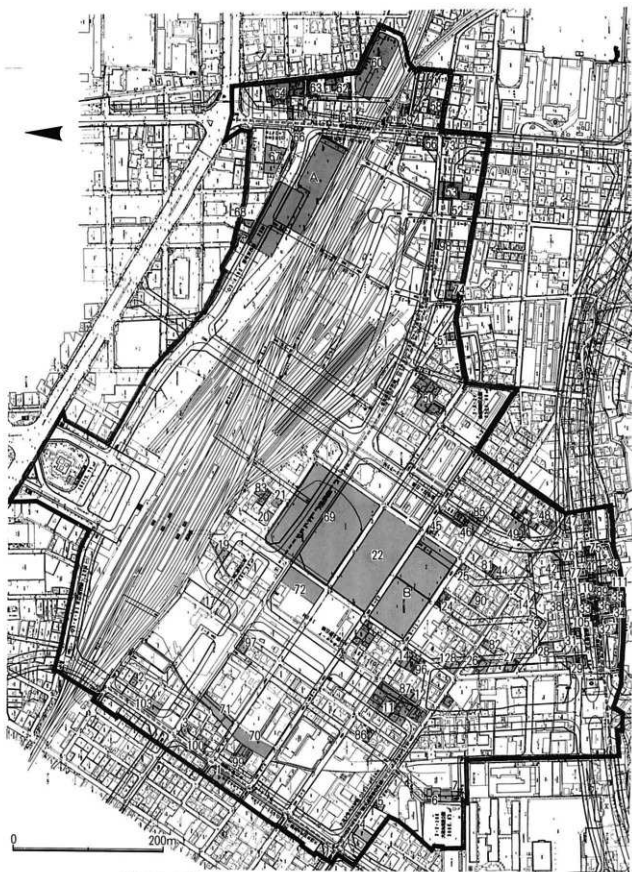


第140図 No.26地点遺物出土状況

表4 試掘・確認調査一覧

施 工 地 番	面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査日	調査結果	遺 物	備 考
A 要町2762-2 2769-2	5,900.00	256.6	1998/3/18-21	なし 低湿地		
B 金南町 1-2470	5,430.00	30	1998/3/11-18	なし		
1 東大洞 2-2279-143地1	273.79	37	1998/3/11	なし		
2 東大洞 2-2279-88	157.18	8.4	1999/6/15	溝・ビット		
3 東大洞 2-2279-119	186.40	18	1998/9/1	なし 低湿地		
4 東大洞 2-2416-5	361.06	17	1998/9/3	なし 低湿地		
5 東大洞 2-2416-11	167.02	7	1998/12/3	なし 低湿地		
6 東大洞 2-2413-124	370.21	14	1998/1/28	なし 低湿地		
10 東大洞 2-2415-4	232.34	17	1998/10/5	なし 低湿地		
11 東大洞 2-2442-10地1	2,014.71	46	1998/10/6	なし 低湿地		
14 東大洞 2-2443-10	104.37	1	1999/6/17	なし		
17 東大洞 2-2443-9	287.18	35	1998/10/5	なし 低湿地		
18 東大洞 2-2471-17地2	303.01	7	1998/1/24	なし		
19 東大洞 2-2514-5	109.28	15	1998/5/22	なし 低湿地		
19 東大洞 2-2513-4地2	426.74	23	1998/5/22	なし 低湿地		
20 金南町 1-2511-5	118.82	25	2000/3/7	なし 灰色シルト		
21 金南町 1-2511-7	164.38	12	2000/3/7	なし 灰褐色シルト		
22 金南町 1-2452	6,813.13	172	1999/12/1-2	溝・ビット	縄文晩期深部片 発生・古代土層片	
23 金南町 1-2445-8	225.15	20	1999/1/12	なし	灰・金銭有層	
23 金南町 1-2445-20	246.90	20	1998/1/20	ビット	土層部・須賀遺(古代)	
26 坂+G1150-9地3	534.88	32	1998/6/23	大溝 本鉄		
27 坂+G1150-6	278.38	20	1998/6/4	なし 低湿地		
27 坂+G1148-4	202.46	16	1998/6/5	なし 低湿地		
28 坂+G1148-5	500	140	2000/3/21	なし 灰褐色シルト		
31 坂+G1135-14	147.31	15	1998/5/28	なし 低湿地		
33 坂+G1108-23	184.77	10	1999/7/22	近現代土		
33 坂+G1108-34	123.18	7	1998/5/26	なし 低湿地		
34 坂+G1108-38	94.92	2	1999/7/29-30	溝		
35 坂+G1108-9	235.43	2	1999/7/29-30	溝		
36 坂+G1102-21	174.61	2	1999/7/29-30	溝		
37 坂+G1146-10	148.38	13	1998/6/10	なし 低湿地		
38 坂+G1146-18	216.09	24	1998/6/10	なし 低湿地		
39 坂+G1108-5	246.91	2	1999/7/29-30	溝		
40 坂+G1108-17	125.2	2	1999/7/29-30	溝		
41 坂+G1108-20	106.32	12	1998/5/27	なし		
41 坂+G1145-5地4	343.66	26	1998/6/10	なし		
44 金南町 1-1143-9地2	340.53	24	1998/6/8	なし 発生部未開掘区画		
45 金南町 1-2456-10	88.49	2	2000/3/15	なし 低湿地		
46 金南町 1-2456-5地1	613.49	20	1998/6/1	なし 北下は低湿地		
47 金南町 1-1145-7	198.17	12	1998/5/25	なし		
48 金南町 1-1140-10	208.00	13	1998/5/25	なし		
49 金南町 1-1142-3地2	1,070.82	27	1998/6/8	なし 低湿地		
50 金南町 1-2583-13地6	1,345.34	46	1998/5/28	なし 低湿地		
51 金南町 2-2546-7地1	175.79	17	1998/6/25	なし 低湿地		
52 金南町 2-2547-7地2	124.90	16	1998/5/26	なし 低湿地		
53 金南町 2-2595-8地1	640.22	40	1998/5/26	なし 低湿地		
54 金南町 2-2592-3地1	381.60	12	1998/5/25	なし 低湿地		
55 上野町2555-1	435.05	21	1998/5/22	なし 低湿地		
59 上野町2558-3地5	389.16	12	1998/5/21	なし		
60 南栄町 1-2512-3	2,757.64	149	1998/5/14-18	ビット・溝	土層部(古代)製鉄土層	
61 南栄町 1-2521-15	149.45	25	1998/5/15	なし 低湿地との境界		
62 南栄町 1-2521-5地3	691.96	16	1998/5/13	なし		
63 南栄町 1-2524-6地1,3	330.02	20	1998/5/11	なし		
64 南栄町 1-2758-2地4	1,356.94	99	1999/5/11-13	ビット・溝	土層部(古代)	
65 南栄町 1-2763-1	190.78	12	1998/5/18	なし		
66 南栄町 1-2768-3地1	866.44	13	1998/5/19	なし 低湿地		
68 南栄町 1-2791-8	130.55	12	1998/5/18	なし 低湿地		
69 金南町 1-2455-1	12,980.83	230	1999/12/21-22	灰・ビット	発生土層片	東南部は低湿地
69 金南町 1-2455-1	13,000	110	1999/12/21-22	灰・ビット 古墳・古代土層土層	古墳時代土	
70 東大洞 1-2479-3	4	4	1998/10/29	なし		
71 東大洞 1-2485-2	4	4	1998/10/29	なし		
73 金南町 2-2583-3	130.07	9	1999/10/25	なし 低湿地		
74 金南町 2-2595-1	467.58	79	2000/3/14	なし		
75 坂+G1108-14	106.90	14	1999/10/27	なし 低湿地		
76 坂+G1145-10	117.32	7	1999/10/27	なし 低湿地		
77 坂+G1108-29	130.2	2	1999/7/29-30	溝		
79 坂+G1149-10	143.38	21	2000/3/17	なし 低湿地		
81 金南町 1-1143-11	171	22	1999/10/26	遺構部 発生部土層	発生部・古墳時代附随土層	
82 金南町 1-1150-3	219.52	11	1999/10/26	なし 低湿地		
83 金南町 1-2511-14	270.08	33.7	2000/3/11	なし		
85 金南町 1-2456-7	259.83	14	1999/10/26	発生?古墳時代土	溝から発生部土層・古墳時代附随土層	
86 東大洞 1-2441-7	163.89	10	1999/6/16	溝		
87 東大洞 1-2443-11	98.39	1	1999/6/17	なし		
89 坂+G1150-8	270.32	2	1999/7/29-30	溝		
90 金南町 1-2445-12	242.86	17	1999/10/26	ビット・溝 希地遺構	土層部(古代)金銭等土層 青瓦片	
92 金南町 1-2456-3	84.42	2	2000/3/15	なし 低湿地		
93 東大洞 1-2443-23	457.77	17	1999/6/17	なし		
97 東大洞 1-2486-2	361.31	85	2000/3/13	なし 低湿地		
98 金南町 2-2594-4	299.31	36	2000/3/11	なし 低湿地		
99 東大洞 1-2486-1	388.17	36	1999/6/15	なし 低湿地		
100 東大洞 1-2477-9	267.08	30	2000/3/13	なし		
103 東大洞 1-2279-76	340.97	12	1999/6/14	なし		
105 坂+G1108-35	91.7	10	1999/7/22	なし		
110 坂+G1108-18	216.4	2	1999/7/29-30	溝		
111 坂+G1108-7	180.4	2	1999/7/29-30	溝		
112 金南町2589-2-3	285.1	18	1999/10/26	なし		高品質の磁器
128 金南町 1-2444-4	301.92	48	2000/3/15	なし		
142 坂+G1146-32	198.34	36	2000/3/17	なし 低湿地		

*1 施34-87を合わせて13.5㎡ *2 施34-36-39-40-77-89-110-111を併せて60㎡
 *3 施45-82を併せて24㎡ *4 施70-71を併せて1465㎡で、試験調査面積は35㎡



第141図 駅南区画整理地区内・試掘・確認調査地点位置図 (1/5,000)

XXIII 玉沢条里跡遺跡

調査面積 約18,500㎡
地域 B

調査期間 99.12.17～2000.06.24
調査担当 後藤典幸・荻 幸二

調査は、民間の大規模店舗建設に伴うもので、1999（平成11）年1月から11月まで試掘調査を実施した結果をもとに、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の調査区を設定し、本調査を1999（平成11）年12月から実施した。

第Ⅰ調査区

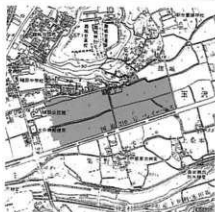
縄文時代晩期の炉跡、弥生時代中期～古墳前期に至る溝状遺構などが検出された。

焼土跡

殆どが数基切り合った形で、12か所検出された。その大部分が、長径約2.0mの長楕円形のプランを呈し、深さも1m以上を有する。上半部に大量の炭化物・焼土を伴っており、一部は、底面や壁面に杭や杭跡と考えられる小ビットも検出された。炉跡の覆土や周囲の包含層から縄文時代後・晩期の土器片が若干出土しており、この遺構の時期を示していると考えられる。

溝状遺構

調査区の南西隅から北西部を経由して北東部に至る大溝（SD-01）1条と、それから延びる細長い溝が5条、主にSD-01の各所に付属する小溝が多数検出された。SD-01は幾度も屈曲する形態から自然の流路を利用した水田用水路と考えられ、各所に付属する小溝は各水田への取水口だと考えられる。自然流路だけに時間の流れと共に若干の流路の変動が、土層断面と溝底面の形態から観察され、大きく弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけて4条の流路が重なっているのが判る。細長い溝は屈曲する部位もあり、元々は自然流路の可能性が強いが、SD-01に比べ直線の傾向が見られることから、若干の人工的営為が予想され、やはり水田用水に利用されたと考えられる。



第142図 調査地点位置図 (1/20,000)



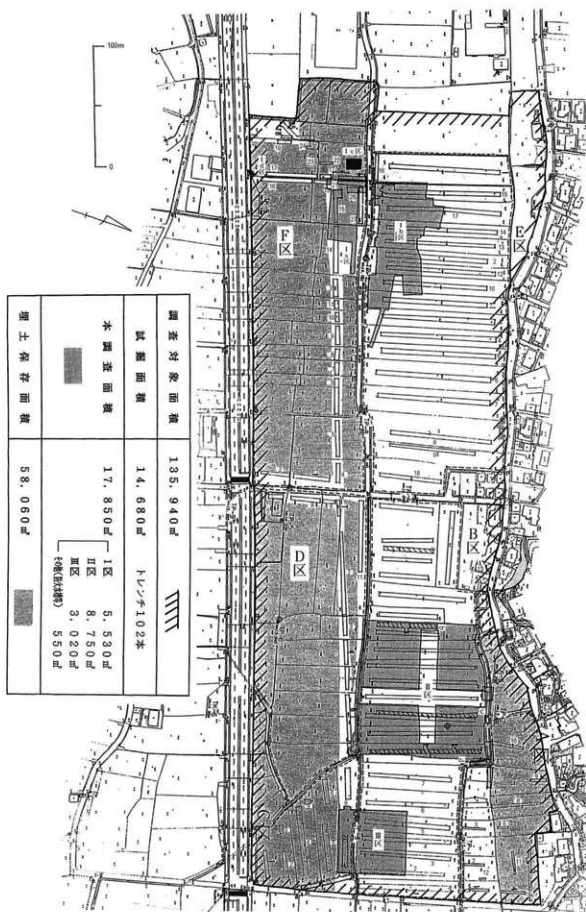
第143図 第Ⅰ調査区全景

第Ⅱ調査区

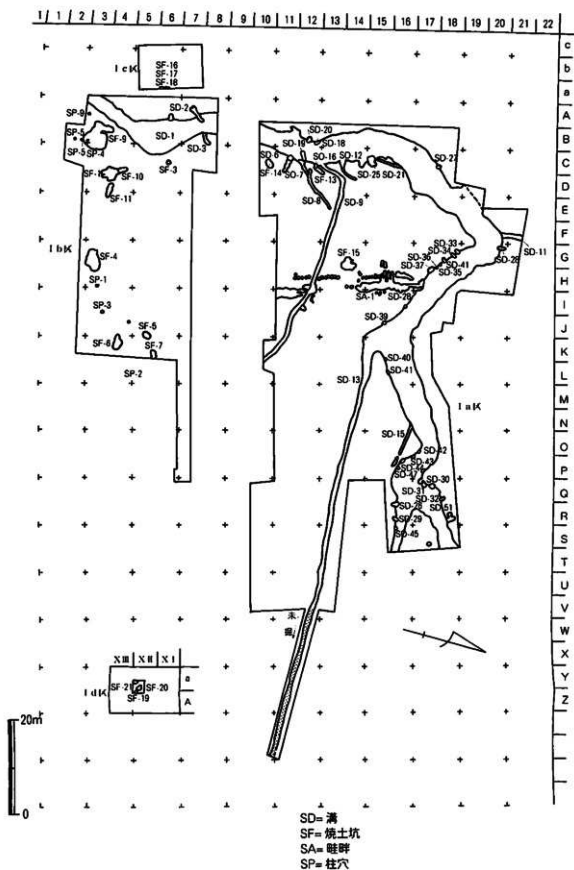
試掘時、条里水田に伴うと見られる南北向きの大畦畔の一部が、1町を隔てて2条検出されたため、一町四方の大畦畔に囲まれた水田の構造の検出と時期確定などを目的として、本調査が実施された。

中世条里水田

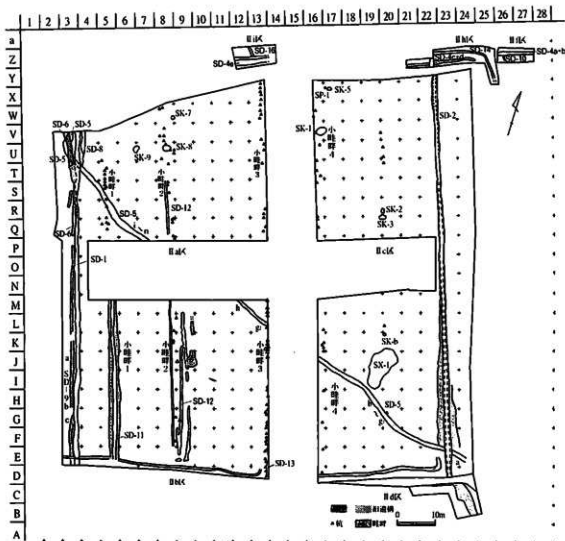
南北向きの2条と、東西向きの2条の大畦畔に囲まれた1町四方の条里水田が検出され、第1号大畦畔の造成土壌中から出土した、埋納儀礼によると考えられる磁器から、12世紀半ばの水田造成が推定される。水田構造としては、一辺1町（約109m）のほぼ正方形の大区画水田の内部に、5条の南北向きの小畦畔で区切られた長短



第144図 玉沢条里跡遺跡発掘区・試掘トレンチ及び保存地区 (1/3,200)



第145図 第I調査区遺構配置図(1/800)



第146図 第II調査区遺構配置図 (1/1,000)

冊状の小区画水田が予測される。また、それぞれの大・小畦畔は、酸化鉄を多く含んだ土壌で形成され、中央に用水路と考えられる溝状遺構を挟んでおり、1～3列の杭列が伴っている。杭列は溝ないし畦畔を防護する板脚状の構造を持っていたことが、第2号大畦畔に一部残存していた杭と横板の組み合わせから想定される。なお、小畦畔は、畦畔と溝の全てが検出されたわけではなく、杭列のみの箇所もある。

中世条里水田形成以前

第I調査区のSD-9と酷似する形態の溝状遺構 (SD-5) と、中世水田以前の条里水田に伴うと考えられる大・小畦畔の一部 (旧SA-2・SD-4・9) が検出された。SD-5は調査区の北西隅から南東隅に亘って検出され、I区のSD-9と同様、古墳期の水田用水と考えられ、埋納儀礼に伴うと見られる完形の土師器碗から、8世紀に埋没したものと推測される。また、中世条里水田形成以前の地震の噴砂に依ると考えられる砂層の隆起層が2か所で検出され、それが中世条里水田に削平されて、上端を床土に造成した様子が観察された。

中世条里水田形成以降

楕円形の土坑が8基、柱穴が2基、溝が1条 (SD-7) 検出された。土坑・柱穴は性格不明。またSD-7の周辺には、牛や人の足跡と思われるものが多数検出された。一方、各小調査区の壁面の土層観察から、中世条里水田と現在の水田の間に、2面の水田の畦畔構造が検出された。その上面は、SD-2の上半を削平した、近世

の大畦畔に伴う溝と同時期のものと考えられる。そして、中世から現在に至るまで、畦畔の位置に殆ど変動がなく、同形で同大の水田が形成されてきたことが判る。

第Ⅲ調査区

近世条里水田の下層から、埋葬に関わる遺構が多数検出された。遺構の内容としては、土器埋設土坑37基、埋設土器19基、集石土坑1基、石蓋土坑20基、土坑13基、石棺墓1基、甕棺墓25基、集石7基などが検出された。埋設土器や甕棺に用いられた土器とその大きさから弥生時代中期後半～後期の、主に幼児や小児を葬る墓域であると考えられる。



第147図 第Ⅱ調査区全景

埋設土器土坑及び埋設土器

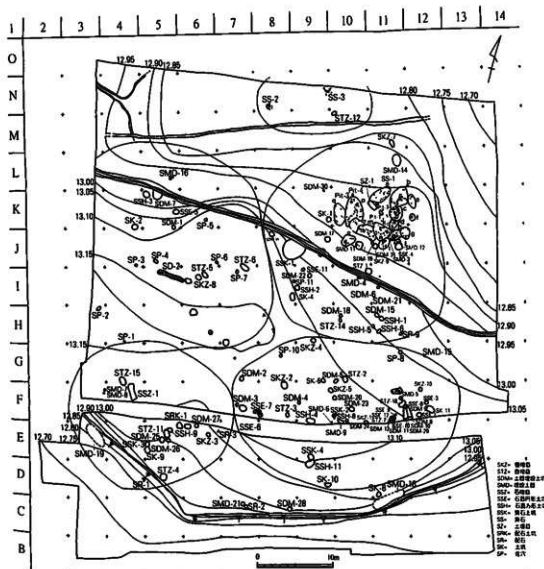
計56基の、幼・小児を容れたと考えられる土器が埋設された施設が検出された。そのうちには、SX-25のように、口縁を水平に折断した3個の甕と、副葬品と考えられる、表面全体に丹の塗られたほぼ完形の長頸壺1個がセットで検出された例もある。



第148図 SX-51



第149図 SX-25



第150図 第Ⅲ調査区遺構配置図 (1/500)

嬰棺墓

4基が検出されたが、長径1mほどの楕円形を呈するものが多い。

SX-47は、長径約1.1mの楕円形を呈し、約0.25mの深さを測る。単甕で、甕自体は高さ70cmほどで幼児を埋葬したと推定される。

SX-51は、長径約1.1mの楕円形を呈し、約0.25mの深さを有する。1個の甕を縦に半載して口縁で合せて合口嬰棺に見えるようにしたもので、下半部はない。広げられた嬰棺の長さは約85cmで、やはり幼児用と考えられる。骨片とそれに近接して水銀朱が検出された。

土器埋設土坑

SX-25は、北端を古墳期の溝に切られているが、長径1.25mの楕円形と想定される。口縁を水平に切断した土器が3個と、それに挟み込まれるようにして、表面全体に丹が塗られた、ほぼ完形の長頸甕1個が埋設されている。副葬品を伴う幼児骨の合葬墓と考えられる。

石棺墓

SX-22の1基のみ検出された。長径約1.8m×短径約0.6mで深さ約0.4mの直方体を呈す。大きさから、唯一明確な成人用と考えられる。

(萩)

XXIV 松岡古窯跡群

調査面積	3,000㎡	調査期間	99.03.04～99.09.10
地域	C	調査担当	讃岐和夫・池邊千太郎・羽田野達郎・荻 幸二

松岡古窯跡群は、九州の北東部、瀬戸内海に面した別府湾から内陸に6km入り込んだ丘陵上に立地している。窯跡の所在する丘陵は、北は明野から南は判田にかけて標高百メートル級の山々がつらな一帯にあたる。

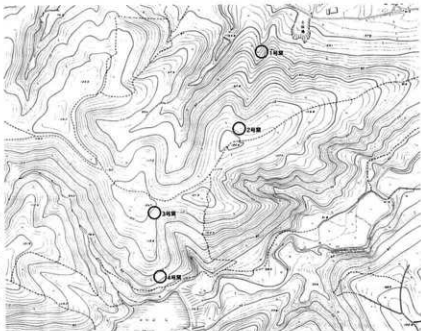
窯跡は、総数4基確認でき、それぞれの窯跡が約100m間隔に亘って分布している。窯跡の立地は、丘陵斜面の標高70mから丘陵尾根上の標高120mの範囲に限られ、1・4号窯跡が丘陵斜面に、2・3号窯跡が丘陵の尾根上付近に構築している。掘り込まれた丘陵の地質は、礫が多く含まれるなど構築条件としてはやや不向きであったことが想定される。また、その尾根沿いには東側の河岸段丘に広がる集落まで続く里道が走っており、当時から尾根沿いは利用されていたものと考えられる。

窯構造については、4基の窯跡のいずれも地山を掘り下げて天井を構築して造る半地下式構造であった。丘陵斜面に構築された1・4号窯跡、尾根頂上付近に構築された2・3号窯跡とで構造が近似している。窯燃焼部後半部の床面勾配は、1・4号窯跡において35～37度と急勾配であるが、2・3号窯跡においては25～30度とやや緩やかな勾配である。窯の長さとしては、1号窯跡が現存長7.2m、2号窯跡が現存長6.75m、3号窯跡が現存長6.2m、4号窯跡が現存長5.5mである。窯の幅については、1・4号窯跡が1.2m～1.3m前後であり、2・3号窯跡が1.2～1.4m前後でやや大きい構造となっている。

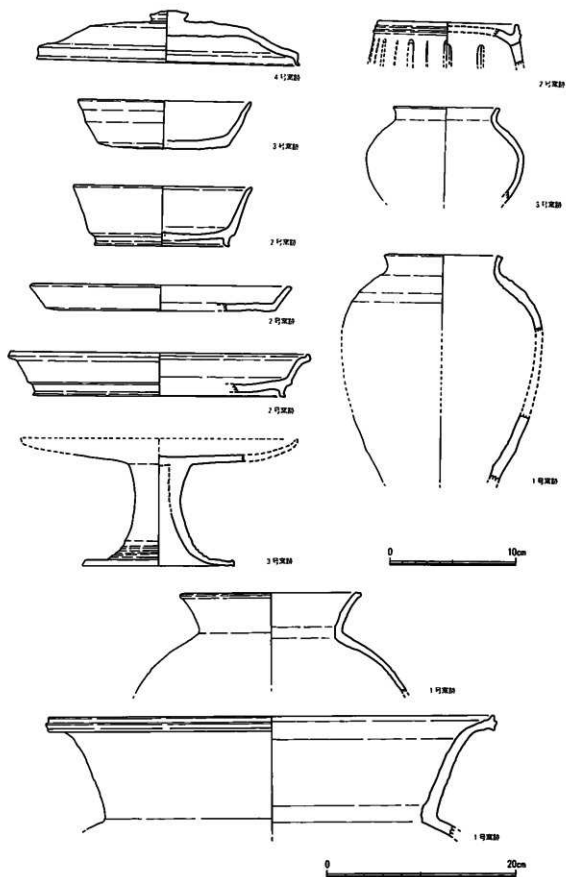
そのなかで最も特徴的なものとして、窯の燃焼部に、長さ1.0m以上の楕円形の掘り込み（舟底状ビット）が付設していることである。4基の窯跡に共通する特徴としては、舟底状ビットが掘り込まれた状態で窯の焼成を行っていないことが確認されている。通常、舟底状ビットが掘り込まれた状態で窯の焼成を行った場合、床面に被熱を受けるが、そうした痕跡は確認できなかった。また、舟底状ビットの埋土には、不良品の須恵器片と炭が多量に混入し、土層観察から、窯体内の掻き出された灰ではなく、灰原の土によって埋め戻されている。舟底状ビットの埋戻し後に、その上面に粘土を貼って床面とし、窯の焼成を行っている。さらに、1号・2号・3号窯跡では、舟底状ビット上面の粘土が淡青灰色に還元焼成した固い層を一層から二層確認している。焼成後の製品搬出時は、舟底状ビットの掘り下げを行っておらず、舟底状ビットが埋っており、その状態で操業



第151図 調査地点位置図



第152図 松岡古窯跡群分布図 (1/7,500)



第154図 出土遺物実測図 (1/3-1/4)

が終了している。このことから、大形の甕などの製品を窯に搬入する際、焚口付近における天井高を確保のために掘り下げられたものと考えられる。

生産された須恵器の器種は、坏・高台付きの坏・蓋・皿・高台付きの皿・高坏・長頸壺・長胴壺・中形の甕・大形の甕・円面硯等であった。注目すべき遺物としては、2・3号窯跡から出土した円面硯である。大分市内では、8箇所の消費地から硯が出土しているが生産地としては初めての発見である。また、2号窯跡からは、高台付きの皿の外面底部に「×」と刻まれたへう記号が2点のみ見られた。3号窯跡には、小形の壺の肩部に「人」と読める刻書の須恵器が出土している。窯体内や灰原からは、粘土や石が付着し二次的被熱を受けた須恵器の破片が各窯から数十点出土しており、焼台に使用されたものと考えられる。

出土した須恵器の器形は、窯によってそれぞれ異っており、生産に時期差が認められた。出土した須恵器の型式を須恵器編年である陶邑窯の田辺編年ならびに中村編年、さらには平城宮編年と比較すると、8世紀中頃から8世紀後半の幅に収まるものと考えられる。

松岡地区一帯は、今回発見された8世紀中頃～後半の須恵器窯跡をはじめ、松岡丘陵の北側谷筋にあたる井ノ久保遺跡の8世紀末から9世紀初頭に土師器を焼いた焼成土坑跡、9世紀から10世紀にかけて横尾地区に見られる土師器を生産するために粘土を採掘した粘土採掘坑跡によって、継続的に生産が行われていたことを窺わせる地域である。

松岡古窯跡群は、灰原出土の須恵器の中に硯が含まれていることから、生産された製品は官衙施設を中心に供給された可能性が高いことが推測される。

この時期の須恵器の出土量は他地域と比較すると非常に少なく、大半が土師器を主体として占められる。土師器の壺や移動式カマド・甕類には、須恵器の製作技法である格子目叩きや同心円の当て具による技法が多用されていることから、須恵器と土師器は同一工人集団、もしくは土師器の工人集団が須恵器の製作技術を担ったことによって生産された可能性が高いと考えられる。

今回の須恵器窯跡の調査からは、窯構造や須恵器の器種構成だけでなく、須恵器生産の様相や律令期における官的施設への供給など多くの情報を得ることができた。

(池邊)



第155図 1号窯跡(灰原の状況)



第156図 2号窯跡(完掘状況)



第157図 3号窯跡(完掘状況)



第158図 4号窯跡(完掘状況)

XV 中安遺跡第2次調査

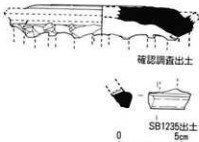
調査面積	約5,600㎡	調査期間	99.04.01～00.03.31
地域	G	調査担当	藤澤・神尾・塩地・高畠・永松・讃岐

調査地は大分市の東部、大在・坂ノ市地区にあたり、大野川の右岸、海岸線に沿って東西に広がる丘陵（城原面）の最高位（標高約42m地点）に位置する。

周辺には国指定史跡亀塚古墳をはじめ、多くの古墳が造営されており、当地は古代の豊後国海部郡に比定されている地域である。この海部郡を統括した海部郡衙の所在地については『豊後国風土記』に記された地名標記の現地比定作業により、大在・坂ノ市地区の里・市尾の字境付近が候補地の一つとして考えられてきた。

さらに、中安遺跡周辺地におけるこれまでの調査において円面視の出土や木棺墓の発見が報告され始め、周辺にある蔵地名と併せ、官衙跡の存在が期待されるようになってきたのである。

このような状況下で行われた今回の調査では、弥生時代終末～明治時代の遺構が検出され、特筆される遺構として調査区西側において確認することができた整地層を挟んで上下2面に飛鳥時代～奈良時代にかけの大形掘立柱建物跡群が発見された。



第160図 円面視実測図 (1/3)

今回は遺跡の重要性を鑑み、当該期の基本資料の提示を主たる目的として以下にその概要をまとめる。

これらの遺構群については重複関係や出土遺物、さらに建物の主軸方向や整地層との層位関係から、大きく3時期の変遷が確認されている。

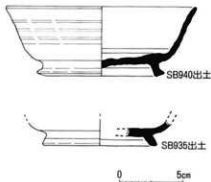
「第1期（7世紀後半～末頃）」

丘陵に沿って東西方向に延びる直線道路（SP665・755）に直行して南北建物跡群が展開する。また、柵によって部分的に区画されており、ある程度の規格性が認められる。

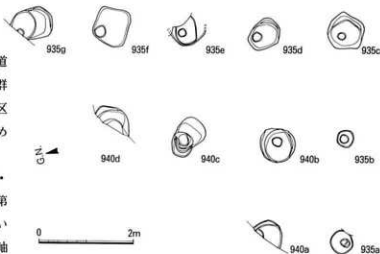
これらの建物跡群は小田編年のⅤ期・7世紀後半段階の竪穴住居を掘削し、第2期段階の掘立柱建物跡群に壊されていることが判明している。建物跡群の主軸方向については真北よりやや東にふれ、



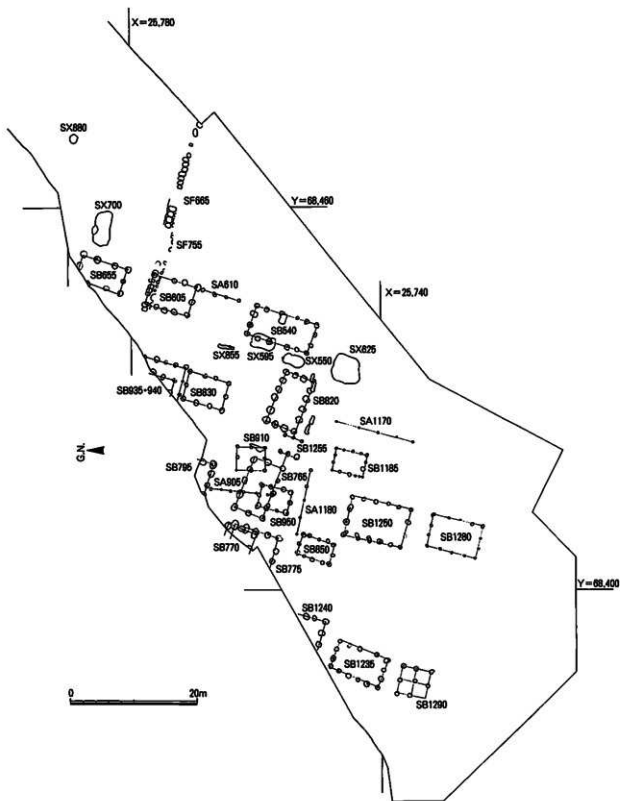
第159図 調査地点位置図



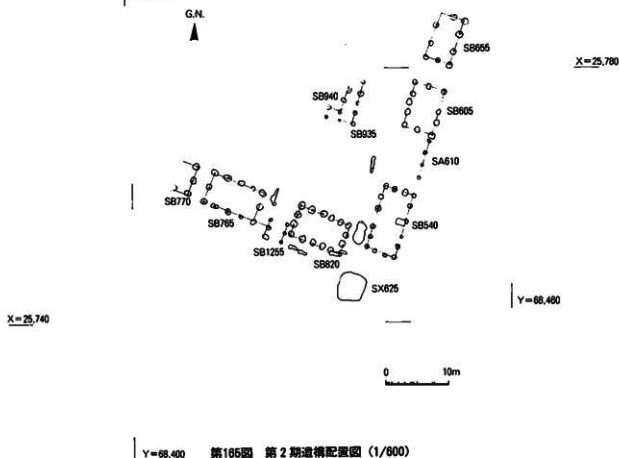
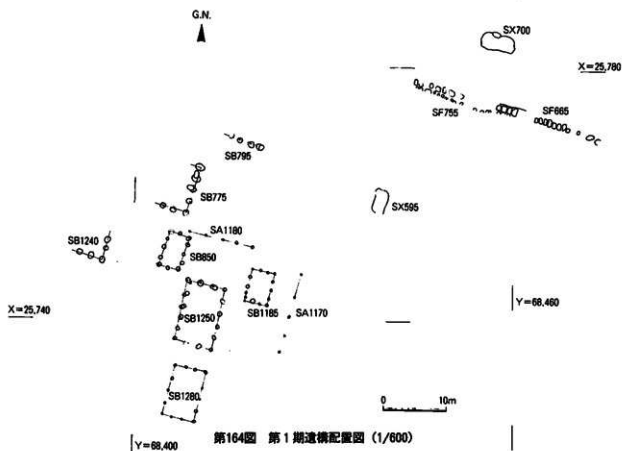
第161図 出土遺物実測図 (1/3)



第162図 四面底建物跡（SB935・940）柱痕確認時平面実測図(1/80)



第163圖 古代主要遺構配置圖 (1/800)



以後定期的にこの方位を指向する遺構群が展開しているため、この一帯の基軸と考えられるものである。

また、道路跡については現状で幅約2mを測り、浅い溝状の掘り込みの下面にシルトブロック土を詰めた連続土坑を配している。この直線道路については最低1度の改修が行われている可能性が指摘できるものの、後述する第2期の建物跡と重複関係が認められ、8世紀前半段階にはすでに廃絶していたものと判断される。

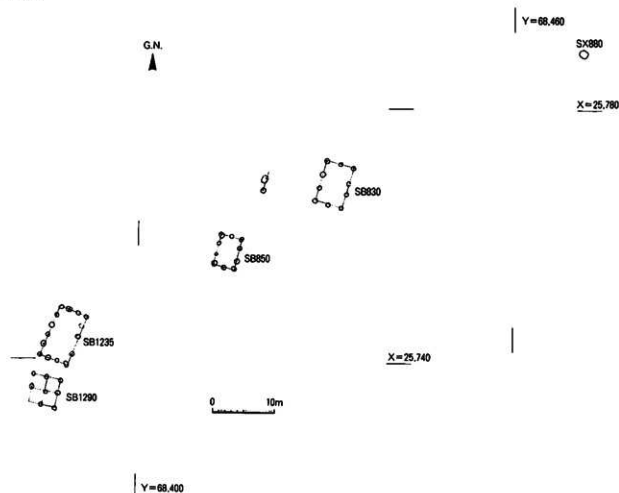
さらに大形土坑(SX700)からは刻書須恵器や白色の玉砂利が出土しており、注目される。

「第2期(8世紀初頭～前半頃)」

これらの建物跡群は整地層の下層から検出されたもので、現状で南北40m以上、東西30m以上の範囲に各3棟の建物跡群がし字状に配置されている。外側の柱列を揃える連結式の建物配置であり、柵で建物間を結ぶ地点も認められる。これらの柱穴は一辺約1mを測り、形状は方形プランを呈している。建物の主軸については前段階よりも真北に近づく。

また、調査区の関係上、一部ではあるが中心建物と考えられる四面庇建物跡(SB935・940)を確認している。この中央建物跡の南側延長線上にあたる区画の南東部分には四脚門が設置され、この四脚門の変則的な配置と関連するかのよう建物規模についても南東隅に規格の大きなものが認められる。さらに、この区画の南東隅外面には大形の井戸状の遺構(SX625)が存在する。

以上のことから、この段階の建物配置として西側に開くコの字、もしくはロの字形の典型的な官衙配置が想定される。



第166図 第3期遺構配置図(1/600)

また、これらの建物跡群については同じ掘り方内での建て替えが認められ、井戸状遺構にも数回の掘り返しが行われた後に、整地地業によって埋められたと判断されることから、整地地業が行われた段階まで、これらの施設が存在していた可能性が示唆される。

この段階の遺構群からは都城系土師器をはじめ、フィゴの羽口や鉾津などが出土している。

「第3期（8世紀後半頃）」

第1・2期の遺構群を埋める整地層を基盤面とする遺構群であり、明確な建物配置は不明ながらも、第1期の建物方位に合わせて大形の建物跡群が展開する。出土遺物は概して少ないものの、特筆される遺物として柱掘り方より円面硯の脚部片が出土している（SB1235）。

この段階以降は大宰府系の土師器環cが出土する8世紀末頃の柱穴跡が散見されるのみで、その後の古代遺構については確認できていない。

小結

今回の調査によって、当地一帯には飛鳥時代～奈良時代にかけて継続して大形の建物群が展開していたことが判明した。その中でも第2期の建物群については福岡県小郡市に所在する国指定史跡小郡官衙遺跡（筑後国御原郡衙）の政庁（郡庁）跡をはじめとする全国の郡庁建物群の配置に類似しており、その変遷についても共通性が認められる。

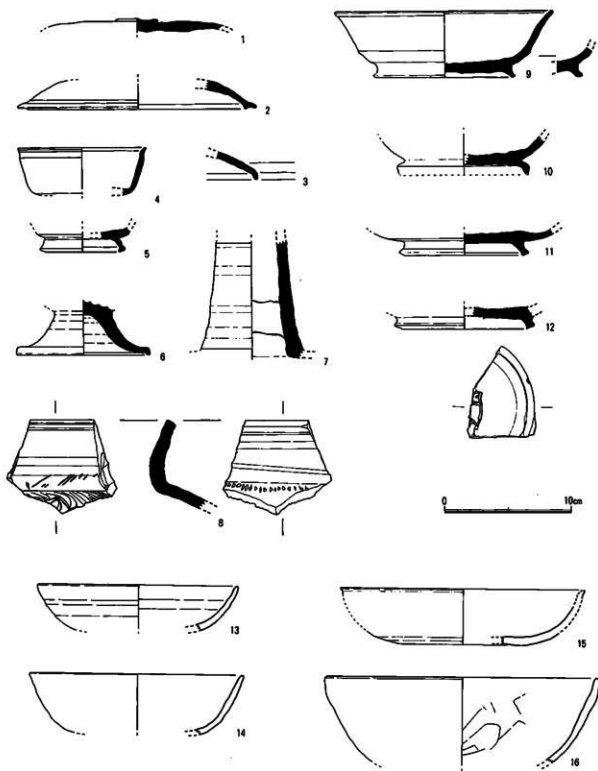
また、建物範囲についてもすでに指摘されている郡庁遺跡の規模と遜色ないものであり、出土遺物や立地からみてもこれらの遺跡が海部郡衙の政庁跡である蓋然性は極めて高いものと判断される。

さらに、第1期については評段階の施設である可能性が考えられる遺構群であり、整地地業を伴った第3期の建物群の存在も含め、詳細については別稿でまとめることにしたい。

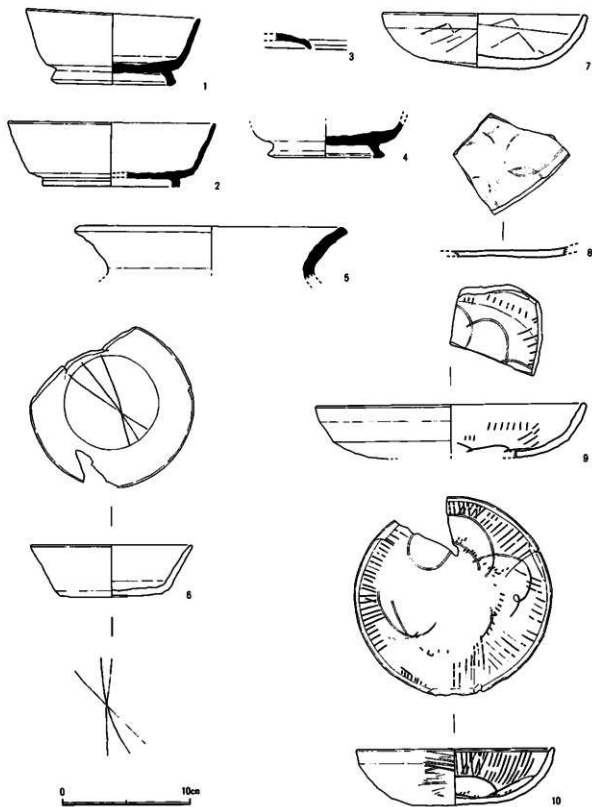
（塩地）



第167図 古代主要遺構検出状況（南方向から）



第168図 第1期 SX700出土遺物実測図 (1/3)



第169圖 第2期 SX625出土遺物實測圖 (1/3)

第IV章 受贈図書目録

1 調査報告書

青森県	青森県教育委員会	
	高岩(1)遺跡・高岩(2)遺跡 白蛇(1)遺跡・烏河岸遺跡 —東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—	青森県埋蔵文化財調査報告書 第266集 1999
	十三浜遺跡Ⅳ —青森県第4次発掘調査概報—	青森県埋蔵文化財調査報告書 第268集 1999
宮城県	宮城県多賀城跡調査研究所	
	桃生城跡Ⅳ	多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第21冊 1996
	桃生城跡Ⅴ	多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第22冊 1997
	桃生城跡Ⅵ	多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第23冊 1998
	桃生城跡Ⅶ	多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第24冊 1999
	桃生城跡Ⅷ	多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第25冊 2000
山形県	山形市教育委員会	
	山形城跡本丸発掘調査概報	1996
福島県	いわき建設事務所 いわき市教育委員会	
	相子島貝塚 第1編 —縄文時代後・晩期貝塚の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第47冊 1997
	相子島貝塚 第2編 —縄文時代後・晩期貝塚の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第47冊 1997
	いわき市教育委員会 財いわき市教育文化事業団	
	小茶戸遺跡 —小茶戸地区の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第51冊 1997
	一般国道6号線常磐バイパス遺跡発掘調査報告Ⅴ 中山遺跡Ⅱ区	いわき市埋蔵文化財調査報告 第52冊 1997
	清水遺跡 —古代集落跡の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第68冊 1997
	いわき市教育委員会	
	連部遺跡 一般国道10号久之浜線埋蔵文化財調査報告 —連部遺跡南端部の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第56冊 1999
	五反田A遺跡 常磐自動車道遺跡調査報告13—古代陶工集落・近世屋敷跡の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第57冊 1999
	白岩堀ノ内館跡 主要地方道いわき浪江線(白岩バイパス) 埋蔵文化財調査報告Ⅱ —古代集落跡と中世館跡の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第58冊 1999
	坂敷館跡 常磐自動車道東京巨塚線埋蔵文化財調査報告14 —古代集落と近世屋敷跡の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第60冊 1999
	滝ノ作遺跡 —古代集落跡の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第62冊 1999
	大堀C遺跡 一般国道6号久ノ浜バイパス埋蔵文化財調査報告 —古代集落・土坑部の調査—	いわき市埋蔵文化財調査報告 第64冊 1999
	いわき市教育委員会 福島工業高等学校環境化学教育研究センター	
	国指定天然記念物賢沼ウナギ生息地調査報告書(平成10年度)	1999
	郡山市教育委員会 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
	山田C遺跡第3次 国道288号(郡山東バイパス)改築事業関連	1999
	大槻八郎遺跡 —発掘調査報告— 第1冊	1999
	蒲倉古墳群 —第5次調査報告—	1999
	大槻向原遺跡 郡山市総合地方卸売市場建設事業関連	1999
	郡山南拠点地区画整理事業関連 荒井藩田遺跡(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区) —第7次～第10次発掘調査報告—	1999
	郡山南拠点地区画整理事業関連 荒井藩田遺跡(Ⅲ区) —第11次発掘調査報告—	1999
	御前南土地地区画整理事業関連 清水内遺跡 —6・8・9区調査報告— 第1冊	1999
	咲田遺跡 —第3次発掘調査報告書—	1999
	市道小川高倉線改良工事関連 宮ノ脇遺跡 —第3次発掘調査報告—	1999
	無線基地建設関連 山中日照田遺跡 —第2次調査報告—	1999
	館下遺跡	1999
	郡山市教育委員会	
	御前南土地地区画整理事業関連 清水内遺跡 —7区調査報告—	1999
	大安場古墳群 —第3次発掘調査報告—	1999

郡山道跡 ー第2次道標確認調査報告ー

1999

群馬県	高崎市教育委員会			
	西島相ノ沢道跡 厚生年金保養施設「サンピア高崎」建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査概報	高崎市文化財調査報告書第102集		1990
	豊岡後原Ⅰ・Ⅱ道跡 下豊岡市宮住宅建て替えに伴う発掘調査	高崎市文化財調査報告書第157集		1996
	高崎市内道跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書13	高崎市文化財調査報告書第160集		1999
	熊王Ⅰ・Ⅱ道跡 市立厚沢中学校体育館及び校舎建て替えに伴う埋蔵文化財調査報告書	高崎市文化財調査報告書第161集		1999
	京目杉ノ内・大沢大沢西道跡 市道目沢・萩原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)	高崎市文化財調査報告書第162集		1999
	真町Ⅱ道跡 高崎駅周辺(西口)土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)	高崎市文化財調査報告書第163集		1999
	合資野長尾道跡 合資野長尾Ⅱ道跡 都市計画道路南八幡・京・島線(合資野Ⅱ区)とJR高崎線の立体交差工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	高崎市文化財調査報告書第164集		1999
	高崎市小規模埋蔵文化財発掘調査概報3	高崎市文化財調査報告書第165集		1999
	史跡 日高道跡 一道路分布確認試験調査概要2ー	高崎市文化財調査報告書第166集		1999
	高崎市道跡調査会			
	寺尾館台・左近屋敷道跡	高崎市道跡調査会文化財調査報告書第75集		1999
埼玉県	寄居町道跡調査会			
	沼下道跡(3次)	寄居町道跡調査会報告 第17集		1999
	用土前峯道跡(1次)	寄居町道跡調査会報告 第18集		1999
	末野宮跡第8支群2	寄居町道跡調査会報告 第19集		1999
	中山道跡(第1次・第2次)	寄居町道跡調査会報告 第20集		1999
	町内道跡7 出羽塚道跡(第2次調査)	寄居町道跡調査会報告 第21集		1999
	峯ヶ谷道跡(第1次調査) 落梨子道跡(第5次調査)	寄居町道跡調査会報告 第22集		1999
	用土高城道跡 用土第三土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(3)	寄居町道跡調査会報告 第22集		1999
	用土北沢道跡(4次) 農業ふれあいセンター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	史跡跡形道跡 平成9年度発掘調査概要報告 史跡整備事業に伴う発掘調査	史跡跡形道跡調査報告第一集	1998
千葉県	国立歴史民俗博物館			
	日本古代印の基礎的研究	国立歴史民俗博物館研究報告 第79集		1999
	過去1万年間の陸域地質の変遷と自然災害史	国立歴史民俗博物館研究報告 第81集		1999
	市川市教育委員会			
	平成10年度 市川市内道跡発掘調査報告	国分台道跡 第38地点 第39地点 第44地点 第45地点 第3地点-4 第133地点-3		1999
	山田区 御山武都市文化財センター			
	山田新田Ⅱ道跡	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第42集		1996
	共立建設株式会社 御山武都市文化財センター			
	大台西橋・作道跡	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第54集		1999
	横芝町 御山武都市文化財センター			
	庚申道跡(1076地点)	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第55集		1999
	上池ノ下道跡	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第58集		1999
	中台大木戸道跡 893-5地点	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第64集		2000
	松尾町 御山武都市文化財センター			
	松尾城跡Ⅱ	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第56集		1999
	松尾藩公庁跡 ー松尾町宮自動車教習所拡張工事に伴う発掘調査報告書ー	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第61集		1999
	山武町 御山武都市文化財センター			
	猿山入道跡	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第57集		1999
	吉岡建設株式会社 御山武都市文化財センター			
	宮郷台道跡(地蔵873-1地点)	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第59集		1999
	医療法人社団正明会 御山武都市文化財センター			
	古宿道跡	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第60集		1999
	関東農政局千葉北部農業水利事務所 御山武都市文化財センター			
	田越台道跡	御山武都市文化財センター発掘調査報告書第66集		1999
東京都	東京都教育委員会 東京都埋蔵文化財センター			
	多摩ニュータウン道跡 先行調査報告 12	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第65集		1999
	多摩ニュータウン道跡 先行調査報告 13	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第68集		1999
	多摩ニュータウン道跡 先行調査報告 14 第1分冊	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第69集		1999

多摩ニュータウン道跡	先行調査報告 14 第2分冊	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第69集	1999
多摩ニュータウン道跡	先行調査報告 14 第3分冊	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第69集	1999
多摩ニュータウン道跡	先行調査報告 14 第4分冊	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第69集	1999
東京都埋蔵文化財センター			
多摩ニュータウン道跡	-Na72・795・796道跡-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na72・795・796道跡-(2)	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na327・329・330道跡-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第59集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na107道跡- 古代編	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第64集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na107道跡- 中世・近世以降編	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第64集	1999
多摩ニュータウン道跡		東京都埋蔵文化財センター調査報告 第66集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na125道跡-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第67集	1999
尾張藩上屋敷跡道跡Ⅳ		東京都埋蔵文化財センター調査報告 第70集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na113・115道跡-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第71集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na450・451・452道跡-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第72集	1999
多摩ニュータウン道跡		東京都埋蔵文化財センター調査報告 第73集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na446道跡-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第74集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na753道跡-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第75集	1999
多摩ニュータウン道跡	-Na46道跡-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第76集	1999
日野市栄町道跡	-日野都市計画道路3・4・8号線用地内の発掘調査報告-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第77集	2000
武蔵台道跡	-都立府中病院新外来棟増改修工事に伴う調査報告-	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第78集	2000
西国分寺地区道跡調査会			
武蔵国分寺跡北方地区	日影山道跡 東山道武蔵路	西国分寺地区(旧国鉄中央線道南西側跡地) 住宅市街地総合整備支援事業に伴う発掘調査報告書	1999
都営川越道住宅道跡調査会			
武蔵国分寺跡西方地区	武蔵台東道跡 I-(1)	古墳・歴史時代(本文・写真図版)	1999
武蔵国分寺跡西方地区	武蔵台東道跡 I-(2)	古墳・歴史時代(実測図版)	1999
武蔵国分寺跡西方地区	武蔵台東道跡 II-(1)	縄文時代(本文)	1999
武蔵国分寺跡西方地区	武蔵台東道跡 II-(2)	縄文時代(実測図版)	1999
武蔵国分寺跡西方地区	武蔵台東道跡 II-(3)	縄文時代(実測図版)	1999
武蔵国分寺跡西方地区	武蔵台東道跡 III	旧石器時代 自然科学編	1999
都立府中病院内道跡調査会			
武蔵国分寺跡西方地区	武蔵台東道跡 IV		1999
武蔵国分寺跡西方地区	府中病院道路拡張に伴う調査報告書		1998
東京都南部住宅建設事務所			
純久保道跡Ⅱ		-日野新町一丁目住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-	1999
府中市教育委員会			
武蔵国分寺南西地区発掘調査報告16	-高倉・美好町地域の調査4- 府中東芝ビル建設に伴う事前調査	府中市埋蔵文化財調査報告 第16集	1999
府中市道跡調査会			
大量出土銭発掘の記録		並木西ビル地区の調査	1998
武蔵国分寺開通(府中市計画道路3・2・2の2号線)道跡調査会			
武蔵国分寺南西地区発掘調査報告	-府中市計画道路3・2・2の2号線建設に伴う調査-	第一分冊 本文・図面編	1999
武蔵国分寺南西地区発掘調査報告	-府中市計画道路3・2・2の2号線建設に伴う調査-	第二分冊 写真図版編	1999
山梨県 甲府市教育委員会			
史跡 武田氏館跡Ⅳ		平成9年度西曲輪発掘調査・土橋等石積測量調査 平成7～8年度帯広堀調査・概要報告書	1999
新潟県 中条町教育委員会			
中倉道跡3次 鼠水防除事業に伴う発掘調査報告Ⅱ		中条町埋蔵文化財調査報告 第16集	1999
町内道跡Ⅴ		中条町埋蔵文化財調査報告 第17集	1999
下町・坊城道跡Ⅲ -A地点の調査-		中条町埋蔵文化財調査報告 第18集	1999
大坪道跡Ⅱ -県営農場整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ		中条町埋蔵文化財調査報告 第19集	1999

富山県	財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所	
	埋蔵文化財概要 一平成10年度一	
岐阜県	大垣市教育委員会	1999
	曾根城跡 一第3次発掘調査一	
	大垣市埋蔵文化財調査概要 平成8年度	大垣市埋蔵文化財調査報告書 第7集 1998
	昼飯大塚古墳Ⅳ 第5次調査 範囲確認調査概要一平成9年度一	大垣市埋蔵文化財調査報告書 第32集 1998
		大垣市埋蔵文化財調査報告書 第33集 1999
愛知県	名古屋市教育委員会	
	津賀田古墳 発掘調査概要報告書	1999
	名古屋城三の丸道跡 一第10次発掘調査の概要一	1999
	堅三蔵通道跡 一第14次調査の概要一	1999
	高蔵道跡 第20次発掘調査報告書	1999
	平田城跡第2次発掘調査報告書	1999
	旧紫川道跡第7次発掘調査概要報告書	1999
	朝日道跡第3・4次発掘調査報告書	1999
	千音寺道跡発掘調査概要報告書	1999
	埋蔵文化財調査報告書32 鳴海城跡(第1～7次)	名古屋市文化財調査報告 32 1999
	埋蔵文化財調査報告書30 三王山道跡(第1～5次)	名古屋市文化財調査報告 40 1999
	高蔵道跡 第19次発掘調査報告書	1999
	正木町道跡 第10次発掘調査報告書	1999
	東二雲町道跡第2次発掘調査報告書	1999
	財団法人埋蔵文化財センター	
	上品野蟹川道跡Ⅱ	財団法人埋蔵文化財センター調査報告第21集 1999
東邦ガス株式会社	東邦ガス工事に伴う埋蔵文化財調査報告書	東古渡町道跡第6次発掘調査報告書 高蔵道跡第21次発掘調査報告書 1999
豊田市教育委員会	豊坪道跡Ⅴ 【古代集落道跡、平安時代の鍛冶遺構、黒書・緑釉陶器・甕形土器の出土】	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 1999
	南山畑道跡【弥生時代終末期の「高地性集落」・鍛冶遺構・鉄鏡】	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集 1999
	豊坪道跡Ⅵ【弥生時代後期以降、古墳時代後期古墳群 古代集落、黒書・角杯・灰土土器の出土】	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集 1999
	中川原道跡<六所山麓における縄文後・晩期の配石遺構>	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集 1999
	千石道跡	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集 1999
豊田市教育委員会 愛知県企業庁	花本道跡	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集 1999
三重県	四日市市道跡調査会	
	東起古墳 一工場建設計画に伴う埋蔵分課発掘調査報告書一	四日市市道跡調査会文化財調査報告書Ⅱ 1997
	四日市市教育委員会	
	茶臼山1号墳	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 21 1998
	公事出道跡2	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 23 1999
	一般国道1号北勢バイパス 埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅲ	1999
滋賀県	滋賀県教育委員会	
	湖手道上半部・主郭東面の調査	特別史跡安土城発掘調査報告書Ⅷ 1998
	主郭北面・湖手道の調査	特別史跡安土城発掘調査報告書Ⅸ 1999
	大手道・伝羽柴秀吉邸跡	特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅴ 1998
	大手道・七曲り部	特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅵ 1999
	大野家文書目録	安土城・織田信長関連文書調査報告Ⅶ 1999
	上豊瀬区文書目録	安土城・織田信長関連文書調査報告Ⅷ 1999
	織豊期城郭基礎調査報告書2	1999
立命館大学文学部	立命館大学文学部	
	卯木道跡発掘調査概報Ⅰ(遺構編) 平安時代須恵器窯跡の発掘調査	立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第8冊 1999

京都府	府長岡京市埋蔵文化財センター		
	長岡京跡右京第606次 神足道跡	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第14集	1999
	長岡京跡右京第638次・神足道跡	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第15集	1999
	長岡京跡右京第641次・間田道跡	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第16集	1999
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書第36集		
	城陽市埋蔵文化財調査報告書第37集		
大阪府	熊取町教育委員会		
	東門寺跡発掘調査概要報告書X・(仮称)総合保険福祉センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	熊取町埋蔵文化財調査報告書第31集	1999
	熊取町道跡群発掘調査概要報告書XⅢ	熊取町埋蔵文化財調査報告書第32集	1999
	高槻市教育委員会		
	嶋上道跡群23	高槻市文化財調査概要	1999
	大谷女子大学資料館		
	田東山 一 道跡群発掘調査報告書一	大谷女子大学資料館報告書 第39冊	1999
	紀伊・砂羅之谷 一 宮跡群発掘調査報告書一	大谷女子大学資料館報告書 第40冊	1999
	兵庫県		
	赤穂市教育委員会		
兵庫県	周世・入相道跡発掘調査報告書Ⅳ 一 宅地開発事業に伴う発掘調査一	赤穂市文化財調査報告書 46	1998
	尼崎市教育委員会		
	平成8年度 尼崎市内道跡 復旧・復興事業に伴う発掘調査 概要報告書	尼崎市文化財調査報告書 第27集	1999
	釜名庄道跡 一 第31次調査(JR尼崎駅北市街地開発事業に伴う)発掘調査概要一	尼崎市文化財調査報告書 第28集	1999
	南淡町教育委員会		
	河内道跡 発掘調査報告書	南淡町文化財調査報告書 第3集	1997
	妙見山麓道跡調査会		
	神出Ⅲ 神出古窯址群に関連する道跡群の調査		1990
	市原・熊野神社裏道跡(発掘調査概要)		1990
	灘・桜口道跡		1994
奈良県	楠・荒田町道跡	共同住宅建設にともなう発掘調査報告書	1996
	下神津道跡 ハッ坪・赤坂地区の調査(1990年)		1996
	神楽道跡	住宅建設に伴う発掘調査報告書	1999
	中町教育委員会 京都府立大学考古学研究室		
	東山古墳群Ⅰ		1999
	奈良市教育委員会		
	史跡 平城京朱雀大路跡 一 発掘調査・整備事業報告一	奈良市埋蔵文化財調査研究報告書第2冊	1999
	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書(第1分冊)平成9年度		1998
	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書(第2分冊)平成9年度		1999
	平城京東市跡推定地の調査XⅥ	第21次発掘調査概要	1999
和歌山県	和歌山県文化財協議会		
	高家一ツ橋古墳発掘調査報告書 一付・高家地内道跡有無確認調査一	和歌山県埋蔵文化財 1994年度発掘調査報告書2	1995
	桜井市埋蔵文化財 1995年度 発掘調査報告書1		1996
和歌山県	和歌山市教育委員会		
	和歌山市内道跡発掘調査概要 一平成9年度一 西古礼道跡発掘調査 岡村道跡第2次調査		1999
	和歌山市文化体育振興事業団		
	太田・黒田道跡 第43次発掘調査概要	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第20集	1998
	山口道跡 第6次発掘調査概要	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第21集	1999
岡山県	岡山市教育委員会		
	長坂古墳群	附 足守荘園遺構緊急調査	1999
	宗形神社古墳		1999
	倉敷市埋蔵文化財センター		
倉敷市埋蔵文化財センター	船倉貝塚	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集	1999

総社市教育委員会		
奥坂道跡群 鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査	総社市埋蔵文化財発掘調査報告第15集	1999
広島県		
広島市教育委員会		
東広島市指定重要有形文化財 旧石井家住宅移築修理工事報告書		1997
広島市文化財団		
広島域外集跡 紙屋町・大手町拠点 - 広島市中区紙屋町・大手町所在 -	広島市文化財団発掘調査報告書 第1集	1999
塔の岡古墳群 - 広島市安佐北区白木町所在 -	広島市文化財団発掘調査報告書 第2集	1999
広島条道跡 基町高校グラウンド地点 - 広島市中区西日島所在 -	広島市文化財団発掘調査報告書 第3集	1999
県東広島市教育文化振興事業団		
吹越道跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第14冊	1999
午王曾原道跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第16冊	1999
吹越道跡発掘調査報告書Ⅱ	文化財センター調査報告書 第20冊	1999
史跡安岐園分寺跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第21冊	1999
府中市教育委員会		
府中市埋蔵文化財調査報告 第9冊 府中市内道跡4	- 1999・1997年度調査に関する報告 - 備後国府跡(全量寺東道跡)ほか 付: 六輪道跡・下木道工事に伴う立合調査	1999
山口県		
山口県教育委員会		
山口県の絵馬	山口県未指定文化財報告書 4	1986
綾・山口県の絵馬	山口県未指定文化財報告書 7	1990
山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター		
浦辺古墳群 大浦古墳群 梅ヶ崎古墳群 小部間作経塚 一般国道山口阿知須字部線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告	山口県埋蔵文化財センター調査報告 第1集	1998
東神寺・黒山道跡Ⅲ - 平成9年度南石川治水緑地建設事業に伴う発掘調査報告 -	山口県埋蔵文化財センター調査報告 第6集	1998
大浦古墳群 梅ヶ崎古墳群 一般国道山口阿知須字部線道路整備事業に伴う発掘調査報告 -	山口県埋蔵文化財センター調査報告 第11集	1999
東神寺・黒山道跡Ⅲ 平成10年度南石川一般河川改修・2級工事に伴う発掘調査報告 -	山口県埋蔵文化財センター調査報告 第13集	1999
上関城跡 - 上関新地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告 -	山口県埋蔵文化財センター調査報告 第14集	1999
山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 日本道路公団中国支社山口工事事務所		
吉部田道跡 - 山陽自動車道宇部下関線建設工事に伴う発掘調査報告 -	山口県埋蔵文化財センター調査報告 第2集	1998
山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 総合病院山口赤十字病院		
弥生のムラから、中世の町並へ - 大内氏関連北道跡 総合病院山口赤十字病院増改築工事に伴う発掘調査 -	山口県埋蔵文化財センター調査報告 第4集	1998
山口市教育委員会		
山口市内道跡詳細分布調査地図	山口市埋蔵文化財調査報告 第71集	1999
阿知須町教育委員会		
砂郷道跡発掘調査報告	阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告 第16集	1999
下関市教育委員会		
田中道跡 山口県下関市大字小月町字河内地内 田中道跡(河内地区)発掘調査報告書	下関市埋蔵文化財調査報告書63	1999
防府市教育委員会		
周防国府跡第103・107次発掘調査概要		1999
下右田道跡 第9・10・13・14・15・17次発掘調査概要 一市道開出線原線改良事業に伴う発掘調査概要一	本文編	1999
下右田道跡 第9・10・13・14・15・17次発掘調査概要 一市道開出線原線改良事業に伴う発掘調査概要一	PL・図版編	1999
下右田道跡第7次発掘調査報告書 - 右田幼稚園園舎改築工事に伴う発掘調査報告 -		1999
香川県		
高松市教育委員会		
讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ 第2次弘福寺領讃岐国山田郡田調調査報告書	高松市埋蔵文化財調査報告書 第37集	1999
都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊 川南・西道跡	高松市埋蔵文化財調査報告書 第38集	1999
太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 キョードー道跡	高松市埋蔵文化財調査報告書 第39集	1999
高松城跡(作事丸)昭和松平公益会事務所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	高松市埋蔵文化財調査報告書 第41集	1999
史跡 高松城跡(地久橋跡・三ノ丸跡)	高松市埋蔵文化財調査報告書 第42集	1999
高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 筑城城跡	高松市埋蔵文化財調査報告書 第43集	1999
奥の坊道跡群Ⅰ(奥の坊地区 大空古墳 金川岡古墳)	高松市東部運動公園(仮称)整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集	1999
愛媛県		
伊予媛県埋蔵文化財調査センター		
上井道跡	一般国道開出線原線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第77集	1999

鹿の子古墳群	新谷森ノ前道跡	県道今治丹原線の建設に伴う 埋蔵文化財調査報告書 第2集	1999
馬島亀ヶ浦道跡	馬島ハゼヶ浦道跡	来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集	1999
旭方道跡	旭方1号箱式石棺 柳内道跡 宮ノ谷道跡 大川道跡 正法寺道跡	来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第5集	1999
井門1道跡	井門2道跡		1999
松野町教育委員会			
史跡	河後森城跡ー現在までの調査と成果ー	松野町文化財調査報告 第9集	1999
松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター			
小野川流域の道跡Ⅱ	ー北海本恵社谷道跡ー	松山市分解材調査報告書 66	1998
松山大学構内道跡Ⅲ	ー第4・5次調査ー	松山市分解材調査報告書 68	1998
瀬戸風峠道跡		松山市分解材調査報告書 69	1998
船ヶ谷道跡	ー2次調査ー	松山市分解材調査報告書 70	1999
乃万の裏道跡	2次調査地	松山市分解材調査報告書 72	1999
船ヶ谷道跡	ー3次調査ー	松山市分解材調査報告書 73	1999
福岡県			
福岡県教育委員会			
原の東道跡の調査Ⅱ		九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー53ー	1999
金場道跡		九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー54ー上巻	1999
金場道跡		九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー54ー下巻	1999
畑田道跡の調査		九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー56ー	1999
廣取五反田道跡Ⅱ	上巻ー弥生時代包含層・古墳時代以降編ー	一般国道210号浮羽バイパス関係 埋蔵文化財調査報告 第10集	1999
廣取五反田道跡Ⅱ	下巻ー弥生時代包含層・古墳時代以降編ー	一般国道210号浮羽バイパス関係 埋蔵文化財調査報告 第10集	1999
以来尺道跡Ⅲ	上巻	一般国道3号筑紫野バイパス関係 埋蔵文化財調査報告 第7集	1999
以来尺道跡Ⅲ	下巻	一般国道3号筑紫野バイパス関係 埋蔵文化財調査報告 第7集	1999
上唐原了清道跡Ⅰ		一般河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告 4	1999
百留居屋敷道跡		一般河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告 4	1999
船池口ヶ坪道跡		一般国道210号筑紫野バイパス関係 埋蔵文化財調査報告第1集	1999
船越二ノ上道跡		一般国道210号浮羽バイパス関係 埋蔵文化財調査報告第11集	1999
貝元道跡Ⅱ	上巻 九州自動車道筑紫野I.C.建設に伴う弥生・古墳時代大集落の発掘調査報告		1999
貝元道跡Ⅱ	下巻 九州自動車道筑紫野I.C.建設に伴う弥生・古墳時代大集落の発掘調査報告		1999
福岡市教育委員会			
那珂君休道跡Ⅶ	ー那珂君休道跡群第7・8次発掘調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第587集	1998
下和白後口古墳群	古墳時代後期の円埴2基の調査ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第588集	1999
蒲田部本原道跡群6	ー蒲田部本原道跡群第6次調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第589集	1999
堅柏3	ー堅柏道跡群第8次調査の概要ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第590集	1999
箱崎7	ー箱崎道跡群第8次調査の報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集	1999
箱崎8	ー箱崎道跡群第11次・13次調査の報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第592集	1999
博多66	ー博多道跡群第94次聖福寺旧塔心礎・第106次発掘調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第593集	1999
博多67	ー博多道跡群第104次調査概要ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第594集	1999
比恵27	ー比恵道跡群第62次、第63次、第65次発掘調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第595集	1999
比恵道跡群28	ー比恵道跡群第13次、15次、21次調査ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第596集	1999
那珂22	ー那珂道跡群第62・63・65次調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第597集	1999
那珂23	ー那珂道跡群第9・57次調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第598集	1999
大井道跡	ー大井道跡群第1次発掘調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第599集	1999
吉武道跡群Ⅺ	飯盛・吉武岡場整備事業関係係調査報告書5 ー弥生時代墓地の調査報告2ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集	1999
福岡市板付周辺道跡群調査報告書第20集		福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集	1999
福岡市博多区南八幡道跡群第8次調査		福岡市埋蔵文化財調査報告書第602集	1999
野多目A道跡5	ー野多目道跡群第6次調査報告ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第603集	1999
弥永原道跡4	ー第5次調査ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第604集	1999
博多68	ー下川端東地区市街地両開発事業に伴う博多道跡群第96次調査の概要ー	福岡市埋蔵文化財調査報告書第605集	1999
藤崎道跡13		福岡市埋蔵文化財調査報告書第606集	1999

藤崎道跡14	— 藤崎道跡第28・29次調査—	福岡市埋蔵文化財調査報告書第607集	1999
有田・小田部32	— 有田道跡群第188次調査報告書—	福岡市埋蔵文化財調査報告書第608集	1999
福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告—6—	野芥道跡群第5次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第609集	1999
井相田D道跡	第2次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第610集	1999
田村14	— 田村道跡群第20次調査—	福岡市埋蔵文化財調査報告書第611集	1999
池六町田1	次郎丸高石4 田村13	福岡市埋蔵文化財調査報告書第612集	1999
入部Ⅲ	— 入部道跡群第1次調査報告(2)・第2次調査報告(1)—	福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集	1999
寒見が丘	— 金武・西人部地区開発に伴う埋蔵文化財の調査—	福岡市埋蔵文化財調査報告書第614集	1999
飯氏古墳群B群第14号墳調査報告書(2)		福岡市埋蔵文化財調査報告書第615集	1999
橋本一丁田道跡・女壇道跡	橋本一丁田道跡群第3次調査 女壇道跡群第5次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第616集	1999
広石南古墳群A群		福岡市埋蔵文化財調査報告書第617集	1999
基道跡2	— は場整備事業に伴う基道跡第2次調査報告—	福岡市埋蔵文化財調査報告書第618集	1999
大坪道跡・大坪南道跡	縄文時代と奈良時代の遺物包含層の調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第619集	1999
河越道跡10	— 平成10年度発掘調査概要報告—	福岡市埋蔵文化財調査報告書第620集	1999
那珂市教育委員会			
二又道跡			1997
稲光道跡		I・II地区発掘調査概報	1998
岩屋古墳群			1999
南原道跡群B・D・G地区			1999
甘木市教育委員会			
額田高見道跡Ⅰ		甘木市文化財調査報告書 第40集	1997
下瀬名子古墳群		甘木市文化財調査報告書 第41集	1998
下瀬宮原道跡Ⅰ		甘木市文化財調査報告書 第42集	1998
額田高見道跡Ⅱ		甘木市文化財調査報告書 第43集	1998
甘木市内道跡群2 額田高見道跡Ⅲ 梁山道跡Ⅳ		甘木市文化財調査報告書 第44集	1998
付録 平塚三反畑出土要領について		甘木市文化財調査報告書 第45集	1998
尾永西原道跡Ⅱ		甘木市文化財調査報告書 第46集	1999
甘木ミノケ道跡		甘木市文化財調査報告書 第47集	1999
堤通町道跡	弥生時代及び古墳時代道跡の調査		
久留米市教育委員会			
筑後国府跡	第152次調査	久留米市文化財調査報告書 第141集	1998
筑後国府跡	第155次調査 発掘調査概要	久留米市文化財調査報告書 第142集	1998
二本木道跡	— 第14・15次調査—	久留米市文化財調査報告書 第143集	1998
久留米市道「宮本今C?号線」	道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	久留米市文化財調査報告書 第144集	1998
上津・藤光地区西側埋蔵文化財調査報告書		久留米市文化財調査報告書 第145集	1998
上津・藤光道跡群Ⅱ		久留米市文化財調査報告書 第146集	1998
野中前道跡	— 第2次調査—	久留米市文化財調査報告書 第147集	1998
白口経厚道跡	— 第4・5・6次調査—	久留米市文化財調査報告書 第148集	1999
山川南木村道跡	— 第1～4次調査—	久留米市文化財調査報告書 第149集	1999
筑後国府跡・国府寺跡	— 平成10年度発掘調査概要報告—	久留米市文化財調査報告書 第150集	1999
平成10年度	久留米市内道跡群	久留米市文化財調査報告書 第151集	1999
ヘボノ木道跡	平成10年度発掘調査概要	久留米市文化財調査報告書 第152集	1999
筑後国府跡	— 第159次調査報告—		
行橋市教育委員会			
史跡跡所・谷神電石	行橋市文化財調査報告書 第26集	行橋市文化財調査報告書 第26集	1998
行橋市文化財調査報告書	第27集 鬼熊道跡	行橋市文化財調査報告書 第27集	1999
熊本県九州市教育文化事業課埋蔵文化財調査課			
金山道跡 1・V区	— 都市計画道路橋代28号線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書4—	北九州市埋蔵文化財調査報告書第223集	1999
金山道跡	— 都市計画道路橋代28号線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書5—	北九州市埋蔵文化財調査報告書第224集	1999
片山田道跡4		北九州市埋蔵文化財調査報告書第225集	1999
砂道跡2	— 徳力・葛原線道路新設改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書8—	北九州市埋蔵文化財調査報告書第226集	1999

片伊田道跡 5	北九州市埋蔵文化財調査報告書第227集	1999
- 速力・葛原線道路新設改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告10-		
小倉城跡跡 1-小倉城跡第2地点の発掘調査報告-	北九州市埋蔵文化財調査報告書第228集	1999
宮崎西勢道跡	北九州市埋蔵文化財調査報告書第229集	1999
栗川郡市小川川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書		
重留道跡第2地点	北九州市埋蔵文化財調査報告書第230集	1999
- 若園町耕作毛移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告1-		
永大九道跡群 3	北九州市埋蔵文化財調査報告書第231集	1999
- 北九州市永大丸・洲松土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告3-		
光順寺道跡 1	北九州市埋蔵文化財調査報告書第233集	1999
- 香月10号線改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告1-		
光順寺道跡 2	北九州市埋蔵文化財調査報告書第234集	1999
- 香月10号線建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告1-		
長野角屋敷道跡	北九州市埋蔵文化財調査報告書第235集	1999
- 北九州市総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財調査報告1-		
御前道跡群	北九州市埋蔵文化財調査報告書第236集	1999
- 西鉄赤生が丘ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財調査報告1-		
御前古墳群	北九州市埋蔵文化財調査報告書第237集	1999
- 西鉄赤生が丘ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財調査報告2-		
中西道跡	北九州市埋蔵文化財調査報告書第238集	1999
- 西鉄赤生が丘団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告3-		
三浦町教育委員会		
玉崎松木ノ道跡 福岡県三浦郡三浦町文化財調査報告書	三浦町文化財調査報告書 第6集	1999
志免町教育委員会		
横枕道跡 福岡県糟屋郡志免町大字羽所所在道跡の発掘調査報告	志免町文化財調査報告書 第8集	1998
志免町内道跡等分布調査報告書	志免町文化財調査報告書 第9集	1999
碧宮町教育委員会		
里丸尾城跡 九州電力株式会社500KV北九州幹線139建設に係わる埋蔵文化財の調査報告書	碧宮町文化財調査報告書 第16集	1999
宗像市教育委員会		
田久瓜ヶ枝	宗像市文化財調査報告書 第46集	1998
田久松ヶ浦	宗像市文化財調査報告書 第47集	1998
小郡市教育委員会		
寺福前内畑下道東道跡	小郡市文化財調査報告書 第120集	1998
埋蔵文化財調査報告書 3 井上東山ノ後道跡 上岩田天神木道跡	小郡市文化財調査報告書 第121集	1998
井上庚寺 1	小郡市文化財調査報告書 第122集	1998
大崎中ノ前道跡 2	小郡市文化財調査報告書 第123集	1998
勝白坂道跡M地点	小郡市文化財調査報告書 第124集	1998
三沢池道 2 道跡	小郡市文化財調査報告書 第125集	1998
力武前道跡	小郡市文化財調査報告書 第126集	1998
大坂井道跡 Ⅱ 付編 大坂井道跡Ⅱ	小郡市文化財調査報告書 第127集	1998
小郡市街周辺道跡 1 福岡県小郡市指定「小郡市街道跡」重要道跡確認調査	小郡市文化財調査報告書 第128集	1998
小坂井くうてさん道跡	小郡市文化財調査報告書 第129集	1998
大坂井道跡 Ⅱ	小郡市文化財調査報告書 第130集	1998
新宮町教育委員会		
垂水庵寺Ⅱ 宇野地区道跡群Ⅰ	新宮町文化財調査報告書 第12集	1999
大刀洗町教育委員会		
下高橋(上野・馬屋元)道跡Ⅳ	大刀洗町文化財調査報告書 第16集	1999
富多草道跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	大刀洗町文化財調査報告書 第18集	1999
大野城市教育委員会		
中・寺尾道跡Ⅱ	大野城市文化財調査報告書 第54集	1999
森園道跡Ⅱ	大野城市文化財調査報告書 第55集	1999
石勾道跡Ⅳ - J 地点の調査 -	大野城市文化財調査報告書 第56集	1999
筑後市教育委員会		
雄久中牟田道跡	筑後市文化財調査報告書 第19集	1999
筑後市内道跡群	筑後市文化財調査報告書 第20集	1999
筑後西部第2地区道跡群(Ⅰ)	筑後市文化財調査報告書 第21集	1999
赤宮担い手育成基金整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	筑後市文化財調査報告書 第22集	1999
前津中ノ玉道跡Ⅱ	筑後市文化財調査報告書 第23集	1999
長崎坊田道跡	筑後市文化財調査報告書 第24集	1999

筑穂町教育委員会		
上穂波地区道跡群 3	筑穂町文化財調査報告書 第 6 集	1999
田川市教育委員会		
経塚横穴墓群・古墳群	田川市文化財調査報告書 第 9 集	1999
那珂川町教育委員会		
前田道跡群 I	那珂川町文化財調査報告書 第 43 集	1998
前田道跡群 II	那珂川町文化財調査報告書 第 44 集	1999
仲道跡群 III	那珂川町文化財調査報告書 第 45 集	1999
荻ノ原道跡群 古屋敷道跡群	那珂川町文化財調査報告書 第 46 集	1999
二丈町教育委員会		
石崎地区道跡群 曲り田周辺道跡 I	二丈町文化財調査報告書 第 4 集	1991
石崎地区道跡群 曲り田周辺道跡 III	二丈町文化財調査報告書 第 6 集	1993
石崎地区道跡群 曲り田周辺道跡 IV	二丈町文化財調査報告書 第 7 集	1993
木船・三本松道跡 深江地区は場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 I	二丈町文化財調査報告書 第 9 集	1994
石崎地区道跡群 大坪道跡 I	二丈町文化財調査報告書 第 10 集	1995
石崎地区道跡群 大坪道跡 II	二丈町文化財調査報告書 第 11 集	1995
木船の森道跡 深江地区は場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 II	二丈町文化財調査報告書 第 12 集	1995
石崎地区道跡群 曲り田周辺道跡 V	二丈町文化財調査報告書 第 13 集	1996
木船・三本松道跡 II 深江地区は場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 III	二丈町文化財調査報告書 第 14 集	1996
木船・三本松道跡 III 深江地区は場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 IV	二丈町文化財調査報告書 第 15 集	1997
石崎地区道跡群 矢風道跡 第 2 次調査	二丈町文化財調査報告書 第 16 集	1997
荻の原古墳群 II	二丈町文化財調査報告書 第 17 集	1997
早田道跡 平成 3 年 台風 19 号災害に伴う埋蔵文化財発掘調査	二丈町文化財調査報告書 第 18 集	1997
上深江・小西道跡 I 深江地区は場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 V	二丈町文化財調査報告書 第 19 集	1998
石崎地区道跡群 曲り田周辺道跡 VI	二丈町文化財調査報告書 第 20 集	1998
深江・仲道道跡 深江地区は場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 VI	二丈町文化財調査報告書 第 21 集	1999
二丈中学校道跡 二丈中学校校舎増築に伴う埋蔵文化財調査 I	二丈町文化財調査報告書 第 22 集	1999
福岡大学文学部考古学研究室		
倉瀬戸古墳群 II - A10・11号墳の調査-	福岡大学考古学研究室研究調査報告書第 1 冊	1999
福岡市教育委員会		
福岡割畑道跡	福岡市文化財調査報告書 第 14 集	1999
手光古墳群 II 手光北 6 号墳	福岡市文化財調査報告書 第 15 集	1999
豊前市教育委員会		
今市向野道跡 C 地点	豊前市文化財調査報告書 第 9 集	1997
今市向野道跡 A・B 地点 都市計画街路事業県道市丸・八屋線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	豊前市文化財調査報告書 第 10 集	1998
松宮御場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 IV 吉畑向原道跡・永久道跡	豊前市文化財調査報告書 第 11 集	1998
豊津町教育委員会		
八景山山麓古墳群 福岡県京都郡豊津町大字国作所在古墳群の調査	豊津町文化財調査報告書 第 21 集	1999
北九州市教育委員会		
釜蓋道跡 第 2 地点 - 合馬竹林公園建設に伴う埋蔵文化財調査-	北九州市文化財調査報告書 第 81 集	1999
牧山古墳群	北九州市文化財調査報告書 第 82 集	1999
田原道跡	北九州市文化財調査報告書 第 83 集	1999
木屋瀬宿西溝口	北九州市文化財調査報告書 第 84 集	1999
小倉城跡 V - 下屋敷跡の調査-	北九州市文化財調査報告書 第 85 集	1999
横代中津町道跡 カキ道跡	北九州市文化財調査報告書 第 86 集	1999
京町道跡 (第 2 地点)	北九州市文化財調査報告書 第 87 集	1999
佐賀県 佐賀市教育委員会		
上和泉道跡 11 区・13 区	佐賀市文化財調査報告書第 98 集	1999
東瀬道跡 1 区	佐賀市文化財調査報告書第 99 集	1999

江頭道跡-9区の調査- 森田道跡-1区の調査-	佐賀市文化財調査報告書第100集	1999
ウー屋敷道跡	佐賀市文化財調査報告書第101集	1999
赤田寄道跡Ⅶ-10~14区の調査-	佐賀市文化財調査報告書第102集	1999
長瀬一本杉道跡 高木城跡	佐賀市文化財調査報告書第103集	1999
江頭道跡-1~8区の調査-	佐賀市文化財調査報告書第104集	1999
坪の上道跡Ⅱ 一佐賀導水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2-	佐賀市文化財調査報告書第105集	1999
徳永道跡群Ⅱ 上和泉道跡6区	佐賀市文化財調査報告書第106集	1999
一佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書6-	佐賀市文化財調査報告書第107集	1999
上和泉道跡群Ⅱ 上和泉道跡6区		
一佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書7-		
三日月町教育委員会		
羅島東分道跡群Ⅱ 西佐賀水道企業団三日月排水池建設に伴う 羅島東分古墳群D-1号墳の調査報告書	三日月町文化財調査報告書 第10集	1999
武雄市教育委員会		
武雄市内古瀬跡群発掘調査報告書Ⅳ	武雄市文化財調査報告書 第39集	1999
神埼町教育委員会		
的小瀬道跡	神埼町文化財調査報告書 第61集	1998
佐賀県神埼郡神埼町大字的に所在する的小瀬道跡3区~11区の調査の記録	神埼町文化財調査報告書 第62集	1998
本吉半田道跡0・I区	神埼町文化財調査報告書 第63集	1998
佐賀県神埼郡神埼町大字本吉半田所在道跡の発掘調査報告書	神埼町文化財調査報告書 第64集	1998
袖川城跡 -7次の発掘調査報告書-	神埼町文化財調査報告書 第65集	1998
利田柳道跡 -Ⅶ区の発掘調査概要報告書-		
尾崎土生道跡	神埼町文化財調査報告書 第65集	1998
佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎土生道跡1区~Ⅶ区の発掘調査報告書		
鎮西町教育委員会		
平野町道跡 -一番村屋石油GS建設に伴う発掘調査-	鎮西町文化財調査報告書 第18集	1999
唐津市教育委員会		
唐津市内道跡確認調査(15)土地開発に伴う市内道跡確認調査報告	唐津市文化財調査報告書 第84集	1999
菅平田西山道跡(2)	唐津市文化財調査報告書 第85集	1999
竹木湯ノ木道跡 県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財	唐津市文化財調査報告書 第86集	1999
菜畑内田道跡(2)	唐津市文化財調査報告書 第87集	1999
長崎県 大村市教育委員会		
富の原道跡 大村館墓地 下龍瀬山下墓地	大村市文化財調査報告書 第21集	1998
坂口館跡 -歴史公園整備事業に伴う発掘調査-	大村市文化財調査報告書 第22集	1998
富の原道跡-(株)多賀冷凍機製作所 工場建設に伴う発掘調査-	大村市文化財調査報告書 第23集	1998
大村市文化財保護協会		
帯取道跡 -ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査-		2000
熊本県 熊本県教育委員会		
迫ノ上道跡 一般国道3号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	熊本県文化財調査報告書 第170集	1999
古閑山道跡 一般国道3号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	熊本県文化財調査報告書 第171集	1999
蔵城道跡 一錦町迫地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財調査	熊本県文化財調査報告書 第172集	1999
須地松本道跡(2) 一建設省川辺川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の調査	熊本県文化財調査報告書 第173集	1999
二本木道跡群 整備新幹線駅整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	熊本県文化財調査報告書 第174集	1999
古閑北・製木道跡 益城熊本空港インターチェンジ建設事業に伴う	熊本県文化財調査報告書 第175集	1999
埋蔵文化財発掘調査報告書		
立石道跡 大瀬A道跡 上場道跡 前畑道跡	熊本県文化財調査報告書 第176集	1999
相い千手成基整備事業に伴う文化財調査		
石の本道跡群Ⅰ 第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う	熊本県文化財調査報告書 第177集	1999
埋蔵文化財発掘調査報告書		
石の本道跡群Ⅱ 第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う	熊本県文化財調査報告書 第178集	1999
埋蔵文化財発掘調査報告書		
耳切道跡 一小国地熱発電所計画に伴う埋蔵文化財調査報告書	熊本県文化財調査報告書 第180集	1999
鞠智城跡 一第20次調査報告書-	熊本県文化財調査報告書 第181集	1999
熊本県の近代化遺産 一近代化遺産総合調査報告書-	熊本県文化財調査報告書 第182集	1999
古閑北道跡 産業展示場建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	熊本県文化財調査報告書 第184集	1999
熊本市教育委員会		
池辺寺跡Ⅱ 一平成8・9年度発掘調査報告書-		1999
熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集 一平成10年度-		1999

植木町教育委員会

植木町道跡地図・町内道跡詳細分布調査一

植木町文化財調査報告書 第10集

1999

大分県

大分県教育委員会

ナシカ谷道跡 大分県北部中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

小迫辻原道跡Ⅰ A・B・C・D区編

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

1999

在隈村下道跡

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

1999

玉沢地区糸里跡道跡群

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

1999

馬姓道跡 北ノ後跡 乙院屋敷道跡

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

1999

夕田道跡群

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

1999

府内城下町 一 国道197号線高砂歩道橋建設に伴う文化財発掘調査報告書一

1999

蔵ノ原道跡 一般国道210号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

中尾近世墓地区 一 国道10号線旦の原交差点拡幅に伴う埋蔵文化財調査報告書一

1999

岸の上道跡(那覇浜南部地区) 夷地区 件速速見地区 玖珠地区 下原地区(野津原西部地区)

原田第2遺跡(大野中央地区) 堀本・神村・飛竜野・馬手地区 山中地区 西福寺地区 下宿掛道跡(大田地区)

延吉道跡(安城地区) 軒の井道跡(塩掛地区) 佐志生地区

大分県内道跡発掘調査概報Ⅶ

1999

室ノ間道跡 主要地方道三重弥生線(因尾工区)道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第101輯

1999

龍明道跡 一 県道山香・院内線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

大分県文化財調査報告書第102輯

1999

スポーツ公園内道跡群発掘調査報告書(第1分冊)序編

大分県文化財調査報告書第103輯(第1分冊)

1999

スポーツ公園内道跡群発掘調査報告書(第2分冊)一方平1道跡

大分県文化財調査報告書第103輯(第2分冊)

1999

スポーツ公園内道跡群発掘調査報告書(第3分冊)一方平2道跡

大分県文化財調査報告書第103輯(第3分冊)

1999

スポーツ公園内道跡群発掘調査報告書(第4分冊)

大分県文化財調査報告書第103輯(第4分冊)

1999

九池道跡 湯田道跡 牧ノ内道跡 上牧ノ内道跡 小平ノ辻道跡

古国府道跡群 一 国道210号線別所工区道路改良工事に伴う

発掘調査報告書一 上戸原地区 土毛地区 甲斐本地区

大分県文化財調査報告書第104輯

1999

龍ノ原道跡

一般国道210号線道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

息通山香・院内線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書一

1999

宇佐市教育委員会

勢助寺跡2次調査 法鏡寺道跡4次調査 瓦塚道跡調査6次調査

宇佐地区道跡群発掘調査概報Ⅲ

1999

別府道跡13次調査 小部道跡15次調査 川部道跡3次調査

宇佐地区歴史文化調査整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

1994

上山田横穴墓 観音山横穴墓 観音山板碑

久住町教育委員会

板切道跡群(第1～V)・小田原道跡

県営担い手育成圃場整備事業部野西部地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

1999

国東町教育委員会

原道跡跡七郎丸1地区・口寺田道跡

国東町文化財調査報告書 第18集

1999

県営跡場整備国東川南地区関係発掘調査報告書

三重町教育委員会

赤丸越道跡 三重地区道跡群発掘調査報告書

三重町文化財調査報告書 第5集

1999

久知良道跡 妙範院跡 市道道跡(堀口地区)

三重地区道跡群発掘調査概報Ⅲ

1999

十六山横穴墓群 中島地区 中小坂道跡 垣内道跡 三重原道跡

大田村教育委員会

ヒヨウ道跡 一 県営圃場整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘一

大田村文化財調査報告書 第6集

1999

竹田市教育委員会

戸上道跡・穴井道跡跡第2道跡

一般国道57号線(竹田拡幅)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ

1996

穴井道跡第2道跡・穴井道跡第3道跡

一般国道57号線(竹田拡幅)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ

1997

西山社製糸工場跡発掘調査報告書

1965

岡藩跡発掘調査報告書

1992

平成9年度史跡岡城跡路路埋設事業報告書 史跡岡城跡

1998

市道岡城線道路改良工事埋蔵文化財発掘調査概報 中川午之助屋敷群 野殿家屋敷跡

1998

一般国道502号線改良工事埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ 中川午之助屋敷群 稲荷谷近世墓地区群

1998

城下町道跡 立花屋跡

1997

竹田地区道跡群 平田地区 横舞道跡 下村道跡 城下町道跡群・立花屋跡

1997

竹田地区道跡群 南光寺道跡 史跡岡城周辺道跡群Ⅲ 方々瀬道跡 扶田武家屋敷跡

1998

竹田地区南部道跡群Ⅳ 史跡岡城跡周辺道跡群Ⅱ

1996

岡藩城下町道跡群(茶屋ノ辻近世墓地区群・宇野屋敷跡) 竹田地区南部道跡群Ⅴ

1994

平成7年度史跡岡城跡保存修理事業報告書 史跡岡城跡Ⅲ

1996

大分市埋蔵文化財調査年報105

平成8年度史跡岡城跡保存修理事業報告書	史跡岡城跡Ⅹ	1997
平成9年度史跡岡城跡保存修理事業報告書	史跡岡城跡Ⅹ	1998
平成10年度史跡岡城跡保存修理事業報告書	史跡岡城跡Ⅹ	1999
中津市教育委員会		
福島道跡(Ⅳ) 東入垣地区 定留道跡八反ガソウ地区	中津市文化財調査報告 第23集	1999
日田市教育委員会		
吹上道跡 第9次調査の概要報告		1999
豊後高田市教育委員会		
スキヤク道跡、小幡道跡、イセガ道跡、割掛道跡、ソノ田A道跡、ソノ田B道跡、寺田今藤道跡	豊後高田地区道跡群発掘調査概報Ⅷ	1992
内野道跡・割掛道跡	豊後高田地区道跡群発掘調査概報Ⅸ	1993
雲林道跡・カワラガマ道跡	豊後高田地区道跡群発掘調査概報Ⅹ	1994
カワラガマ道跡、クギ道跡、松本道跡、上殿道跡、茶岡道跡、五反田道跡、トシノ神道跡	豊後高田地区道跡群発掘調査概報Ⅺ	1995
松本道跡、上殿道跡B地区、トシノ神道跡	豊後高田地区道跡群発掘調査概報Ⅻ	1996
西田古墳、西田道跡、西村道跡、高山道跡、上野道跡、口田道跡、長賀道跡、貝元道跡	豊後高田地区道跡群発掘調査概報Ⅼ	1997
柳ヶ谷道跡、泉り道跡、島送り道跡、松山道跡、宮ノ谷・大内ヶ谷道跡、相原政所跡道跡、支田ノ上道跡、小幡道跡、古其道跡、口門田道跡、戸原道跡、宮田道跡、岡田道跡、田中道跡、川原田道跡、鈴ヶ森道跡、長野道跡、上屋敷道跡	豊後高田地区道跡群発掘調査概報Ⅽ	1998
坂本道跡、糸永道跡、路寺田道跡、屋敷田道跡、道ノ下道跡	豊後高田地区道跡群発掘調査概報Ⅾ	1999
大原鬼塚古墳	豊後高田地区文化財調査報告書 第2集	1993
小田原地区道跡群発掘調査報告書(1) 寺田今藤道跡	豊後高田地区文化財調査報告書 第3集	1994
小田原地区道跡群発掘調査報告書(2) 寺田卯月道跡	豊後高田地区文化財調査報告書 第4集	1995
米岡地区道跡発掘調査報告書 割掛道跡	豊後高田地区文化財調査報告書 第5集	1999
耶馬溪町教育委員会		
妙ノ野道跡	耶馬溪町文化財調査報告書 第1集	1997
宮崎県		
宮崎県教育委員会		
宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ	詳説編	1999
特別史跡 西都原古墳群	発掘調査・保存整備概要報告書Ⅳ	1999
寺崎道跡第7次調査	国指定保存整備基礎調査 概要報告書Ⅲ	1999
男狭穂塚女狭穂塚墓参考地測量報告書	宮崎県文化財調査報告書 第42集	1999
	宮崎県文化財調査報告書 第43集	1999
平成10年度 農協基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書	船形地区道跡、大野原道跡・五ヶ村道跡、西川原道跡、橋本地区道跡	1999
宮崎県埋蔵文化財センター		
上の原第3道跡 一級宮農地保全整備事業に伴う時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第13集	1999
内屋敷道跡 県立小林高等学校生徒寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第14集	1999
鶴野内中水流通跡 特定交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告書	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第16集	1999
上牧第2調査 母智智原第2道跡 九州農業試験場畑地利用部施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第18集	1999
宮崎市教育委員会		
熊野第2道跡	宮崎市文化財調査報告書 第36集	1999
松添貝塚Ⅱ 青島歴史公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎市文化財調査報告書 第37集	1999
北中道跡 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎市文化財調査報告書 第38集	1999
東宮道跡 東宮土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書	宮崎市文化財調査報告書 第39集	1999
石ノ迫第2道跡	宮崎市文化財調査報告書 第40集	1999
下郷道跡 宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎市文化財調査報告書 第41集	1999
えびの市教育委員会		
昌明寺道跡 県営担い手育成基盤整備事業昌明寺地区園地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告	えびの市埋蔵文化財調査報告書 第23集	1999
延岡市教育委員会		
平成10年度 市内道跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	延岡市文化財調査報告書 第21集	1999
高岡町教育委員会		
日守地区式横穴墓群 大谷道跡表採掘土器資料	高岡町文化財調査報告書 第4集	1999
川除道跡 後川小学校屋内運動場建設にかかる発掘調査報告書	高岡町文化財調査報告書 第5集	1999

	高城町教育委員会	
	上別府道跡 下野道跡 平成10年度農タボ反転客土事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 町内道跡詳細分布調査報告書	高城町文化財調査報告書 第8集 高城町文化財調査報告書 第7集 1999
	西都市教育委員会	
	市内道跡発掘調査概要報告書IV 西原地区道跡 日向国分寺跡	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集 1999
	田野町教育委員会	
	スナノ山第2道跡(D地区) 県宮ふるさと能動緊急整備事業鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 スナノ山第2道跡(クノ山地区) 道跡E地区 県宮畑地帯総合整備事業(緊急整備型) 鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 畑田道跡 県宮農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 本野道跡(縄文時代遺物編) 平成4年度県宮農地保全整備事業元野地区に伴う元野地区道跡発掘調査報告書	田野町文化財調査報告書 第29集 田野町文化財調査報告書 第30集 田野町文化財調査報告書 第31集 田野町文化財調査報告書 第32集 1999 1999 1999 1999
	都城市教育委員会	
	駄六道跡 一県宮担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書一	都城市文化財調査報告書 第47集 1999
	日南市教育委員会	
	平成9年度 日南市内道跡発掘調査概要 平成9年度 大園道跡 農村資源活用農業構造改善事業 日南市都市農村交流センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 平成10年度 日南市内道跡発掘調査概要 平成10年度 1.堂之元道跡 2.川辺ケ野道跡 3.上鶴道跡 4.木落道跡	日南市埋蔵文化財調査報告書 第8集 日南市埋蔵文化財調査報告書 第9集 日南市埋蔵文化財調査報告書 第10集 日南市埋蔵文化財調査報告書 第11集 1998 1998 1999 1999
	東郷町教育委員会	
	東郷町道跡群詳細分布調査報告書	東郷町文化財調査報告書 2000
鹿児島県	姶良町教育委員会	
	宮田ヶ岡瓦室跡	姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書 1999
	薩摩町教育委員会	
	中津川城跡 農免農道整備事業(古井手地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	薩摩町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1999
	鹿児島市教育委員会	
	若宮道跡 一若宮公園整備事業に伴う第2次緊急発掘調査報告書一 不動寺道跡 一谷山第二地区土地区画整備事業に伴う確認調査報告書一	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(24) 鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(25) 1999 1999
	垂水市教育委員会	
	県宮農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 後ヶ迫入道跡 個人住宅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 終原貝塚	垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1999 1999
2 定期刊行物・図録等		
北海道	釧路市埋蔵文化財センター	
	調査年報11 平成10年度	1999
宮城県	宮城県多賀城跡調査研究所	
	多賀城跡第66次調査 多賀城跡第67次調査 多賀城跡第68次調査 多賀城跡第69次調査 多賀城跡第70次調査	宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1998 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999 2000
秋田県	秋田市教育委員会	
	史跡秋田城跡 整備事業報告書(地域中核史跡等整備特別事業・地方拠点史跡総合整備事業)	1999
福島県	郡山市教育委員会 絆郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
	第5回市内道跡発掘調査成果展 温故知新	1999
	郡山市教育委員会	
	郡山市埋蔵文化財分布調査報告書6	1999
茨城県	筑波大学歴史・人類学系	
	筑波大学 先史学・考古学研究 第10号	1999

埼玉県	大野 佑司	日本の歴史から消された國と女王 邪馬台國と卑彌呼	1999
千葉県	国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究年報	1999
	山武考古学研究所	山武考古学研究所出版物目録	1999
		研究所案内	1999
		山武考古学研究所年報 No.17	1999
		業務経歴	1999
	神山武郡市文化財センター	年報No.15	1999
	南山大学人類学博物館	千葉県香取郡山田町 向油田貝塚の土器	人類学博物館紀要 第18号
東京都	吉川弘文館	邪馬台國と安曇宮古墳	邪馬台國の謎に迫る 発見された青銅の鏡は何を語るのか?
	狩野 九	古代を考える 古代寺院	1999
	浅草寺	浅草寺佛教文化講座 平成10年度	1999
	早稲田大学考古学会	古代 第107号	1999
	東京大学大学院人文社会系研究科	—文化資源学の構想—	1998
	東京都埋蔵文化財センター	研究論集	1999
	世田谷区教育委員会 世田谷区立郷土資料館	畿内王権と古代の東国	野毛大塚古墳の時代
富山県	神富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所	富山考古学研究	紀要 第2号
		埋蔵文化財年報 (10) 平成10年度	1999
		富山県指定史跡 勸修寺古墳発掘調査レポート —平成10年度富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座—	1999
石川県	金沢市史編さん委員会	金沢市史 資料編3 近世—	1999
		金沢市史 資料編11 近代—	1999
		金沢市史 資料編18 松岡・地岡	1999
		金沢市史 資料編19 考古	1999
	大垣市教育委員会	埋蔵文化財ニュース87	国分寺跡発掘調査関係文獻目録
愛知県	神瀬戸市埋蔵文化財センター	研究紀要	1999
		平成10年度 瀬戸市埋蔵文化財センター年報	2000
		列島に広がる大宮製品 東日本の様相	神瀬戸市埋蔵文化財センター企画展
三重県	四日市市教育委員会	四日市市文化財保護年報9 —平成9年度—	1999
滋賀県	滋賀県安土城郭調査研究所	研究紀要 第6号	1998
		滋賀県安土城郭調査研究所年報 1996年度	1997
		滋賀県安土城郭調査研究所年報 1997年度	1998

京都府	京都市歴史資料館	
	京都市歴史資料館年報 平成11年度事業計画・平成10年度事業報告	1999
	神京府埋蔵文化財調査研究センター	
	京都府埋蔵文化財情報 第71号	1999
	京都府埋蔵文化財情報 第72号	1999
	京都府埋蔵文化財情報 第73号	1999
	京都府埋蔵文化財情報 第74号	1999
大阪府	神長岡京市埋蔵文化財センター	
	長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成9年度	1999
大阪府	高槻市教育委員会	
	高槻市文化財年報 平成9年度	1999
	豊中市教育委員会	
	豊中市埋蔵文化財年報 vol. 5	1998
	豊中市埋蔵文化財年報 vol. 6	1999
	津の国 てしま ながめてみよう 奈良・平安時代のとよなかー とよなか文化財ブックレット№7	1999
	文化財ニュース 豊中 №25	1998
	文化財ニュース 豊中 №26	1998
	大阪大学文学部	
	古墳時代首長系譜変動パターンとの比較研究	1999
	国家形成期の考古学	一大阪大学考古学研究室10周年記念論集一
大阪府	大谷女子大学資料館	
	収蔵品図録Ⅴー鏡鑑2ー	1999
	博物館だより	1999
兵庫県	尼崎市教育委員会	
	尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成6年度	1999
	道跡分布地図及び手引き	1999
	姫路市教育委員会	
	TSUBOHORI 平成6年度(1994) 姫路市埋蔵文化財調査略報	1996
兵庫県	TSUBOHORI 平成9年度(1997) 姫路市埋蔵文化財調査略報	1999
	妙見山道跡調査会	
	兵庫鉾業史の研究1 (特集) 兵庫県の鉾山・鉾物辞典	1994
奈良県	飛鳥資料館	
	幻のおおでらー百済大寺	1999
	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター	
	埋蔵文化財ニュース88	道跡復元整備事例集
	埋蔵文化財ニュース89	1997年度 埋蔵文化財関係統計資料
	埋蔵文化財ニュース90	古代豪族居宅道跡関係文献目録
	埋蔵文化財ニュース91	報告書の図版
	奈良市教育委員会	
	奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1997	1998
	奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1998	1999
奈良県	神由良大和古代文化研究協会	
	研究紀要 第5集	1999
	天理大学考古学研究室	
	古事 天理大学考古学研究室紀要第3冊	1999
岡山県	岡山市教育委員会	
	岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997 平成9年度	1999
	倉敷埋蔵文化財センター	
	倉敷埋蔵文化財センター年報 5	1998

広島県	広島市郷土資料館		
	農山村部の暮らし 林業編	広島市郷土資料館 資料解説書 第13集	1999
	暮らしの中のあかり	広島市郷土資料館 資料解説書 第14集	1999
	神広島市文化財団		
	第21回文化財展 匠の考古学 ―日本の巨大建築を掘る―		1999
神東広島市文化財団	文化科学部文化財課		
	ガラスの勾玉づくり	平成10年度 考古学教室記録集	1999
山口県	下関市立考古博物館		
	下関市立考古博物館年報4		1999
	研究紀要 第3号		1999
	弥生の装い	平成11年度 企画展 ―アケササリとその呪術性―	1999
愛媛県	財喜媛県埋蔵文化財調査センター		
	愛比売 平成7～10年度 年報		1999
	しまなみ海道路跡展		1999
	松山市教育委員会・松松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター		
	松山市埋蔵文化財調査年報 11 平成10年度		1999
	松山市考古館		
福岡県	平成10年度 特別展 魂のゆくえ ～検証、古代瀬戸内の精神文化～		1998
	福岡県教育委員会		
福岡県	福岡県埋蔵文化財発掘調査年報 ―平成8年度―		1999
	ふるさと館ちくしの		
	岡田地区道跡を掘る 古代官道と岡田の関	ふるさと館ちくしの 春の企画展	1999
	筑紫野市歴史博物館 ふるさと館ちくしの開館一周年記念企画展 民族料理はいかが？		1999
	筑紫野市教育委員会		
	武蔵寺と二日市温泉	ふるさと館ちくしの開館記念特別展	1998
	伊都歴史資料館		
	佑上城とその時代		1999
	王塚装飾古墳館		
	王塚装飾古墳館		1999
	苅田町・苅田町教育委員会		
	豊前地方の旧石器と平尾台産出の動物化石群	後期更新世と旧石器時代 (縄文時代早期～草創期を含む)	1999
	甘木歴史資料館		
	甘木歴史資料館報	第1集	1999
	神北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室		
大野城市教育委員会	埋蔵文化財調査室年報15 平成9年度		1999
	研究紀要―第13号―(埋蔵文化財調査室 開設20周年記念特集号)		1999
福岡市教育委員会	大野城市の文化財		1999
	博物館等建設推進九州会議		
	文明のクロスロード Museum Kyusyu		1999
	文明のクロスロード Museum Kyusyu	特集 大宰府の運営	1999
福岡市教育委員会	文明のクロスロード Museum Kyusyu	館を考える	1999
	福岡市埋蔵文化財年報Vol.12 ―平成9(1997)年度―		1999
北九州市教育委員会	北九州市埋蔵文化財分布地図(小倉南区)		1995
	北九州市埋蔵文化財分布地図(小倉北区・門司区・離島)		1998
	北九州市埋蔵文化財分布地図(若松区・戸畑区・八幡東区)		1997
	研究紀要 Vol.6		1999

長崎県	長崎県教育委員会		
	原の辻遺跡シンポジウムⅢ ―支国と魏志倭人伝の国―～弥生の使者たちが今ここに集う～		1999
熊本県	熊本県教育委員会		
	文化財通信くまもと 第16・17合併合	平成7年度～平成10年度 国指定・県指定の新指定文化財特集	1999
	熊本県立美術館		
	第21回熊本の美術展 平安時代の美術	～九州の彫刻を中心に～	1999
	熊本市教育委員会		
	熊本市埋蔵文化財調査年報第2号 ―平成4年度～平成8年度―		1999
大分県	大分県教育委員会		
	大分県 埋蔵文化財年報7 平成9(1997)年度版		1999
	大分県立先哲史料館		
	府内と臼杵から戦国の世界が見える	FUNAI and USUKI Exhibition～都市・貿易・民衆～	1999
	史料館研究紀要 第4号		1999
	宇佐市教育委員会		
	平成十年三月三十一日現在 宇佐市文化財一覧		1998
	緒方町教育委員会		
	緒方町の文化財		1998
	日田市教育委員会		
	平成9年度(1997年)日田市埋蔵文化財年報		1999
	別府大学史学研究会 大分県考古学会		
	考古美術 ―豊後海部の道跡と遺物―		2000
	別府大学文化歴史学科世界文化史研究室		
	世界文化史研究室報告 足(跡)の研究		1999
新日本製鐵株式会社	大分製鐵発電所(9号機)環境影響調査書		1999
	大分市大南地区文化財同好会		
	落穂 第60号		1999
	永富 忠		
	豊後永富家物語		1999
宮崎県	清武町教育委員会		
	安井息軒 その学問の真髄と生涯		1999
	西都市教育委員会		
	平成10年度 西都原古墳研究所・年報 第15号		1999
鹿児島県	鹿児島大学埋蔵文化財調査室		
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報13 平成9年度		1999



文化財愛護シンボルマーク

ひろげた両手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ますぐみ）のイメージを表し、これを三つ重ねることによって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

（昭和41年5月26日決定）

大分市埋蔵文化財調査年報 11

2000

発行日

平成12年12月27日

編集・発行

大分市教育委員会文化財課

大分市荷揚町2番31号

〒870-0025 (097)534-6111

印刷

大分市顕徳町2丁目2-38

関中央印刷
